継ぎ接ぎの魔術師　～“悪”の味方の物語～

戒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
継ぎ接ぎの魔術師　～“悪”の味方の物語～

【Ｎコード】
Ｎ５２６３Ｏ

【作者名】
戒

【あらすじ】
舞台は過去と未来。そして混在する“現在”。
人間ではなく、ダンピールやクルースニク、クドラク等と言った吸血種が住まう世界、グラスティア。
その世界に降り立った、氣功と魔術を繰る一人の人間の少年。

自身の掲げる信念と“悪”をその身に刻み、少年は戦場に立つことを望む。

その世界で生きることを望む少年を待ち構えているものとは……

自称“悪”の味方は、誰が為に剣を振るうか。

プロローグ

真っ暗な空を照らすのは赤々とした炎。

炎と煙によって歪められた空に、本来の色以外の光を放つ太陽があるように見える。

地を埋め尽くすのは瓦礫と死体と悲鳴と炎。

ここで、この街で、巨大な地震が起きたのだ。

激しい揺れとともに大地に立つものすべてを地に縛り付け、あらゆるものを破壊した。

まだ地震が始まって間もないというのにビルも道路も崩壊し、至る所から火の手が上がった。

あとはもう地獄だった。

辺り一面から悲鳴と断末魔が響き渡り、人間の焼けるにおいと血のにおいが充満する。

その中を、一人の男の子―■■■■■―が歩いていた。

背中には大きな傷があり、絶えず血が流れている。

歩く道は瓦礫と剥き出しの鉄で出来た剣山。

周りには、剣山に貫かれた夥しい数の人、人、人。

炎に巻かれ、熱せられた空気が傷を容赦なく痛めつける。

いつ倒れてもおかしくない状態だというのに、■■■■■は歩き続ける。

すべてを失い、今にも死んでしまいそうな、けれど、どこまでも強い意志を宿す瞳が辺りを見ている。

すぐそばで「助けてくれ」と呻く下半身の無い人。

その少し先で同じことを言う、片足の無い人。

■■■■は二人を見比べ、片足の無い人の方へ向かう。

足取りはすでに覚束ず、立っているのが奇跡といってもよかった。

前を通り過ぎていく■■■■■に怨嗟の声を上げる下半身の無い人。

■■■■は耳を塞ぐこともなく歩き、片足の無い人のところに向かう。

時間をかけながらもようやく片足の無い人のところに着いたのだが、■■■■が着いたときにはすでに事切れていた。

■■■■は振り返り、下半身の無い人の方を見る。

そっちの方も事切れたらしく、憎悪に歪んだ顔が■■■■に向けられていた。

■■■■は黙祷するかのように一度目を閉じ、また歩き出す。

それからも同じことの繰り返し。

助かりそうな人に近付けばその人は死に、見捨てた人を助けようとすれば憎悪に歪んだ顔がこちらに向けられている。

辺りには怨嗟の声が響き、逃げることも出来ずただそれを聞き続ける。

いったいどれだけそれを繰り返しただろうか。

ただの一人も助けることが出来なかった。

いや、そもそもいつ倒れてもおかしくない状態の■■■■■にそれを求めるのは酷な話だ。

だが、どう考えても自分のことだけで精一杯のはずなのに、■■■■は生存者を求める。

もしかしたら怖いのかもしれない。

自分一人だけが生き残るという現実が。

自分一人だけが立っているという事実が――

しばらく歩るくと、瓦礫の剣山の終わりが見え始めた。

誰も助けられないのかと思ったその時、数十メートル先になにやら動く人影らしきものが見えた。

目を凝らすと、そこには一人の男がいた。

知ってはいるが、生きていて欲しいとは思わなかった相手だ。

何故ならその男は殺人鬼なのだから。

何故ならその男を街に入れてしまったのは自分だから。

何故ならその男はこの街で百人もの人を殺したのだから。

■■■■■は、覚束ない足取りで男との距離を縮めていく。

一歩。また一歩。と歩を進める毎に、その足取りは力強いものへと

変わっていく。

だんだんとその体に力が漲り、後ろ姿は子供のものとは思えぬほど大きく見える。

すでに男との距離は十数メートルにまで縮み、その姿がはっきりと見えるようになっていた。

男の体は血に汚れ、その身を赤く染めている。

その血の量と付き方を見ればわかる。

あれは返り血だ。

それも何人もの。

男はこの地獄と化した街の中で、生存者を助けるのではなく、殺していたのだ。

そして今この時も、手にしたナイフでまだ息がある人を何度も何度も刺している。

その顔には笑みが張り付いていた。

その顔を見た■■■■■は、近くに転がっていた折れた細い鉄パイプを二本拾い上げ、片手に一本ずつ握り締める。

■■■■■は寒さに震える体に鞭打ち、走り出す。

決して速くはない上に、体が揺れてうまく走れていない。

それでも■■■■■は走り、男の背後から近付いていく。

だが、あと数歩と言うところで男は■■■■■に気付き、振り向き様にナイフを振るう。

とっさのことで■■■■■は反応が遅れ、左手に持った鉄パイプが弾かれた。

弾かれた鉄パイプは■■■■■のこめかみにぶつかり、そこから血が流れ出す。

しかし■■■■■はそれを無視して一歩踏み出し、男の胸を貫いた。

鉄パイプから伝わる、肉を貫く生々しい感触。

男の胸に深々と突き刺さった鉄パイプの端から、勢いよく血が吹き出し、■■■■■の体を濡らしていく。

■■■■■は鉄パイプから手を離し、男を突き飛ばした。

男は何の抵抗も無く倒れていき、ピクリとも動かなくなった。

「ごぼっ」

しかし■■■■■はそれを確認する前に吐血し、視界が暗くなるのを感じた。

それを血が滲むほど強く腕を噛むことで無理矢理押し退け、滅多刺しにされた人の方を見る。

「だれ……か……誰か……この……子、を……」

驚いたことに、その人はまだ生きていた。

止めどなく血を流しながら、もはや見えていないであろう瞳で必死になって人を探す。

その腕の中にまだ息のある赤子がいた。

おそらく、この人はこの赤子の母親なのだろう。

その姿からは、何があっても我が子を守ろうとする母親の愛が感じられた。

■■■■■はその母親の手を握る。

すると、それに気付いた母親はすがりつくような手を掴み、

「この……子を……この子を……お願い……します……」

涙を流しながら訴えかける母親に対して、■■■■■は掠れた声で答える。

「わかった」

それを聞いた母親は、まるで絶望の中で神を目にした信者のような救われた表情をして動かなくなった。

■■■■■はそれを確認すると、母親の腕の中から赤子を取り上げる。

まだ乳離れをして間もないであろう赤子は、少し弱ってきていたがまだ息をしている。

ありがとう。助かってくれて。

■■■■■の胸の中は、その言葉でいっぱいだった。

赤子を抱えて歩きだしてから数十分が経っていた。

■■■■■の体は出血が酷く、肌の色は青白なり小刻みに震えていた。

視界は徐々に霞み始め、再び足取りが覚束なくなってきていたが、今自分が倒れてしまったら腕の中にいる赤子が助からなくなる。それだけは出来ない。せめて、せめてこの子だけでも――

■■■■■はその想いだけで死にたがっている体を動かしていた。

いったいどれだけ歩いただろうか。

瓦礫の剣山が終わりを迎え、救助隊らしき人影が見えてきた。

霞む視界でそれを確認した■■■■■は、赤子を助けるべく無理矢理歩を早める。

一歩一歩、確実に、けれど急いで救助隊のいるところへ向かっていく。

向こうもそれに気付いたらしく、周りの隊員に声をかけながら走ってくる。

それを見た■■■■■は、この子は助かる、と小さな笑みを浮かべた。

「生存者確認!!　生存者――!!」

救助隊が近付いてくる足音も声も、だんだんと聞こえなくなってきたが、この子だけは助かる。ただそれだけが■■■■■を支えていた。

数人の救助隊員がすぐそばまで来て、二人の状態を確認していく。

もう、彼らが何を言っているのか聞き取れなくなっていたが、それでもよかった。

この子が助かるなら――

この子だけは助けれた。■■■■■は救われた気持ちで意識を手放す前に赤子を見た。

見てしまった。

そして気付いてしまった。

否、もっと早くに気付くべきだったのだ。

もう赤子が息をしていないことに。

もう赤子が冷たくなっていることに。

「あ、ああ、っぁぁぁぁぁあああああ――――――――――――!!!!!!」

この大災害での生存者は、彼、ただ一人だった――――

第一話

とある病院の一室で、月夜を眺める一人の少年がいた。

その瞳は、まるで外の世界に憧れを抱いているかのようだ。

しばらく月夜を見ていたが、その羨望を振り切るかのようにカーテンを閉め、病室に目をやる。

少年の病室にはほとんど何もない。

花はもちろん、私物らしい私物もない。あるのは備え付けの設備と、何冊かの本のみだ。

せめて家族からの見舞いの品があっても良さそうなものだが、それすらもなかった。

少年はあの日からここにいて、家族のことも覚えていない。

ただ、死んでいるのはわかっている。

入院費はすでに入院が決まっていたため、先の分まですでに払われていたらしく、病院側としては長年病室を一つ占拠されていることを除けば問題ないらしい。

彼の病気は未知の病であり、不治の病でもあるらしい。何度も検査をし、何度も薬を投与してきたが全く成果が現れなかった。

そのため、医者からも見放され、今では点滴をうちに来る看護士と何かよくわからない薬を投与しに来る医者以外に誰も来ない。

彼はあの日から“病院”の敷地から出たこともなければ、“病院”の外に出たこともない。

それが彼の生活であり、“病室”が彼の世界だ。

「ゴフッ、ゴホッ」

咳き込めば、口の中にドロッとした感触と鉄のにおいが充満する。

口を塞いでいた手にも、赤黒い液体がベッタリとこびりついている。

「もう長くないなら外で生活したいよなぁ。やらなくちゃいかんこ

ともあるし、これ以上、あの医者共のモルモットになる気はさらさらないし」

こびりついた血を適当に拭い、ベッドに入る。

それが、この世界で最後の夜になるとも知らずに……

◆◆◆

ジリジリと肌を焼くような痛みで目が覚めた。

「なっ……んだ、これ……？」

病室の中は赤々と燃え、カーテンはすでに燃え尽き、壁や床なども黒く焼け焦げている。

そこはまさに火の海だった。

「ファックッ！！　いったいどうなってやがっゴフッ！！」

吐血しながらもベッドから立ち上がり、少年は点滴の針を抜き、適

当に止血する。

長い病院生活で伸び放題の髪を、急いでヘアバンドで縛り上げ、もう一つのヘアバンドで前髪を上げる。

床を確認すると、運良く焼けずに残っていたスリッパを履き、布団を一枚手に持つ。

唯一の私物であり、あの子との思い出の品でもある本が焼けて無くなっていくのを見るのは正直辛い。だが、あの子ならこんな時、物よりも自分の命を大事にしろと言うだろう。

少年は、焼けて脆くなっている病室のドアに備え付けのテレビを投げつけて無理矢理壊す。

手に持った布団で体を覆い、残った布団を火の上に敷いて一時的な道にする。

そこから廊下に出ると、思いの外廊下は焼けておらず、なんとか歩くことができた。

自分のいた病室に比べればまだマシだが、早く逃げなければ焼死体になる。それだけは避けたい。

少年は布団で体を庇いながら廊下を走り抜ける。

心臓が早鐘を打ち、喉を熱く鉄臭いモノが這い上がってくる。

それをなんとか押さえつけ、少年は出口へと向かってひた走る。

少年がいた病棟は隔離病棟。しかも最上階である八階だ。

隔離病棟の屋上にはヘリポートが無い上に、燃え方からしておそらく下の階から火が上がってきたのだろう。この病棟にはもはや逃げ場どころか逃げ道もない。

だが、幸いなことに彼のいた病室は病棟同士を繋ぐ通路のすぐそばにあった。

少年はその通路を渡って隣の病棟へと移動する。

記憶が正しければ、確かこの先に屋上へと続く階段があったはずだ。

危なげな足取りながらも、少年は迷うことなく廊下を駆け、階段を

上っていく。

運動を禁止されているのに走ったからであろう。途中、何度か血を吐き、すでに足元がおぼつかない。

だが、少年は足を止めることなく階段を上り詰め、重い鉄の扉をギシギシと言わせながら開いた。

幸いなことに、屋上にはまだ火の手が来ておらず、救助のためのヘリも来ていた。

すでに救助活動が始まっているらしく、けが人や重病者等を優先的にヘリへと運び、飛び立っていく。

今ここにいる人数からして、あと二、三度往復すれば無事に逃げられるだろう。

だが、当然ながら問題も生じていた。

けが人や重病者が先に運び出されることには納得できていたのだろうが、いざその人達がいなくなると人間の醜い本性が現れ始めたのだ。

皆、我先にと、特に体格や力で勝る男達が戻ってきたヘリに群がり、子供だろうが女性だろうが老人だろうが関係なく押しのけ、吹き飛ばし、押し倒していく。

醜い……。

少年の目には、それがとても醜く映った。

それによって何人もけがをし、発作を起こしかける人も出てきた。

救助隊員達も何度も注意をしているが、男達は全くと言っていいほど聞かず、無理にでもヘリへと乗り込もうとしていた。

誰の言葉にも耳を貸さない男達に嫌悪感を抱きながらも、少年はこの状況がなんとかならないかと思案し始める。

力は常人以下。
対人経験がそのもの少ない上に、考え方や価値観が常人と違うらしいので、おそらく説得は不可能。
自分にあるの長きに渡る病院生活と未知の病気。
それと、あの人の思い出だけだ。

いい考えも浮かばなければ、この状況も変わらない。

考えろ、考えろ、考えろっ。

何かいいアイディアが浮かばないかと、辺りを見回す。

だが、そのヒントとなるものが浮かばない。

くそっ。何か、何かないのかっ。

頭蓋の中身を必死になってフル回転させるが、なにも浮かばない。

それどころか、先程後先考えずに走って来た反動が今になってき始めた。

「うぶっ！！」

急いで手で口を押さえたが、勢いがあったためか、指の間から血が吹き出す。

「ぐっ、げほっ、げほっ」

口元を拭い、手についた血を布団で拭う。

……血……布団……？　――――――！！

血を見て何かを思いついたのか、口端から血を流しながら少年はニヤリと笑った。

少年は自分の体のことなど考えずに走り、ヘリへと向かう。

大した距離でもないのに、途中、何度かフラつき血を吐きかけたが、なんとか堪えて救助隊員のそばまで駆け寄る。

「邪魔だ、退いてくれ」

「あ、ちょっとっ」

突然現れ、いきなり自分を押し退けようとする少年に驚いていた隊員だが、少年の服や身に纏っている布団にべっとりと赤い液体がついていることに気付き、慌てだした。

「だっ、大丈夫か！？」

急いで他の隊員に輸血の準備の指示を出し、少年をヘリに入れようとするが、少年はそれを拒絶する。

「うるさいなぁ、邪魔なんだよ」

それだけ言うと、隊員を押し退け、未だうるさく喚きながらヘリに乗り込もうとする男達の頭上に向けて、血のついた布団をいきなり投げつけた。

自分が助かることしか考えていなかった男達は、少年の存在に気付いていなかったため、いとも簡単に視界を奪うことに成功した。

この精神状態の人間は、突然の事態には反応できないはず。そして、次の瞬間にはパニック状態に陥るばずだ。

少年の考え通り、男達の動きは一瞬固まり、その後すぐに悲鳴を上げながら暴れ出し、次々とバランスを崩して倒れ始めた。

それを見届けた少年は、唖然としている隊員に向かって口を開いた。

「女子供をゆうせゴホッ！！　ゴボッ！！」

ビチャビチャビチャッ！！　と大きな音を立てて血の塊を吐き出し、胸を押さえて倒れそうになる。

「本当に大丈夫なのか、君！？」

倒れそうになる少年を支え、隊員は少年の顔色を見る。

「大丈夫。大丈夫だ。いつもの、こと、だから」

まだ呼吸は荒く、顔は青白いのだが、少年は即答し、さっさと体勢を整える。

「いいから、さっさと、女子供を、ヘリに、乗せろ……！」

どこか抗い難い力を発する瞳に、隊員は思わず反射的に頷いた。

「あ、ああ。でも、君も乗らなきゃダメだ」

頷きはしたものの、そこだけは譲れないのか、子供と女性を誘導し

ながら少年も乗せようとする。

しかし、少年は頑として首を縦に振らずこう言ったのだ。

「オレは、余命、半年。おそらく、この……中で、一番、死が近い。オレなんかより、少しでも、長く、生きられる人を、助けるべきだっ……！！」

それを聞いた隊員は目を見開き、一瞬、動きが固まる。

その間に少年はそこから離れ、少し離れた場所で尻餅を着いている老人の元へと足早に寄っていった。

その姿を見た隊員は説得を諦めたのか、少年のあとを追って老人の元へと向かう。

血が足りず、細身の少年には老人一人でも重たいらしく、肩を貸しただけでも大きくフラついている。

「手を貸そう」

先程の隊員が少年の反対側に立ち、老人に肩を貸した。

「礼を言う」

少年は短くそう言うと、隊員と共に老人をヘリへと運ぶ。

救助隊員の迅速な行動により、先程の男達と少年以外は無事ヘリに乗り込み、飛び立っていった。

その頃には、隊員達の説得により男達も落ち着きを取り戻し、自分達も次のヘリが来たらすぐに乗り込めるように準備をし始めていた。

一方、少年はというと、少し離れた場所で壁に背中を預ける形で座っている。

先程と比べると呼吸は大分落ち着いており、血も吐いてはいないのだが、やはり血が足りていないらしく顔色は悪い。

出来るだけ呼吸を調えて、これ以上体力が減らないようにしないとマズいな。

少年はゆっくりと深呼吸を繰り返し、辺りを見回す。

ヘリポートまでの距離はそう長くはない。けど、炎は大分上がってきてる。早くヘリが戻ってこないとここにいる全員が焼死体になるな。

肌を焼く、チリチリとした感触が強くなってきていることに気付き、少年はゆっくりと立ち上がった。

そこから離れ、貯水タンクのそばまで来るとそれにもたれ掛かる。

その状態で数分待っていると、ヘリが再びこの屋上に戻ってきた。

救助隊員の指示に従い、男達はゆっくりとヘリに乗り込んでいく。

少年も、あまり力が入っていない足でそれに続く。

そして、少年が乗り込もうとしたその時、それは起こった。

「なっ、なんだ!?」

ヘリのパイロットがいち早く激しい揺れと轟音に気付き、次いで下の方からは悲鳴が上がる。

それは爆発。屋上の下、つまり病院内で爆発が起こったのだ。

原因は不明だが、その爆発は自然に起きたものではないように見えた。

激しい爆発により、病院は崩れ始め、それに煽られるかのようにヘリが勢いよく飛び上がる。

まだヘリに乗りきれていなかった少年は、屋上の上空から崩れ行く病院へと勢いよく振り落とされた。

振り落とされた少年を助けようとした誰かの手が、ヘリから見えている。

炎の光と夜の闇。コンクリートか何かが崩れるような硬い音。そして流れ行く周りの空。

それらの光景が、全てスローモーションに見える。

病院が崩れるのが先か、自分の体が落ちるスピードが先か。それによって、自分の体の破損具合や叩きつけられた時の衝撃が決まる。

別に恐怖はない。自分の命に、自分の存在に価値を見出したことがないからだろうか、特に何も感じない。

これは異常なのだろうか？　ふと、そんなことを思った。

今までに、比較対象もなければ、誰か指摘してくれる人もいなかった。命や存在について何も知らないわけではない。しっかりと理解している。けれど、昔からこうなのだ。自分のことを卑下しているだけなのかもしれない。

ワカラナイ。

だが、事実として人の命、いや、死について何かを感じたことがない。だからだろうか、自分が死ぬかもしれないのにこんなにも冷静でいられるのは。

少年の瞳には、辛うじて残っている壁と落下途中の大小様々な破片が映っている。

ソシテ、ソノ向コウニアル血色ノ世界ト闇色ノ光モ。

赤い世界と……黒い光……？

本来存在しないはずのモノが、そこにはあった。

世界はどこまでも赤く、照らす光はどこまでも黒い。

そんな、異様な世界が、確かに、少年の目に、映ったのだ。

それは自分を縛り続けているものだと、何故か思った。

見たことがないのに、見タコトガアル。

知らないはずなのに、知ッテイル。

これはなんだ？
コレハアレダ。

ジャラジャラという金属音と、風を切る音が聞こえてくる。

視界の端に、見覚えがないのに、見覚エガアルモノガセマッテイル。

ここは――

「名無しッ！！」

そこまで思考したところで、待ち焦がれたあの子の声が耳に響き、純白の光が体を包む。

そして、少年はその光と共にこの世界から姿を消した。

第二話

まるで羽毛にでも包まれているかのような暖かな感触と、視界を覆い尽くす純白の光。

全身を覆う浮遊感と、高速で移動しているような圧迫感を感じる。

それらは特に体に負担もかからないので気にしてもいないのだが、妙にこの空間は心地いい。

まるで、母親の胎内にいるかのような安心感が心に満ちる。

自分がそんなことを思うことに僅かに驚いたが、この暖かな光の中ならば、きっと残忍な殺人鬼だろうとそう思うだろう。

そう思えるほどに、心から安心できる空間なのだ。ここは。

しかし、どんなに居心地のいい空間でも、終わりはやってくる。

全身に感じていた浮遊感と圧迫感が徐々に薄れていき、完全に無くなった。

光は、まるで花弁が開くかのようにゆっくりとその身を開き、少年に外の世界を見せてくれた。

「ここは……？」

そこには、一面に広がる緑豊かな大地と夕焼けがあった。

どこまでも鮮やかで、幻想的で暖かな世界。

だが、その世界には今まで何度も見てきたあるものが欠けていた。

「そうか、太陽が無いんだ」

そう。そこには、太陽が無いのだ。

ただ、美しく幻想的な大地と夕焼け色の空が広がる幻想郷。

少年が辿り着いた世界はそんな世界。

何故か見覚えがあり、どこか懐かしい。

知らないはずなのに知っている気がして、見たことがないのに見たことがある気がして、来たことがないのに来たことがある。そんな懐かしい世界。

自分はきっと、遠い昔にここに来たことがあるのだろう。

何故か自然とそう思えた。

純白の花が、ゆっくりと大地に降り、その役目を終える。

それと同時に背後から足音が聞こえ、八年ぶりに聞く懐かしい声が、耳に響いた。

「久しいのぅ、名無し」

「せん……せい……？」

少年の後ろには、美しい純白の女性が立っていた。

上は白く下は青い、金の刺繍が入ったドレスを身にまとう、二十歳

頃の女性。

夕焼け色の中に、白い肌と地に着きそうなほど長い白髪が風に揺られ、神秘的な紫色の瞳が少年をとらえている。

「わしじゃ。覚えておるか？」

「はい、先生！」

たとえ何年経とうとも、決して見間違えない。

あの子は、先生は、自分にとって唯一の友人であり、自分をちゃんと見てくれた人であり、いろいろなことを教えてくれた人だ。忘れられるはずもない。

「そうか！」

子供のように無邪気な笑顔を浮かべ、腕を広げる。

少年も再会の感動から、先生に抱きつこうとしたその時、

「ひっさしぶり～～！」

「ぐぼほっ！？」

小さな飛来物により、感動の抱擁は遮られた。

「がはっ」

少年は草の中へとその身を沈め、先生は唖然とした表情をしている。

「久しぶりだね～」

その中で一人、この状態を作り上げた元凶は嬉々とした表情で少年の腹の上、つまり、マウントポジションをとっていた。

「せ、先生。誰ですか、この子は？」

「さ、さぁ？　わしも初めてじゃからのぅ」

二人は首を傾げていたのだが、そんなことはお構いなしに、元凶たる少女は、少年の上で嬉しそうに少年の体をペタペタ触っている。

「ていうか、いい加減退いてくれ」

「んにゃ？　……あっ、ごみんごみん」

少女はちょろっと舌を出すと、少年の上から退いてくれた。

「ふぅ～、危うく血吐くところだった」

少年はゆっくりと体を起こし、先生を、続いて少女を見る。

見覚え……ないんだけど、なんか、懐かしいような気がするんだよなぁ。

少年は首を傾げるのだが、記憶のどこにも少女の影がない。

先生と話したいことがたくさんあるけど、まずはこの子の方を何とかしないとね。

頭の中でそうまとめると、少年は少女の方に向き直り、口を開いた。

「んで、君は誰？」

「にゃぅわっ！？　リ、リムちゃんのことを忘れちゃったの！？」

「……リムちゃん？」

その名前に聞き覚えの無い少年は、首を傾げる。

それを見た少女は、「しょーっく！！」と言いながら崩れ落ち、芝居がかった動きでよよよっ、と泣き出す。

もちろん、時折ちらちらと少年の様子を窺うことを忘れない。

「この、ぷりちーなリムちゃんを……ぷりちーなリムちゃんのことを忘れてるなんて……！！」

「なんだ？　そのぷりちーって」

少年は少女に問うが、返事は返ってこない。

ただ、少女の口からは、「こんなにもぷりちーなのに。こんなにもぷりちーなのに。こんなにもぷりちーなのに……」という言葉だけが紡がれていた。

「なんなんですかね、この小学生」

「いや、小学生と言うわけではないじゃろぅに」

「そう！　ボクは小学生じゃない！　立派なれでぃーなんだよ！」

いつの間にか復活した少女が、無い胸を強調するかのように胸を張っている。

「……いや、どっからどう見ても、どの角度からどう見ようとも小学生サイズだろ。例え、天地がひっくり返ろうともこの事実だけは変わらないね」

「にゃっ、にゃんですとぅっ！？」

ピシャァァァン！！　という効果音が聞こえてきそうなほど、少女はショックを受けた表情で固まる。

その場でがっくりと膝を落とし、地に手をつけ、泣き始めた。

もちろん嘘泣きである。

だが、その嘘泣きがあまりにも上手いため、少年ではなく、先生の方が騙され、少女の心配をし始めた。

おろおろ、あたふたしながら少女を慰めようとしている先生を見て、少年は必死で笑いを堪えていた。

自分も小さい時に、検査や薬、手術が嫌で嘘泣きをして逃げようとしたことがあった。最も、すぐにバレてしまったのだが。

なので、たとえどんなに上手い嘘泣きであろうとも、同じことを何度もしたことがある自分には通用しないのだ。

「の、のぅ、名無し」

どこか疲れたような表情で少年を呼ぶ。

「どうしたんですか？　先生」

何故そんな状態になったのか、大体わかっているのだが、少年はあえて訊いた。

表面上は先程と変わらぬ表情をしているのだが、腹の中では笑いを必死になって堪えていた。

「彼女が泣き止まぬのじゃ」

ぐったりとした様子で、未だに嘘泣きを続ける少女を指差す。

その表情は、本当に困っており、少年は余計に笑いがこみ上げてきた。

「せ、先生は気付いていないんですか？」

少年は、今にも吹き出しそうになりながらも、先生と問う。

「な、なにをじゃ？」

少年の声が僅かに震えていたため、自分が何か悪いことをしたのではないだろうか、と思い始める先生。

その瞳には、不安の色が浮かんでいる。

少年が口を開くのを固唾を飲んで待つ先生。

その目があまりにも必死なため、ついに少年は我慢しきれなくなり、笑いだしてしまった。

「どっ、どうしたのじゃ！？」

先生は、何故少年が笑いだしたのかわからず、余計に狼狽する。

それを見てさらに笑い、腹を抱えて転げ回る。

「あひゃひゃひゃっ、あひゃっ、あっ、ごほっ、ごほっ、ゴボッ！！」

笑い過ぎて咳き込み、それが原因で血を吐き出す。

「げほっ、ごほっ、ごほっ。っぁああ～」

「だ、大丈夫か！？」

「ふぅ～、大丈夫ですよ、先生」

口元を拭いながら笑うのだが、先程の体当たりによって髪を上げていたヘアバンドが外れてしまっていたため、顔の半分が髪で隠れて口元しか表情が見えなかった。

それに後ろの髪は地面に着くほど長く、細い体を隠してしまうため、まるで幽霊のようだ。

そう思えてしまうほどに、少年の体は細く、生気を感じられないのだ。しかも口端から僅かに血が滴っているため、本物の幽霊に見えなくもない。現に、

「にょわぁぁぁ！！　ゆっ、幽霊ぃぃぃぃぃッ！！」

魂からの悲鳴を上げて気絶した少女がいるのだ、ここに。

第三話

気絶した少女を揺すってみるが、起きる気配がない。

それを確認した少年は、ヘアバンドで前髪を上げなら先生の方を向いた。

「先生。先程から気になってたんですが、ここはどこですか？」

「実はわしにもよくわからぬのじゃ」

「え？」

先生は首を捻りながら辺りを見回し、再び少年に目を向ける。

「わしはお主を、わしが生まれた世界に連れて行ってあることを手伝って、いや、やってもらおうと思っていたのじゃが、何故かお主が飛んだ先がここじゃったのじゃ。慌ててこの世界に飛んで来たのじゃが、わしもこのような世界は見たこと無いのでよくわからぬのじゃ」

先生は頻りに首を傾げ、う〜ん、と唸っている。

「もしかしたら、ここはお主の魂の拠り所なのかもしれぬ」

「どういうことですか？」

少年は問うが、先生はその問いに答えず、逆に少年に質問をしてきた。

「名無し。お主、体に何か異常はあるか？」

真面目な表情で問う。

少年は、そんな先生に疑問を抱きながらもしっかりと答えた。

「今し方、血を吐いた以外は特には……」

「そうか……」

先生は眉間にしわを寄せ、再び考え込む。

「あっ、でも」

「なんじゃ？　他に何かあるのか？」

「はい。その、なんて言うか。感覚的なものなんですが……」

「言うてみ？」

少年は頷き、少し考えるような仕草をした後、ゆっくりと口を開いた。

「今まで感じていた圧迫感や息苦しさ、拒絶感などをあまり感じないんです」

「……その症状は、もしや世界からの排他によるものでは？」

「なんですか？　その、世界からの排他って」

そのことを少年に話すべきかどうか、一瞬だけ悩んだが、これから行く世界でも同じ症状がでる可能性も捨てきれないので、あまり気が進まないながらも口を開いた。

「それはのぅ、その存在そのものを世界が許さないときに起きるものじゃ。その度合いによって症状が違うのじゃが、お主の症状や体のことを考えると、排他のレベルは最大じゃったようじゃな」

「体にも影響が出るんですか？」

「うむ。ケガをしやすかったり、病気になりやすかったりと症状は様々じゃが、お主のように体がボロボロになるほどのものは一度しか見たことがない」

まるで自分の家族を心配かのような表情で、先生は少年の頬を撫でる。

その表情を見た少年は、何も言わずに撫でられることにした。

「のぅ、名無し」

「なんですか？」

「お主にやってもらいたいことがあるのじゃが、聞いてくれぬか？もちろん、拒否しても構わんからのぅ？」

少年は頷き、先生の目を見る。

このまま立ち話をするのもなんなので、二人は座って話すことにした。

「本当はあっちの世界を見せてから話をするつもりじゃったが、先で構わんかのぅ？」

「はい」

少年は先生の目を見たまま頷く。

「まず、あっちの世界についてじゃが、あそこには人間はいないのじゃ」

「え？　じゃあ、何が住んでいるんですか？」

「吸血鬼じゃ」

「吸血鬼……ですか……」

先生は、うむ、と頷き先を続けた。

「吸血鬼と言っても、ほとんどはダンピールじゃ。高い身体能力と回復能力を持っておる。希に不老、もしくはそれに近い寿命を持つ者もおるのぅ」

「ダンピール……。確か、混血で吸血鬼ハンターを生業とする者たちのことですよね？」

「うむ。吸血鬼を殺すことが出来る、フィアマと言う特殊な鉱石から造った武器を扱えるからのぅ」

先生は小さく何かを呟くと、その手に白い光とともに拳大の鉱石が現れた。

「持ってみ」

そう言って、先生はその鉱石を地面に置く。

特に何も考えず、少年はその鉱石に手を伸ばした。

「ほんのり、暖かいですね」

鉱石を握り、その暖かさを確認した後、ゆっくりと持ち上げる。

「うをっ！？　お、重いですね」

少年は常人より筋力が弱いが、それを差し引いても重さが伝わるほど、少年の腕は震えていた。

「この鉱石はのぅ、吸血鬼の血を焼く力を持っておるのじゃ。じゃが、それを扱うには混血の血が必要でのぅ」

先生は、震える少年の手から鉱石を取ると、また小さく何かを呟いて白い光とともに鉱石を消した。

「じゃから吸血鬼ハンターはダンピールが多いのじゃ」

「ってことは、ほかにも吸血鬼がいるんですか？」

「うむ、もちろんじゃ。ダンピールがいる以上吸血鬼もおる。それ以外にも、クルースニクやクドラク、グールもおる」

「……人間はいないんですね」

「うむ。滅んでしもうた」

あっさりと人間は滅んだという先生。

少年は、これから行く世界には自分以外に人間がいないと聞いて、どこか楽しそうに笑っていた。

「人種についてはそれくらいじゃ」

先生は一度深呼吸をする。

少年も軽く伸びをし、再び話を聞く姿勢をとる。

「次に、あっちの世界の大陸は浮いておる。もちろん、大陸の下は海じゃ」

「浮いてるって……大陸が、ですよね？」

「うむ。大陸が、じゃ」

少年は、右目を閉じてその世界の光景をの中頭にイメージし始めた。

「世界をイメージしたいんで、詳しく教えてくれませんか？」

「うむ、よかろう。まず、大陸が三つと、小さな島がいくつかあるのじゃが、小さい方には人は住んでおらぬ。三つの大陸には一つずつ国があってのぅ、お主のいた世界のように惑星が自転しているのではなく、大陸が動いておるのじゃ」

地平線まで広がる海と、浮遊する大陸を基盤に世界を構築する。

「あっちの世界の未来の文化レベルはお主のいた世界と大して変わらぬ。じゃが、争いはお主のいた世界よりも多いのじゃ。吸血鬼との戦いはもちろんじゃが、国同士の争いが絶えぬため、荒廃してしもうた土地もある」

大陸の一部を荒廃させ、現代と同じような建物を乱立させ――

「って、未来？」

まるで、構築途中のイメージをその状態で固定しておくかのように、右目を閉じたまま先生に問う。

「うむ？　言ってなかったかのぅ？　あっちの世界、グラスティアは過去と未来しか存在していないのじゃ」

「……現在（イマ）は？」

「……無いのじゃ……」

悲しそうで、辛そうで、苦しそうで……
まるで、何かに許しを請うかのような……
まるで何かに助けを求めるかのような……
そんな表情をしている。

「そうですか。では、その未来の姿は、今、先生が言った通りなんですね？」

その表情を見ても、少年の表情には特に変化がなかったため、何も言わずにいるのか、何も感じていないのか、わからなかった。

少年のそんな反応に、何かを感じたのか、あるいは、何か思い出したのか、先生は気持ちを切り替え話を続ける。

「うむ」

「そうですか」

イメージの構築を再開する。

おおよそのイメージを固めることが出来たのか、少年は右目を開いた。

「その世界の大体のイメージは掴めました」

「そうか。では、次に過去についてじゃが――」

「その前に一つ、質問があります」

「うむ？　なんじゃ？」

「もしかして、未来だけじゃなくて過去にも行くんですか？」

「うむ。その通りじゃが……嫌じゃったかのぅ？」

「いえ、それはそれでおもしろそうですから」

少年は、本当に楽しそうな笑みを浮かべている。

「うむ、そうかそうか」

先生はうんうんと頷き、話の続きを始めた。

「それで、過去についてじゃが、文化レベル以外には特に違いは無いのぅ。お主のいた世界の、中世とあまり変わらぬ石造りの街並みと城があるのじゃ。それから、大陸の数が増えておる。もちろん、国の数もじゃ」

少年は再び右目を閉じ、イメージを構築する。

石造りの街並み、城、騎士、馬、民衆、貴族。自分が知りうる情報を元に、世界を構築する。

「大体のイメージが掴めました」

「うむ？　早いのぅ」

「数少ない暇つぶしでしたから」

ははははっ、と恥ずかしそうに笑う少年。

しかし、先生は笑うことなく、真面目な顔でとんでもないことを言ってきた。

「いや、イメージを構築する力は魔術を扱う上では必要な力じゃ。恥じることはない」

「……はい？　魔術？」

「うむ？　昔、言わなかったかのぅ。お主には魔術を使えるようになってもらいたいと」

少年は目をパチパチさせながら、必死に記憶を探っていく。

しかし、少年にはそんなことを言われた記憶はない。

「やっぱり、言われた記憶はありませんけど」

「……言ってなかったかのぅ？」

「はい、言われた記憶はありません。一応、記憶力には自信ありますけど」

「むむむっ」

唸り、首を捻る先生。

しばらく唸っていたが、言ったか言ってないか思い出せないらしく、小さくため息を吐く。

少年は少年で、何故魔術という単語が出てきたのかを悩んでいた。

「先生」

「なんじゃ？」

「何故、魔術を使えるようにならないといけないんですか？」

昔、先生が自分のことを“根源の魔女”って名乗ったのは覚えてるし、魔術とかを見せてもらったこともあるけど、ああいう力を使える人は限られてるんじゃいのか？

「……お主は、ただの人間が吸血鬼の血を引く者や英雄と呼ばれる者たちと互角に渡り合えるとでも思っておるのか？」

「いえ、思ってませんよ。今のままでは、先生のいう、ただの人間にすら負けますからね」

そう、わかってる。わかっているだ。自分にはそんな力はないことを。でも、もし、もし、あるのなら、その道を走り続けたい。

そう、強く願う。

理由はもちろんある。

目を閉じれば広がる血塗られたあの世界とあの光景。そして、昔先生が話してくれた戦争の話。

自身の根底にある、あの世界とあの光景を彷彿させるものが、戦争。

それを止めたい。

少しでも犠牲者を減らしたい。

あんな光景は、あの世界は、自分だけが見ていればいい。

だから力が必要なんだ。

自分みたいに弱い奴は、最初の一歩目から己の性能の限界である最高速で、それでいてそこからさらに加速し続けなければそんな奴らとは渡り合えない。

故に、それに耐えられる肉体とそれを行える力が必要だ。

「先生。自分にも魔術を扱うことはできますか？」

それ故に問う。

己の持つものだけでは決して届かぬ高みに至るため、得られるもの

は、すべて得る。使えるものは、すべて使う。

それは揺るがぬ意志だ。

例えそれが叶わぬ幻想であろうとも……

そしてもう一度問う。

自分にも魔術は扱えるのか、と。

気がつけば、先生は何かを見定めるかのように少年の顔をジッと見つめていた。

少年も、その黒い瞳を紫の瞳に向ける。

十秒ほど見つめ合った後、先生は口元を緩めた。

「お主に渡した十冊の本を覚えておるか？」

「もちろん覚えてますけど……。それがなにか？」

少年は首を傾げ、先生の目を見る。

「実はのぅ、あの本は魔力を流すための回路が存在するかどうかを判断することが出来る霊装じゃったのじゃよ」

「……霊装？」

「うむ。魔術師が扱う道具の総称じゃ」

あの本は魔術に関係する物だったのか……

少年が本のことを思い出していると、先生が小さく何かを呟く。

すると、二人の間に十冊の本が現れた。

一冊が千ページはありそうな分厚い本。

それは今まで何度も読み返してきたあの本だ。

内容はすべて違い、字が書いてあるページの枚数が変動する変わっ

た本。

当時は不思議な本くらいにしか思っていなかったが、今思えばあれには確かに魔術の産物だ。

先生は本を手に取り、ゆっくりとページを開く。

「お主は何ページ読めたのじゃ？」

「えっと～。確かぁ、六百ページでしたね。一日一冊だけしか字はありませんでしたけど」

「ふむ」

顎に手を当て、悩む仕草を見せる。

「あっ、でも」

「ん？　なんじゃ？」

先生が悩んでいる間になにかを思い出したのか、少年はこめかみを

中指で押しながら口を開いた。

「一冊ずつ読んでるときは六百ページだけでしたが、その後に他の本を読もうと思ってたときは二冊目にも字は出てました。ただ、読めるページ数は一定ではありませんでしたけどね」

苦笑しながら本を手に取りページを開く。

「……回路が安定しておらぬのか？　いやしかし、回路がその時々によって増減するなど……」

なにやらぶつぶつと呟く先生。

少年は、先生の考えがまとまるまでの間の暇つぶしとして本を読み始めた。

本の内容は聖剣や魔剣、聖槍や魔槍、さらには魔弾などについても記されている。

少年は一つ一つ丁寧に読み、先生を待つ。

三十分ほど経った頃、先生から声をかけられた。

「お主の回路についてはまだ色々と調べねばならぬのじゃが、とりあえず常時六本の回路があることがわかった」

「回路が六本って、少ないんですよね？」

「うむ。かなり少ないのぅ」

結構少ない。その言葉を聞いた少年は、自分の弱さに思わず唇を噛む。

「通常の魔術師は四～五十本はあるのに対して、お主は六本。これじゃとかなり少ないんじゃ。しかも、どれだけ魔術師として成長しても回路は増えんのじゃ」

「……」

少年は静かに目を閉じ、ゆっくりと口を開いた。

「先生。今から魔術を教えて下さい」

強い意志を宿した瞳で、静かに訴える。

「今すぐに、か？」

「はい。今すぐに、です。自分に残された時間もあまり長くはないでしょうから」

「……」

しばらく悩むような仕草を見せていたが、少年のまっすぐな瞳に負けたのか、小さくため息を吐く。

「お主は、何故力を求める？」

自分で魔術を扱えるようになれと言っておきながら、先生は何故力を求めるのか？　と訊いてくる。

「あの世界を誰にも見せたくない。あの光景を、もう二度と現実のものにしたくない。だから、力が欲しいんです」

「……あの？」

先生は何のことを言っているのかわからないらしく、首を傾げる。

「その世界と光景というのは――」

いったい何なのじゃ？　そう問おうとしたが、少年の目があまりにも辛そうなので先生は口を閉ざす。

「まぁ、なんにせよ。お主がグラスティアに来るというのなら、力が無ければ生きてゆけぬからのぅ」

力。それは少年が一番求めているものであり、一番足りないものでもあった。

少年は一度目を閉じ言葉を選んだ後、ゆっくりと口を開いた。

「自分は、初めからグラスティアに行くつもりでしたし、先生の言うやって欲しいことというのも初めからやるつもりでした。ですから、魔術を教えて下さい」

お願いします、と深々と頭を下げる。

「どんなことをするのかわからぬのにか？」

「戦争……ですよね？」

まるでそうだと確信しているかのような口振りである。

「……」

その沈黙を肯定と受け取り、少年は続ける。

「先生ほどの人が頼んでくるってことは、一人では難しい。あるいは、その戦争に介入できない理由があるからじゃないですか？　しかも魔術的な力が関係するような代物……とか？」

「……鋭いのぅ」

小さくため息を吐く。

「先生？」

僅かに俯く先生の顔をのぞき込む。

それに気付いた先生はゆっくりと顔を上げ、小さく微笑んだ。

「お主の言う通り、魔術的な力が関係する特殊な戦争じゃ。わしはあの戦争に介入できぬ。もし出来るとしたら、それは死ぬ時じゃろう」

己の無力さをあざ笑うかのように顔を歪める。

「しかも、あの戦争はグラスティアの“現在”で行われておる」

「“現在”？　え？　でも、現在は……」

“現在”。それは少し前に先生自身が無いと言ったばかりの時間軸だ。

だが、それを彼女は在ると言ったのだ。

「“現在”はのぅ、過去と未来を無理矢理混在させた空間で、十字戦争と呼ばれる戦争の舞台となっておるのじゃ」

「十字戦争……」

小さく、反芻する。

「十字戦争には、全平行世界及び全異世界の英雄と反英雄、そして悪鬼邪霊と呼ばれる類のモノが集められ、戦い続けておる。それはまさに、人外の戦争じゃ」

「……」

人知れず、口端がつり上がる。

「それだけではない。十字戦争の最終的な勝者には、永遠に等しき命、異世界及び平行世界を渡る能力、時間を行き来する霊装が与えられるのじゃ」

「そんな……。それじゃあ、歴史が意のままに変えられてしまうじゃないですかっ！！」

歴史を意のままに変えられる力。それは神にも等しき、人間が持ってはいけない力だ。

「うむ。お主の言う通りじゃ。じゃがのぅ、世界の歴史とはそう簡単には変わらぬものなのじゃ」

「え？」

「歴史はのぅ、多少の歪みなどものともせず、本来の道を進んでいくのじゃ」

悲しそうに空を見上げる。

まるで過去に歴史を変えようとしたことがあるかのような口振りである。

少年はその事について聞くことはせず、先を待つ。

「すまぬ、少し……」

その先の言葉は聞こえなかった。

少年も何も聞かず、空を見る。

夕焼け色の空はとても美しく、心を綺麗に洗い流してくれる。

数秒ほど空を見上げていると、後ろから猫の鳴き声のような声が聞こえてきた。

「にゃうわっち！！」

気絶していた少女が勢い良く起き上がる。

「リムちゃん！　すーぱーぐれーとハァァグ！！」

「ぐわっ！？」

そしていきなり少年にハグと言う名の体当たりをかましてきた。

「ムフフフっ。このリムちゃん様から逃げられるとでも思っとりまするかぁ！」

「だから君は誰だ！」

「第二位の妖精、デルフリム様にゃっ！！」

高々と拳を振り上げ、声を大にして名乗り上げる少女、デルフリム。

「……第二位？　妖精？」

何を言ってるんだ？　このロング桃毛は。

「あ、今疑ってるでしょ」

「疑う依然に意味分からん。説明を要求する」

「しかたにゃいなぁ～、このデルフリム様自らが直々に教えてやろう！」

デルフリムは腰まである長い桃色の髪をかきあげ、髪と同じ桃色の瞳を少年に向けると口を開いた。

「まずね、妖精は自然界のどこにでも存在するんだよ。妖精は植物とか水とか光とかから生まれるんだぁ。
あ、けどね、高位の妖精。つまり、ボクみたいに位を持ってる妖精はね、強い力を持ってるの。とゆうより、強い力を持ってる妖精が位を与えられるの」

「つまり、デルフリムは何かしら強い力を持ってるってわけか」

「そゆこと～」

満面の笑みで少年に抱きつくデルフリム。

抱きつかれた少年は戸惑い、どうしていいのか分からず、なすがままになっていた。

第四話

デルフリムは抱きついたまま、少年の額に自分の額を押し当てる。

「ねぇねぇ、グラスティアに行くってホント？」

「えっ、聞いてたの？」

「うん！」

にこにこ笑顔で元気よく答えるデルフリム。

見ているこちらまで元気になりそうな笑顔である。

「そんな少年に、リムちゃんが更にグラスティアの事を教えて差し上げましょう！」

「……今先生から聞いたばっかりなんだけど……」

「だから、更にってゆってるでしょ？」

ぷくっと頬を膨らませ、不満を表す。

「ごめん、ごめん」

子供をあやすようにデルフリムの頭を撫でる。

「ぶー、ぶー」

最初は、子供扱いされていることに不満そうに口を尖らせていたが、だんだんと心地良さそうな表情へと変わっていく。

「んにゃにゃ～」

気がつけば、嬉しそうに笑っていた。

「で、更なるグラスティアの説明って？」

「あっ、うん。グラスティアはね、過去と未来が不定期的に入れ替わるの」

「入れ替わる？」

「そっ、入れ替わるのにゃ」

にゃー、にゃー、と鳴きながら少年の膝の上で体を揺らす。

「入れ替わる……」

その言葉を反芻する。

入れ替わる……。それはどんな現象なんだ？　何がどう入れ替わるんだ？

考えるには、情報が少ない。

少年は小さく息を吐き、デルフリムに訊いた。

「入れ替わるって、どう入れ替わるんだ？」

「んー、と、ねぇ。んー……、難しいにゃあ」

うんうん唸りながら頭を抱え、悩む。

（どう説明すればいいのかにゃー。にゃー、にゃー、にゃー、にゃー、にゃー、にゃー、にゃーっ！）

良い説明方法が思いついたのか、パッと顔を上げ、デルフリムは口を開いた。

「あのね、ちょっと分かりにくいかもしれないけどぉ、いいかにゃ？」

「いいよ」

少年の即答に、デルフリムは若干驚きの表情を作る。

だが、それもすぐに消え、説明を始めた。

「例えばね、未来のグラスティアで偉い人なら過去のグラスティアでも同じくらい偉い人なの。
それにね、未来でAさんがBさんと友達だとしたら、過去でもAさんはBさんの友達なの」

身振り手振りで一生懸命説明するデルフリム。

その説明に、難しそうな顔をしながらも少年は口を開いた。

「あーっと、つまり、だ。親類縁者や知人友人関係は変わらず、身分や位の表示が変わったりするくらいで、他は特には変わらないって事？」

「ん～、まぁそんなとこかにゃー。まぁ、行ってみればわかるよー」

まぁ、確かに百聞は一見に如かずって言うし、行ってみればわかるか。

「過去と未来の世界、グラスティア。昼と夜みたいなもんかな？」

「んにゃ？　昼と夜？」

少年の呟きに、デルフリムは小首を傾げる。

「ん？　ああ。なんかぁ、グラスティアって昼と夜みたいな世界かなって思ってね」

「どゆこと？」

「あーっと。未来を昼に例えて、過去を夜に例えるとするとね、昼と夜とじゃ同じ場所でもものが違う姿で見えるでしょ？　それと同じかなって」

「おー。確かにそんな感じだねー」

うんうんと頷くデルフリム。

どうやら納得できる例えのようだ。

「更に言うなら、自分みたいに別世界から来た人間にとって、その未来と過去の繋がりがない。だから知らない世界に見える」

確認を取るために、デルフリムの方を見る。

デルフリムは頷き、肯定する。

「うん。確かに、別世界から来た人にとっては知らない世界だね」

それを聞いた少年は、小さく頷く。

「で、例えば、自分みたいに別世界から来た人を、日が昇ってから起きて日が沈む前に寝てる人に例えると、その人は昼は知ってるけど夜は知らない。つまり、知らない世界って事になる。要はそれと同じって事でしょ？」

「う～ん。難しいにゃあ」

今度の例えはデルフリムには理解できなかったようだ。

少年は少し悩んだ後、また違う例えを口にした。

「んじゃあ、例えば、暗殺者とターゲットがいたとします」

「ふむふむ？」

「暗殺者はターゲットの事を知っていますが、ターゲットは暗殺者の事を知りません。そしてある日、ターゲットが暗殺者に殺されてしまいました。ターゲットは誰に殺されたかわかも、死んだことも理解出来ませんでした。しかし、暗殺者はそのターゲットの生と死

を知っています。この暗殺者を世界。ターゲットの生と死を過去と未来。そしてターゲットを自分とすると、どうかな？」

「ん～～……？　分かるような分からにゃいような～」

首を大きく傾け、捻る。

少年も、これ以上どう言っていいのか分からず、悩む。

「んでも、大体は理解できてるみたいだからいいかにゃー」

そう言ってデルフリムは満面の笑みを浮かべる。

少年も小さく微笑み、この話を打ち切った。

「話は終わったかのぅ」

「先生！」

「んにゃ？」

いつの間にか二人の隣に来ていた先生が腰を下ろす。

「えっと、お主は……」

「第二位の妖精、デルフリムだよ。根源の魔女さん？」

何故か挑戦的な笑みを浮かべるデルフリム。

「わしのことを知っておるのか……。それに第二位の妖精とはのぅ」

先生は僅かに目を開き、驚きの表情を作っている。

果たしてそれは、自分のことを知っていることになのか。それとも、第二位の妖精ということになのか。

それは本人にしか分からない。

――と、驚いている先生に、少年は声をかけた。

「先生。先程の十字戦争についてもう少し教えてくれませんか？

“現在”への行き方とか、何をすればいいのか、とか」

「うむ。よかろう」

先程までの驚きの表情は消え、先生は説明をし始めた。

「まず、“現在”への行き方じゃがのぅ。お主が英雄、あるいは反英雄と呼ばれるほどのものになっておれば参加資格はあるのじゃが、お主は英雄でも反英雄でもない。つまり、今のままではお主に参加資格は無い、ということじゃ」

「え？　でもそれじゃあ、戦争に参加できないじゃないですかっ」

「まぁ、待て」

先生は少年を制止すると、小さく呪文を呟く。

すると、先生の人差し指と中指の指先が淡い光を放った。

「腕を出すのじゃ、名無し」

「？」

少年は首を傾げつつも袖を捲り、左腕を差し出した。

「今からお主に武装刻印を刻む。これを刻めば、お主に合った霊装が七つ生成出来るようになる。それと同時に、“現在”へと侵入し、十字戦争に介入出来るようになる刻印を刻むのじゃ」

「じゃあ、早速――」

「だから待つのじゃっ」

早々に左腕を突き出す少年に、呆れたようにため息を吐く先生。

それを見ていたデルフリムもくすくすと笑っていた。

「この刻印を刻めば、もう後戻りは出来ぬ。もう一度よく考えるのじゃ。
どのようなものかもよく知らぬのに、お主は戦えるのか？　誰を守るか定まっておらぬのに、お主に立ち向かえるのか？　お主にそれだけの覚悟があるのか？」

「それは――」

そう言われると、正直分からない。誰かを守るとか言われても、今まで考えたことがない。というより、理解出来ない。

でも――

「でも、それがどうした？　そこに何の意味がある？　理解出来ないことに固執する必要などどこにある？　今の俺には理解出来ない。故に、答えることは出来ない。
だが、何も無いというのことはそれだけで強みになる。無から生じる狂気ほど、怖いモノはない。違うか？」

『異常』。その言葉が、否、その言葉しか当てはまらない。

今の彼の表情は、きっと異常なモノなのだろう。

だが、二人は少年から感じる何か別のモノに恐怖していた。

それはどこまでも気高く、禍々しく、それでいてどこまでも純粋で綺麗で優しい“悪魔”。

例えるのならそれしかない。否、それだけだ。それ以外に何も無い。

「な、名無し？」

「だ、大丈夫かにゃ！？」

若干怯えながらも、二人は少年に声をかける。

「ん？　なにが？」

「うむ？」

「んにゃ？」

先程の悪魔ではなく、元の人間としての少年がいた。

「あ～、いや、なんでもない」

「そう。なんでもにゃい。なんでもにゃいのにゃ～」

どこか無理のある笑顔をする二人。

そんな二人に、少年は首を傾げていた。

「あのぉ……。それで武装刻印というのは刻んでもらえるんですか？」

「え？　あっ、ああ、そうじゃったのぅ。お主がそれでも戦えるのというのならのぅ」

「それは大丈夫です。あの世界とあの光景を、もう二度と現実のものとしないために戦いますから。それに――」

少年は少し溜めを作り、呟くような曖昧さで言った。

「守りたいものや大切にしたいものは、これからでも作っていけますから」

自信無さそうに力無く呟いた。

「ふむ。確かにのぅ。守りたいものや大切にしたいものは、後から生まれることもある。それもグラスティアに行ってみなければ分か

らぬか」

「そーだね。ええ～っとぉ……なんて言うの？　名前」

デルフリムの問いに、急に場の空気が重くなった。

「にゃ、にゃに？　この空気」

オロオロしながら二人を見る。

「あ～、いやっ、まぁ、なんて言うか……ね。覚えてないんだ」

苦笑し、先生の方を見る。

「う、うむ。こやつは名を覚えておらぬのじゃ。じゃが、それも大丈夫じゃ。約束通り、お主の名を用意してきたからのぅ」

「本当ですか！？」

少年は嬉しそうに先生を見る。

先生も少し照れくさそうにしながら、その名を口にした。

「お主の名は、神裂刹羅。神をも切り裂く刹那の羅刹、じゃ」

第五話

「神裂……刹羅……」

噛みしめるように、その名を呟く。

「カンザキセツラ……。カッコいい名前だね！」

まるで自分のことのように喜ぶデルフリム。

「先生。名前、ありがとうございます。自分は――いや、オレは今日から神裂刹羅と名乗らせていただきます」

嬉しそうにそう言った少年、刹羅は、先生に頭を下げる。

その表情を見て、先生も嬉しそうに微笑んだ。

「それじゃあ、先生。早速、武装刻印と魔術の修練を――」

「「はぁ……」」

「へ？」

二人のため息の意味が分からず、刹羅は首を傾げる。

その姿に、二人はまた深いため息を吐いた。

「魔術も、武装刻印も、明日になってからじゃ」

「そうだよ。せっちゃん気付いてないかもしれないけど、顔色悪いし、さっきから少しふらふらしてるよ」

「そっ、そうかな？」

そう言うと、刹羅は目をそらした。

そんなに体調悪く見えるんかな？　いつもこんな感じだったから自分では全然分からんかった……

自分の体調を自分で把握できなかったことに、がっくりと肩を落とす刹羅。

「分かりました……また明日にします」

とりあえず、魔術だの武装刻印だのと言わなくなったことに安心する二人。

だがそこで、二人にふと疑問が生じた。

「それにしても、なんでそんなに急ぐのかにゃ？」

「ふむ。確かにのぅ。何故じゃ？」

二人の問いに、刹羅は少し悩んだ後口を開いた。

「少し前に、医者から余命半年って宣告されたんですよ」

どこか他人事のような素っ気なさで言う。

「例えそれが、世界からの排他によるものが原因であったとしても、その束縛から解放されたのだとしても、先が短いのは変わらないと思ったからです」

「「……」」

デルフリムは目を潤ませ、何か言いたいけどなんて言えばいいのか分からない。といった表情をしている。

先生は、少し考えるような仕草をして刹羅を見る。

「ふむ。まだ大丈夫じゃろぅが……一応体の検査もするべきかのぅ」

そう言って先生はゆっくりと手を伸ばし、刹羅の胸に手を当てる。

すると、手のひらから白い光が放たれ、体の中に染み込んでいくかのように広がっていく。

その光景を、刹羅は不思議そうに、デルフリムは険しい顔をしてみていた。

「今、お主の体の状態を調べる術式を打ち込んだから、明日には結果が分かるじゃろぅ。それまではゆっくり休め」

刹羅は頷き、デルフリムは何かを探るような目つきで淡く光るルー

ンを見つめている。

それに気付いた刹羅は、デルフリムの前で手を振った。

「……んにゃ？　どうかしたの、せっちゃん？」

「え？　あ、いや、なんかずっとこっち見てたからどうしたのかなぁ～、と思ってね」

そう言うと、刹羅はデルフリムの頭を撫で始めた。

「ふにゃっ！？」

いきなりのことに素っ頓狂な声を上げるデルフリム。

その姿を見て刹羅は笑いながら撫で続ける。

「でも、この様子ならなんでもなかったのかな？」

「ふにゃぁ～～～」

何故か顔を真っ赤にしてふにゃふにゃになるデルフリム。

刹羅は、なんでこんな状態になったのか首を傾げながらも、撫でるのを止めない。

なんでかな？　なんか懐かしいだよなぁ。それに、なんか撫でてたい。……なんでだろ？

自分でも分からない自分の気持ちに、首を傾げる刹羅。

「うにゃ～」

そして気がつけば、デルフリムはその場で伸びていた。

そんなデルフリムを見て微笑み、刹羅は規則的に背中を叩く。

それはまるで、子供を寝かしつける親のような姿であった。

「刹羅。とりあえず、寝泊まり出来る場所を見つけねばならぬから、わしは少しこの辺りを散策してくる」

「あ、はい」

すっくと立ち上がり、先生は辺りを見回し始める。

いい場所が見つかったのか、そちらに足を向けたとき、デルフリムが声をかけてきた。

「寝泊まりならボクの家を使えばいいよ～」

「むっ。そうか？」

「うん～」

未だふにゃふにゃなままだが、しっかりとそう答えた。

◆◆◆

ふにゃふにゃ状態から復活したデルフリムにつられ、二人は森の中を歩いていた。

そびえ立つ木々は、大樹と呼べるほど大きなものもあり、長い年月を生きてきた貫禄のようなものを感じる。

神聖な雰囲気と神秘的な空気が漂う森には、三人以外に誰の気配もしない。

「そう言えば、この世界ってなんて言うんだ？」

「ここ？　ここはねぇ」

先頭を歩いていたデルフリムはくるりと振り返り、元気よく答えた。

「妖精郷。すべての世界と繋がっていながら、どの世界とも繋がってない妖精だけの幻想郷」

両手を大きく広げ、笑顔を浮かべる。

「ようこそ！　妖精郷へ！」

その言葉に呼応するかのように、周りの木々が神秘的な光を放ち始めた。

「ほぅ、これは凄いのぅ」

光を受けて、先生の純白の髪が光を放っているように見える。

「こういうのを、綺麗って言うのかな……」

光を放つ木々を見て、そんなことを呟く刹羅。

病院以外の世界を見たことがない彼にとって、この光景を表現する言葉と表情を作るのは難しいのかもしれない。

だが、そんな刹羅の言葉にデルフリムは頷く。

「そうだよ。こういうのを綺麗ってゆうんだ。ちなみに、リムちゃんみたいな子を可愛いってゆうんだよ！」

精一杯可愛らしく振る舞い、笑顔を振りまく。

その姿に微笑み、刹羅はデルフリムの頭を撫でた。

「ふにゃっ!?」

「あっ、ごめん」

ビクッと体を震わせるデルフリムを見て、慌てて手を離す。

う〜ん。デルフリムは頭を撫でられるのが嫌いなんかな?

そんなことを考えながら、デルフリムを見る。

一方、デルフリムはと言うと、顔を真っ赤にしながら俯いていた。

(う〜。またせっちゃんに撫でられちゃった。さっきはビックリしたけど、もう少し撫でて欲しかったなぁ)

なんてことを考えていた。

「のぅ、二人とも。先には進まぬのか?」

「にゃっ!? そうだったにゃっ」

ハッと我に返ったデルフリムは、再び先頭に立って歩き出した。

刹羅たちもそのあとに続いていく。

それから十分もしない内に、今まで見てきた木とは比べものにならないほど巨大な樹が目の前に現れた。

「ここがボクの家だよ！」

その巨大な樹を指差して、デルフリムは二人にそう言った。

体を反らせて見上げても、天辺が見えないほど大きな樹に、二人は驚きが隠せない。

「デカいな、この木。こういうのを大樹って言うんだろうなぁ」

「うむ。これは立派な大樹じゃのぅ」

樹の大きさに感心する二人を見て、自慢げに胸を張るデルフリム。

「えへへ～。すごいでしょー」

まるで自分のことのように誇らしげにそう言った。

「それで、どこから入るんだ？」

「入口ならそこだよ」

大樹の根元にある隙間を指さし、そこに向かって走っていく。

「ここ、ここ」

そう言って隙間の中に入っていった。

刹羅は、デルフリムが入っていった隙間を覗き込もうとしたとき、にゅっと出てきた手にいきなり引っ張られた。

「え？　ちょっ！？」

抵抗する間もなく、刹羅は隙間の中に引きずり込まれていった。

「うをぉぉぉっ」

入ってすぐにあった、角度のキツい下り坂を転げ落ちていく。

「がっ！！」

受け身を知らない刹羅は、そのまま固い地面に叩きつけられてしまった。

「いってぇ」

予想以上の痛みに、刹羅は寝転がった起き上がれずにいた。

だが、それがいけなかった。

「きゃあああああ！！」

「え？」

唐突に聞こえてきた悲鳴に驚いていると、顔面に強い衝撃を受けた。

「ぶがっ！？」

「うひゃぁっ！？」

い、痛いし、重い……。しかも、なんか柔らかいし、なんか暖かいし、なんか、なんか……くっ、首が……

これ以上この状態でいると顔も首も危ないので、なんとかして逃げようともがいてみる。

「んぁっ！」

もがいてみる。

「ひゃうっ！！」

もがいて――

「ひぁぁぁっ！！！」

刹羅はもがくのを止め、意思表示をするために手をばたつかせる。

と、ほぼ同時に腹部になにやら圧迫感を感じ、ばたつかせた手に柔らかいものが当たった。

その感触に疑問を持つ前に、鳩尾に強烈な衝撃が叩き込まれた。

「なっ、なにするんですか父様ァァァッ！！！」

「ゴボフェッ！！！？？」

あまりの衝撃に血を吐き出しながら、刹羅は無理矢理意識を刈り取られた。

第六話

◆◆◆

「な――てん――よ！　せっちゃ――に乗――て！」

「じゃか――ざと――言って――がっ」

うーん。何か聞こえる。

この声は――先生と、デルフリム？　しかも、なんか言い争ってるみたいだ。

「だいた――が――は急なくだ――れば――羅の――ちずに――じゃっ」

「そっ、それ――でも――の顔の上――えて――んっ」

徐々に意識が浮上してきたらしい。大分二人の声が聞こえてきた。

「そん――は――ないっ」

「うそっ！！　もだ――じゃん！　こす――て！」

「こっ、こす――どおら――」

「かん――でしょっ」

「かん――などっ！！　断じて――」

「にしては――いいこ――鳴いて――ど？」

「なっ！？」

二人が言い争う中、刹羅は完全に意識を取り戻した。

「うっ、ああぁ」

ゆっくりと体を起こし、軽く頭を振って周りを見回す。

木の根で出来た壁と土の床。

簡素なテーブルと椅子。
テーブルの上には、鉢に植えられた小さな木。
辺りを照らすのは、木の根から放たれる淡い光。

そして刹羅が寝むっていたのは、どうやらベットの上のようだ。

刹羅は事態を把握するため、言い争いをしている二人に声をかけた。

「えっと、ちょっといいかな？」

刹羅の声に、二人はハッとし、ベットの方を向く。

「あっ、せっちゃん起きたの？」

「めっ、目が覚めたのか、刹羅？」

「はい、ちょうど今し方。……ところで、なにかあったんですか？
っていうか、どうしてオレこんな所で寝てるんだ？」

顎に手を当て、首を捻る。

しかし、どれだけ捻っても落ちて背中をぶつけたところまでしか思い出せない。

気がつけば、頭が肩と平行になるほど捻っていた。

「お？　なんかぼんやりと……柔らかいのと……暖かいのと……あー、そうそう。なんか顔に落ちてきたんだ！」

思い出した、思い出した。と言って刹羅は膝を叩いた。

「んでも、なにが落ちてきたんだろ？　柔らかくて暖かいもの……んー。犬とか猫とかの腹は柔らかくて暖かいって聞いたことがあるけど、どんな生き物か覚えてないからなぁ。なんだったんだろ？」

再び首を傾げ、悩み出す。

その姿を見て、まるでウブな少女のように顔を真っ赤にする先生と、そんな先生の姿を見て笑いを堪えているデルフリム。

彼の悩みは彼女たちに訊けばすぐに解決するのだろうが、そのことに全く気付かない刹羅であった。

「でもまぁ、別になんでもいいっか。このままだと思考の海に沈みそうだし」

そう言って刹羅は思考を切り、立ち上がる。

「おっとと」

だが、うまく立ち上がれず、フラついた。

「大丈夫、せっちゃん？」

「大丈夫だよ、デルフリム」

心配そうに刹羅の体を支えるデルフリムに笑いかける。

そんな刹羅の状態を見ていた先生は、デルフリムの方を向いて口を開いた。

「とりあえず、食事を取らぬか？」

「あっ、そうだね！　せっちゃんもお腹空いてるだろうしね！」

「え？　あっ、いやっ、オレは――」

その時、まるでタイミングを見計らっていたかのように刹羅の腹の虫が鳴き出した。

「お腹、空いてるでしょ？」

「……はい」

がっくりとうなだれて答える刹羅。

くすくすと笑い、デルフリムは刹羅をベットの上に座るように促すと、部屋の奥へと先生を引っ張って駆けていった。

「なっ！？　なんじゃっ。わしに何をさせる気じゃっ！」

「なにって、料理だよ？」

「それならお主一人でも作れるじゃろぅ？　じゃから、わしは――」

「あっれぇ～。もしかして根源の魔女さんは料理も作れにゃいのかにゃ～？」

「なっ！？　なにを言うかっ。これでもわしは、料理が得意なのじゃぞっ」

「なら、簡単だよねー？　作ってくれるよねー？」

「もちろんじゃっ」

そんな、見え見えの挑発を言うデルフリムの声と、その挑発に乗る先生の声が聞こえたのを最後に、奥から会話が聞こえてこなくなった。

◆　◆　◆

あの後、一時間ほどで料理が出来上がり、三人は食事を取った。

デルフリムの得意料理というロールキャベツと、先生の得意料理という肉じゃがは、どちらも甲乙つけがたいものだった。

ただ、何故二人の得意料理が自分のいた世界のものなのか疑問に思ったが、別にいっか。の一言で片付けることにした。

自分の興味がないものには、とことん関心を示さない淡泊な刹羅である。

食事を終えた三人は、しばらくの間談笑していたが、今は二人とも眠っている。

刹羅は、初めて感じる満腹感に満足しながら寝転がっていた。

「魔術、武装刻印、グラスティア、そして十字戦争」

一遍に教えられたその情報を、もう一度本を読み返すように思い出していく。

「オレは、戦うための力を得られるのか？」

問うてもそれは虚しく空にかき消される。

自問自答をしても、その答えは見つからない。

オレがおかしいからか？
オレがずっと一人だったからか？
オレがあんなモノを見たからか？
オレがあんなモノを見続けてきたからか？

その問いに答えてくれる人も、誰もいない。

それでも刹羅は考える。

広く、深く、まるで木の根のように思考を張り巡らせて。

「これ以上考えてると抜け出せなくなりそうだな」

刹羅は一度思考の根を切り、体を起こす。

ぐっすり眠っている二人を見て、何故か嬉しくなった。

「誰かと話をするのも、誰かと一緒にメシを食うのも、八年ぶり。
誰かの寝顔を見るのは――初めてかなぁ」

無防備なその寝顔を見たり、手をつついてみたりする。

それで満足したのか、刹羅はその後すぐに眠りについた。

第一話

この日は朝から魔術を扱うために必要不可欠なもの、即ち魔力を通すための回路を起動させる作業をしていた。

すでに回路と魔力の生成方法などのやり方は教わっており、あとはそれが実践できればいいのだが――

「全然ダメじゃな」

「これもですか……」

先生が知りうる限りの様々な方法を用いているのだが、未だ成功には至っていない。

「わしの魔力を流し込んで無理矢理作るか？　いやしかし、それはリスクが高すぎる。となると、やはりあの方法しかないのかのぅ」

頭の中で様々な方法を検討していく。

そのそばで、刹羅も右目を閉じて自分の回路の形をイメージしていた。

十の魔力を生成して、使った魔力が八だと二余る。

それをムダ無く使うには、やっぱり余った魔力を循環させるべきか……

刹羅は魔力を生成するだけでなく、魔力を余らせずにすべて使えるような回路をイメージしていく。

「のぅ、刹羅。次はこんなのでどうじゃ？」

循環型回路。これかな。

体の中を六本の回路が駆け巡り、循環するイメージを作る。

次に、六本の回路。

六本。何か道具を例えにしてみるかな。

「刹羅？　どうしたのじゃ？」

六……六……六……

リボルバー。シリンダー。あれは、六発の弾丸が装填できる。

これを元にイメージを。

「刹羅。刹羅！」

自分をリボルバーに例え、回路をイメージする……

「聞こえておらぬのか！？」

循環回路はシリンダー。

これならいけるかも。

「刹羅！！」

「うをっ！？」

右目を開け思考の海から浮上した途端、先生に耳元で怒鳴られた。

正確には、少し前から何度も呼ばれ体を揺すられていたのだが、如何せん、一度思考の根や海に入ると周りが一切見えなくなりすぐそばで何かあっても全く気付かないほど、集中してしまうのだ。

そのため、何故先生が不満そうな顔をしているのか全く分からない刹羅であった。

その様子に呆れ、ため息を吐く。

「ふぅ。まぁよかろう。それより、次の方法じゃが――」

「その前に、少し試したいことがあるんですけど……」

「うむ？　なんじゃ、試したいこととは？」

「はい。ちょっと、自分でイメージした回路を試してみたいんです」

どこか自信のある表情でそう言う刹羅。

「ふむ。なら、やってみるが良い」

一抹の不安を感じながらも、先生は許可を出した。

刹羅はすぐに右目を閉じ、先程作ったイメージ　を浮上させる。

全身を流れる力をイメージし、それが流れる道をイメージする。

己が身を循環回路へと切り替え、そこに力を流し込む。

「行きます」

先生が頷くのを確認し、自らを作り替える言葉を発した。

「循環回路（シリンダー）―起動（セットアップ）」

途端、体内に回路が形成され、力の奔流が全身を駆け巡る。

「ぐっ」

これが……魔力か。それに、まだ回路一本しか作動してないのにこの苦しさ……この体が魔力に慣れてないからか？

体内に感じる異物に体が拒絶反応を示すが、それを精神でねじ伏せる。

「どうですか、先生。出来てますか？」

じんわりと、額から汗が滲み出る。

先生は、まるで珍獣でも見ているかのような表情をして刹羅を見ていた。

「先生？」

「ん？　あ、ああ。出来ておる。出来ておるぞ」

カクカクと頷く先生。

刹羅は、その姿を不思議そうに見ていた。

「まさか、循環型回路とは……やはり……」

「ん？　何か言いましたか、先生？」

「いや、なにも言うておらぬぞ」

「そうですか」

刹羅は首を傾げたが、それもすぐに苦悶によってかき消された。

「ぐっ……くっ……うぅぅっ」

まだ魔力に慣れていない体には、魔力は毒らしい。

じわじわと、体を蝕んでいく。

立っていられなくなった刹羅は、ゆっくりと膝を着いた。

「ハァ、ハァ、ハァ、ふぅー」

呼吸を整え、回路を停止させて右目を開く。

「あまり無理するでないぞ、刹羅。魔術師の家系でもなければ、まともに回路を持っていない人間にとって、魔力はただの毒でしかないからのぅ」

「はい……」

刹羅は小さく頷き、その場に座る。

「わしは少しやることがあるからこの場を離れるが、わしがおらぬからといって無理するでないぞ？」

「分かってますよ」

「本当かのぅ」

刹羅にはその前科があるのか、心配そうにため息を吐きながらもう一度念を押し、先生はその場を離れていった。

先生の姿が見えなくなったことを確認した刹羅は、すぐさま立ち上がり言葉を発した。

「循環回路―起動（シリンダー　セットアップ）」

回路を二本起動させ、魔力を流す。

「ぎッ」

体中が焼けるように熱い。悪寒が全身を駆け巡る。異物が、魂を、蹂躙する。

体が、内から、破裂しそうだ。

でも、それを、精神で、ねじっ……伏せるっ。

「ハァッ、ハァッ、あ〝あ〝ッ」

口の中から、慣れ親しんだにおいがする。

それでも回路を停止させることなく、倒れそうになる体を精神力の

みで支える。

「っ……っっ……よしっ、慣れ……たっ」

自分にそう言い聞かせ、起動させる回路の数を一本増やす。

「ぎッ！？　ガァァッ！！」

全身を剣で、外から、内から串刺しにされる。
何かが体を潰してくる。
頭の中がスパークする。
腹の中を何か硬いモノがグチャグチャにかき回す。得体の知れない何かが体を内側から食い破ってくる。
ただでさえ少ない魂が、器から押し出されそうだ。

意識が、混濁してくる。

でもっ……それを……精神で……繋ぎっ、止めるッ。

「まだだ……まだっ――やれるッ！！」

ゴボッ、と口から血の塊を吐き出す。

それでも倒れることなく、焦点が合わなくなりつつある目で、何も無い空間を睨む。

そして、四本目の回路を起動させようとしたその時――

「か……はっ……」

ブツン、と何の前触れもなく意識が途切れた。

◆　◆　◆

刹羅が回路を起動させている頃、先生はデルフリムの家である大樹の中にいた。

「のぅ、こんなのはどうじゃ？」

「え～、この色～？」

先生は、デルフリムと二人でなにやら服を漁っていた。

「うむ。刹羅は、赤や青。ワインレッドに黒。紺に焦げ茶に深緑。灰色に銀。といった色が好みじゃからな」

「ふぅ～ん。よく知ってるね」

「うむ。昔、好きな色を訊いたことがあるからのぅ」

楽しそうにそう言うと、再び服を漁りだした。

その様子をじっと見ていたデルフリムは、まるで家族の話をするかのように話をする先生にため息を吐き、一緒になって服漁りを再開する。

「のぅ、このズボンはどうじゃ？」

「黒いジーパンかー。いんじゃにゃい？　それにこの紺のジーパンもよくにゃいかな？」

「ふむ。似合いそうじゃのぅ」

二人は刹羅に似合いそうだと思った服を、片っ端から引っ張りだし

ていく。

「こっちの服はどうかにゃ？」

「ふむ。ワインレッドの上着か。なかなかいいのぅ」

「んじゃあ、これけってー！」

デルフリムは上着を投げると、再び服の山に突入する。

先生も、一着一着丁寧に探していく。

気が付けば、選んだ服で小さな山が出来ていた。

「大体これぐらいでいいかにゃー？」

「うむ。これぐらいで良かろう」

残った服の山を片付け選んだ服の山を整えると、デルフリムは別の準備をし始めた。

「はっさみ～、シャンプー、鏡に、なんだけ？」

首を傾げながらも、次々と散髪用の道具を取り出していく。

「なにをしておるのじゃ？」

「んー？　散髪の準備だよー」

「散髪？」

「うん。せっちゃん、頭重そうなんだも　ん」

「確かに……あの頭は重そうじゃ」

今朝の、強引にヘアバンドで髪を纏めている刹羅の姿を思い出す。

その姿を思い出した二人は、小さく笑い散髪の準備を整えていった。

†　†　†　†　†

全てが戦火に飲まれていく。

街は血と悲鳴と屍で構築される。

――燃え尽きた家の残骸

――瓦礫と化した街並み

――焼け焦げたヒトガタの炭が彩る石畳

――「助けてくれ」と何かが呻く

――「せめてこの子だけでも」と差し出される　黒い塊

――水を求めて這いずる焼け爛れた何か

――光を失った目が何かを訴える

誰一人助けられない。

俺にあるのは刃のみ。

誰かを助ける力も、誰かを癒やす力も無い。

俺にあるのは真逆の力。

誰かを傷つけ、誰かを殺す。

築かれた痛みは、苦しみは、悲しみは、憎しみは、怒りは、全て俺に、俺だけに向けられる。

それでも立ち止まらず、剣を振るう。

仲間は皆死に絶えた。

立ち向かうのはただ一人。

敵は幾万の軍勢。

守るモノは全て失った。

今逃げても誰も文句は言わない。

でも、逃げない。

俺が俺である限り、決して逃げはしない。

全ての罪が、全ての罰が、全ての負が、俺に押　しつけられようとも、それを全て背負ってやる。

全ての非が俺にあるというのなら、例えそれが冤罪であろうとも償おう。

全ての恨み辛みを俺に向けると言うのなら、俺はそれでも構わない。

だから頼む。

これ以上、悲しむ人を作らないでくれ――

†　†　†　†　†

「うっ……」

気絶していた意識が、ゆっくりと浮上してくる。

「うっ、うぅぅっ、くっ」

未だ感じる苦しみに、顔を歪める。

「気絶……してたのか」

震える体を無理矢理抑えつけ、なんとか立ち上がった。

体の調子を確かめようとした時、まだ回路が起動していることに気が付いた。

「回路って気絶してても動いてるもんなのかな。それとも、力の循環をイメージしたからかな？」

刹羅は首を傾げるが、その辺りの知識を持っていないので自分では分からなかった。

「とりあえず後で先生に訊いてみよ」

そう決めると、回路の状態を確認するために右目を閉じ、自己に埋没する。

……？　魔力が流れたままになってる。しかも、さっきより多い？

それなのに、あんま苦しくない……

それに、四本とも魔力の生成量が多い事以外は正常に作動してる。

さっきまで苦しんでいたのが嘘みたいだけど、なんで増えてるんだ？

刹羅は、一旦回路を停止しようと意識を浮上させ始めたとき、ふと、あることに気付いた。

「いや、違う。思い出した。さっきまでのが異常で、今の状態が正常なんだ」

そう言うと、回路の本数を更に増やそうと再び自己に埋没する。

……思い出した？　なにを思い出したんだ？

そこで自分の発言がおかしいことに気が付いた。

「さっきの記憶が関係してるのか？　……記憶？　なにを言ってるんだ？　気絶してたんだから、夢じゃないのか？」

頬りに首を傾げるが答えは全く出ず、逆に混乱してそうになっていた。

はぁ、自分で言ってて分からんくなってきた。

一度思考を切り、軽く頭を振る。

「とりあえず、今は回路と魔力に慣れないとね」

もう一度自己に埋没し、回路を感じ取る。

まだ……四本とも作動してるな。

回路を壊しかねないほどではないが、一本一本が許容出来る量を超えた魔力が、回路を満たしている。

そのことを確認した刹羅は、五本目の回路を起動させた。

「ぐっ」

しかし、五本目の回路は先程までと同じ量の魔力しか生成出来ず、再び体を激痛が襲う。

「ぐっ、うぅぅっ」

それを無理矢理ねじ伏せ、意識を内側に集中させる。

他の四本の回路に流れる魔力を分けようと思ったがうまくいかず、他の方法を模索する。

魔力は、命の源であるからオドから湧き出した生命力を変換して扱う力。

なら、より多くの生命力を燃やせばいい。

そして、それを魔力に変換すればいいんだ。

そうまとめると、刹羅は更に裡に自己を埋没させる。

深く、深く、深く、潜っていく。

よし、行けるっ。

刹羅は体にかかる負担など全く考えず、一気に生命力を魔力に変換した。

「くっ」

一瞬、目が霞む。

しまった。必要以上に生命力を魔力に変換させたみたいだ。

すぅっと、体から力が抜けていくのを感じ、刹羅は膝を着いた。

「でも、成功したみたいだ」

先程までとは違って苦しさはなく、むしろ体全体に充実感があった。

刹羅は立ち上がり、回路の状態を確認する。

よしっ、思った通りだ。魔力が回路を壊しそうな勢いで流れてるけどなんともない。

予想通りの結果を得ることが出来た刹羅は、続いて六本目の回路を起動させる。

その際に、より多くの魔力を生成するよう意識して行う。

すぅっと、血が抜けていくような感覚がする。

体から力が抜けそうになるが、その前に魔力が回路を満たしていく。

「よし、うまくいった」

まだ、生命力をうまく魔力に変換出来ていないが、初心者にしては上出来なのかもしれない。

刹羅は、この状態を維持したまま体を動かすことに慣れるべく、軽く体を動かす。

若干ぎこちないが、特に問題なく動かせている。

ただ、刹羅自身がまともな運動をしたことが無いため、その動きは少しおかしなものだった。

「なんともなさそうだし、少し走ってみようかな」

そう言うと、刹羅は大きく伸びをし、ゆっくりと走り出した。

呼吸のタイミングはバラバラで、走り方も何の工夫もされていない。

すぐに呼吸が荒くなり疲れも出てきたが、それでも刹羅は走っていた。

とても楽しそうに、嬉しそうに。

誰もが味わえるであろう『普通』を、全身で味わうかのように――

第二話

その頃、先生とデルフリムはバスケットを持って刹羅の下に向かっていた。

「せっちゃん大丈夫かな？」

「なにがじゃ？」

「なにが？　って、回路だよ！　回路の起動！　ボクはもう無理してないか心配で心配で」

「ふむ。確かにのぅ。あの人は小さい頃はよく無茶をしておった。でもそれがあの人にとっては普通なのじゃから仕方なかろぅ」

「う～。それは否定出来ない～」

二人は揃ってため息を吐く。

「でも、せっちゃんは無理をしてるときが一番正常で、一番生き生きしてるんだよね」

「ふむ？　そうなのか？」

「うん。何の才能もないのに無理して力を手に入れて、そこから更に無理して力を使い続けて自分より遙かに強い人に立ち向かう。無理をするのは当たり前。無茶をするのは彼の生き方。かな？」

まるで世話の焼ける弟を見守る姉のように、優しい表情で語るデルフリム。

それを見て、少し複雑な表情をする先生。

「わししか知らぬあの人と、お主しか知らぬあの人、か」

変わらぬ夕焼け色の空を見上げ、小さく誰かの名を呟く。

その隣で、デルフリムはこの辺り一帯に咲く花を見る。

花は、ここには無い太陽を追うように天を仰いでいた。

「もうお昼だいぶ過ぎちゃったね」

「え？　あ、う、うむ。確かにのぅ」

「じゃあ、早く行こ！」

そう言ってデルフリムはバスケットを持ち直し、ちょこちょこと走り出す。

「これ、待たぬか！」

先生もそれを追って走り出した。

二人が刹羅の下に着いたとき、彼は空を見上げていた。

長く伸びた髪はヘアバンドの拘束から離れ、風になびいている。

空を見上げる表情には、感情という名の色はなくどこまでも空虚だった。

それはどこか美しく、儚く、今にも消えてしまいそうな灯火のようにも映る。

そして、それと同時に彼の姿からは力強さも感じられた。

風になびく髪でもなく、空虚なその表情でもなく、世界を映すその瞳が、紫色に変色したその　瞳が、それを物語っている。

その姿に、思わず二人は息を呑んでしまっていた。

しかし、彼女たちが息を呑んだのは瞳が紫に変色したからではない。

全身から感じられるなにかに息を呑んでいた。

「――――――」

デルフリムが、ここにいない誰かの名を呼ぶ。

先生もまた、同様に――

それに気付いたのか、それとも二人の気配を感じたのか、刹羅が紫の瞳をそちらに向ける。

「どうしたん？　そんなところに突っ立って」

「んにゃ！？　べっ、別になんでもないよー」

「う、うむ。なんでもないぞ」

「？」

どこか挙動不審な二人に首を傾げる刹羅であったか、別にどうでもいっか。と、すぐに興味を無くした。

「それより、どうしたん？　こんなところに来て」

下ろしていた髪を無造作に纏めると、二人の前まで歩いてきた。

瞳の色は、未だ紫のままだ。

「サンドイッチ作ってきたの！」

デルフリムは、刹羅に見せつけるようにバスケットを持ち上げた。

「もうそんな時間なんだ。別に腹減ってなかったから気付かんかったよ」

ははは、と笑う刹羅。

「んー……。じゃあ、もう少ししたら食べる？」

「そうだね。そうしようーー」

くぅ～～

「「ん？」」

纏まりつつあった話に横槍を入れるかのように、可愛らしい音が二人の耳に届いた。

「す、すまぬ……」

顔を真っ赤にして先生が俯いていた。

それを見て二人は小さく笑う。

「先生。オレはまだ腹減ってないんで、先食べ　てて下さい」

「いやしかし。食べるのなら皆で――」

「空腹は体に悪いですから。ちゃんと腹一杯になるまで食べて下さい。ね？」

刹羅はバスケットからサンドイッチを取り出し、先生の口元に運ぶ。

「うっ、むむむ」

しばらく誘惑と戦っていたが、我慢できなくなったのだろう。パクッと、サンドイッチに食らいついた。

少し頬を膨らませながらも、刹羅の手からもそもそとサンドイッチを食べていく。

「先生って、結構子供っぽい？」

「んぐっ！？」

「にゃはははははは！」

驚いてサンドイッチを喉に詰まらせた先生の背中を、笑いながらも叩いてやるデルフリム。

刹羅も、少し慌てながらバスケットから水筒を取り出して先生に渡す。

先生はそれを受け取ると、勢いよく喉に流し込んでいく。

「げほっ、げほっ。ふぅ」

水を飲んで落ち着いた先生は、少しむすっとした表情で刹羅を睨む。

「なっ、なんですか？」

「わしは……子供っぽくない」

「はい？」

「だから、子供っぽくないといったのじゃ」

口を尖らせ、ぷいっそっぽを向いた。

「にゃはははは！　そーゆうとこを子供っぽいってゆーんだよ！」

「なっ！？　かっ、彼はそう言うところが可愛らしいと言っておったのじゃ！！　じゃから決して子供っぽいと言うことは――」

「その子供っぽいとこが可愛くて、じゃにゃい？」

「かっ、彼は、大人っぽい女性に成長していて良いと――」

「大人っぽさと子供っぽさのバランスがよかったんじゃにゃい？」

「むぅ。それは……否定できぬ……」

ちょんちょん。と指と指を合わせ、忙しなく動かす。

「のろけ？」

「ちょっと違うかにゃ」

刹羅とデルフリムは顔を見合わせ、先生が戻って来るまで間サンドイッチを頬張っていた。

あの後、先生が戻って来るのに三十分かかり、バスケットの中のサンドイッチは半分にまで減っていた。

それを知った先生がまた拗ねてしまったが、デルフリムにそれを指摘され、半ば八つ当たり気味に残りのサンドイッチを一人で食べてしまった。

その様子を、二人は苦笑しながら見ていた。

◆　◆　◆

「せっちゃんお水いる？」

デルフリムが水筒を片手に刹羅の隣に座る。

「いや、別に」

「んー、わかったー」

デルフリムは水筒を引っ込め、ジーッと刹羅を見上げる。

「ん？　どうした？」

「んにゃあ、なんでもないよー」

「そっか」

そう言うと、刹羅はまたぼーっと空を眺める。

「あ……そういえば。回路の起動、成功しましたよ」

特に感慨もなく先生に報告をする。

「ふむ。そうか。じゃが、無理はいかんぞ？」

「無理？」

無理をしているつもりは全く無い刹羅は、首を傾げる。

その様子に先生はため息を吐き、デルフリムは苦笑する。

「オレは別に無理をしてるつもりは――」

「「無理してる」」

刹羅の話は、異口同音でバッサリ切られてしまった。

「……別に無理してるつもり無いのに」

それでも抵抗するようにボソッと呟くが、先生に睨まれ不満そうにしながらも黙った。

「でも、多めに魔力を生成した方が体が楽なんだけど」

まだ言うか。と先生が睨むが、それをデルフリムが制する。

「それは間違いじゃないよ」

それを聞いてホッとしたのもつかの間。デルフリムがすぐに口を開いた。

「でもね、それは人間の体にはオーバーワークなの。ううん。オーバーワークなんてものじゃない。下手すれば命に関わるんだよ」

命に関わる。それを聞いて少しは無理をしなくなるだろうと先生も思っていたのだが、刹羅は違うところに食いついた。

「……人間には？」

人間には。そこに彼は食いついたのだ。

まさかそこに食いつくとはデルフリム自身も思っていなかったらしく、あっちゃー、と顔をしかめている。

しばらく考えてから、ゆっくりと口を開いた。

「そっ。人間には、ね。でもね、せっちゃんは人間。それは否定しようもない事実なの」

「まぁ、そりゃそうだけど」

「それにね、せっちゃんにとってみれば正常かもしれないけど、体にとっては異常なの。今の楽に感じる状態はいわゆる、一周回ってやつ」

身振り手振りで説明するデルフリム。

刹羅も、そう言われて考え込む。

「オレにとっては正常で、体にとっては異常。……つまり、体がオレの回路について来れないってことか？」

刹羅は大きく首を捻るが、今一理解できない。

そこで一度右目を閉じ、更に広く深く思考の根を張り巡らせようとしたが、デルフリムが声がそれを止めた。

「そうだよ。せっちゃんの回路は普通の魔術師より一本一本が太い

の」

それを確かめるように、刹羅の胸を撫でる。

「でもそれは人間の体には太すぎるの」

「そうなのか？」

「うん」

自分にある、人間には太すぎる回路。なぜそんなモノが自分にあるのか、刹羅は悩む。

通常のものより太い回路。
人間の体には過ぎた産物。
使い続ければ肉体が破損。

「……っと、待てよ。なんでオレの回路が太いってことがわかるんだ？」

「んにゃ！？　そっ、それはねー」

急に挙動不審になり、忙しなく目を動かすデルフリム。

怪しいことこの上ない姿だ。

「えーっと、えーっと、えーっと、ね？」

必死になって理由を考えるが、焦りすぎて全く思いつかない。

「えーっと、えーっと……」

段々と目だけでなく、手や足などの動きまでおかしくなってきている。

その姿に見かねたのか、先生が口を挟んで来た。

「そやつはのぅ、今朝お主が寝ている間にお主の回路を調べていたのじゃよ」

腹の上に乗ってな。と苦笑しながらそのことも付け足した。

「にゃうわっ!?　なんでそのことまでゆーの!?」

「まぁ良いではないか」

「良くない!!」

耳まで真っ赤にして先生に噛みつきそうな勢いで迫るデルフリムを、刹羅は笑いながら見ていた。

しばらくの間、デルフリムは何度も先生に食ってかかっていたが、軽くあしらわれ続け、今は落ち込んでいる。

「先生。ちょっといいですか?」

「なんじゃ?」

刹羅はデルフリムの頭を撫でながら、先程から疑問に思っていたことを訊いた。

「回路が太いと魔術が使えないってことはないですよね?」

「もちろんそんなことはないぞ？」

「じゃあ、さっそく魔術を教えてもらえませんか？」

「それは構わぬが……その回路を使い続ければ命に関わるぞ？」

「別に構いませんよ」

サラッと、刹羅は自分の体のことなどどうでもいいと言ってのけた。

「いやしかし――」

「なんとかなりますよ」

「じゃが……」

「大丈夫。そう簡単には死にませんよ」

何の根拠もないのにそう言いきる刹羅。

その言葉には、どこ不思議な力があった。

「それに自分の回路で魔術を扱うことに慣れれば、魔力の制御にも慣れてうまく回路をコントロール出来るかもしれませんし」

「ふむ。それには一理あるが、本当に良いのか？」

「はい。あまり時間もありませんし。なにより、オレ自身が早く魔術を使ってみたいし、グラスティアに行きたくて仕方ないんですから」

楽しみで楽しみで仕方ないと、好奇心の塊のようなその笑顔が語っている。

その笑顔を見て先生は嬉しそうな、それでいてどこか悲しそうな、複雑な表情をしていた。

第三話

「それじゃあさっそく、お願いします」

刹羅は、礼儀正しく先生に頭を下げた。

「ふむ。まぁ、良かろう」

先生は頷き、今では読める人がいないとまで言われている古代ルーン文字が書かれた紙を何枚か手渡した。

「これは？」

それを受け取った刹羅は、不思議そうに首を捻る。

「それはのぅ、簡単に言えばお主の扱える魔術のタイプを判別する能力を持たせた紙じゃ」

「魔術のタイプ……」

ジッと、古代ルーン文字が書かれた紙を見つめる。

「その紙全てにお主の魔力を流せば、お主の魔術師としての能力がわかるようになっておる」

先生の説明を受け、刹羅は右目を閉じてから魔力を流し始めた。

一枚一枚丁寧に魔力を流し、全ての紙に魔力を流し終えた刹羅は、ゆっくりと息を吐く。

魔力が流し込まれた紙を先生に手渡し、右目を開けた。

「どうですか、先生？」

ジッと紙を見る先生に、そわそわと落ち着き無く訊く刹羅。

しばらく無言で紙を見ていた先生が、どこか気まずそうに顔を上げた。

「非常に言い難いのじゃが……」

ゴクリと、息を呑む。

「お主は、どの四元素の素養も無ければ、ほとんどの魔術の素養も無い。つまり、魔術師としての才能はほぼ皆無じゃ」

「……」

刹羅は固まっていた。

自分の力の無さを、才能の無さを、無力さを突きつけられ、茫然としていた。

「……助けられない？」

ぼそっと、呟く。

その様子は、どこか危うく見える。

「刹羅？」

先生も心配になって名を呼ぶが、全く反応がない。

落ち込んでいたデルフリムも刹羅の様子に気付き、そっと近付いてみる。

「また、また俺は誰も助けられないのか？　誰かを守る力も無いのか？　なんでなんだ？　なんでいつもいつも俺には力が無いんだ？　なんでどこまでも無力なんだ？　なんで……なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでッ！！」

強く握り締められた拳から血が滴る。

「くそっ！　くそっ！！　くそっ！！！　くそッ！！！！」

その拳で何度も何度も地面を殴り、更に血を流す。

「やめろっ！！　やめるんじゃ刹羅！！」

「やめてせっちゃん！！」

先生は体を押さえつけ、デルフリムは拳をそっと包み込む。

「フーッ、フーッ、フーッ」

まだ興奮状態にある刹羅は、息を荒げながら暴れようとするが興奮し過ぎたせいで血を吐き出した。

「ゴボッ！？　げほっ、げほっ」

「せっちゃん、落ち着いて。まだ体は弱ってるんだから。ね？」

デルフリムは諭すようにそう言うと、そっと手で頬を包み込み額に額を押し当てる。

「大丈夫。まだ出来ることはあるから。まずは落ち着いて、ね？」

「ふー、ふー、ふーっ」

段々と落ち着いてきたのか、刹羅はゆっくりと深呼吸をした。

「ありがと。だいぶ落ち着いたよ」

体から力を抜き、もうなんともないことをアピールする。

それを見た二人は刹羅の拘束を解き、デルフリムはハンカチで刹羅の口元の血を拭き始めた。

「ちょっ、デルフリム！？」

「まだ動いちゃダメっ」

お姉さん口調でそう言うと、手早く血を拭き取った。

「はい、おしまい」

「あ、ああ。ありがと」

少し恥ずかしそうに頬を掻き、刹羅はそっぽを向いた。

その様子を見てデルフリムはくすくすと笑う。

先生も笑っていたが、少し残念そうな表情をしていた。

その手にハンカチを持って。

刹羅はもう一度深呼吸をし、気持ちを落ち着かせる。

そして、少し不安そうな表情をしながら口を開いた。

「なぁ、デルフリム。オレにも出来ることって、あるんかなぁ？」

「諦めなければ、無限にあるよ」

ある人の受け売りだけどね。と優しく励ます。

「……そうだな。諦めなければ、無限だ」

諦めなければ、な。

そう、言い聞かせる。

いや、違う。これは、これだけは諦められない。例え何があろうとも、これだけは諦められない。それは絶対だ。

刹羅は軽く頭を振り、思考を切り替える。

そして二人に向けて口を開いた。

「今のオレに出来る魔術を、教えて欲しい」

強く、真っ直ぐな光を宿した瞳が二人に向けられた。

その瞳を見たデルフリムは嬉しそうに微笑み、先生は少し呆れたような、それでいて嬉しそうな笑みを浮かべた。

「そうだね。でもボクは魔術は専門外だから、こんちゃん。お願い」

「うむ。――って、なんじゃ？　そのこんちゃんと言うのは？」

「あだ名だよ。あだ名。だってこんちゃん、名前教えたく無いんでしょ？」

「……」

沈黙は肯定なり。と言ったところであろうか。先生は何も言おうとしない。

デルフリムは特に気にしていないらしく、根源の魔女なんだからこんちゃんでいいでしょ？　と訊いている。

刹羅も、本人が言いたくないなら別にいいや。ていうか、今更だからあんま興味ない。といった理由から、訊こうとは思っていなかった。

「それで、先生。オレでも使える魔術ってありますか？」

そしてなにより、刹羅の関心は今の自分でも扱える力にしか向いていなかった。ということもあった。

先生は一度空を見上げ、ゆっくり息を吐く。

数秒ほど空を見上げた後、刹羅の方に顔を向けた。

「まず、先程の結果を伝えておく」

「はい」

刹羅も、体を先生の方に向け、話を聞く体制に入る。

「お主に扱えぬと出た魔術は、四元素魔術、古代ルーン魔術、召還術などといったものでのぅ。わしが扱う魔術のほとんどが行使出来ぬという状況じゃ。ほかにも可能性を求めて異世界の魔術なども同時に調べたのじゃが、お主が扱えるものはなかったのぅ」

「そう……ですか……」

わかっていたこととはいえ、改めてそう言われるとなかなか辛いものがあった。

しかしそれでも、刹羅は諦めたくなかった。

「なにかオレにも出来るものはありませんか？　なんでもいいんです！　どんな小さなものでも構いませんから！！」

刹羅は手をつき、頭を下げた。

「お願いします！！」

「こっ、これっ！　頭を上げい！」

刹羅のいきなりの行動に驚き、慌てて頭を上げさせようとする先生。

「頭なども下げずともちゃんと教えてやるから、のぅ？」

「……わかりました」

渋々といった様子で頭を上げる。

「えー、それでは、今からお主でも行使することが出来る魔術を教える。心して聞け」

「はい！」

刹羅の返事に頷き、先生は話をし始めた。

「お主でも行使出来るであろう魔術は、初歩にして極めるのは困難と言われておる『強化』の魔術じゃ」

「強化？」

強化の魔術と聞いて、刹羅は首を傾げる。

「うむ。強化というのはのぅ。物質に魔力を流すことによって、強度や硬度、切れ味などを上げる魔術じゃ。更に修練を積めば、存在意義や存在強度を上げることも可能と言われておる」

先生の説明に必死になってついていくが、魔術初心者の刹羅にはやはり難しく消化をするのに時間がかかる。

そのことをちゃんと理解している先生は、刹羅が消化出来るまで待つ。

数分ほどして、刹羅は顔を上げた。

「なんとなくですが理解出来たので、続きをお願いします」

「うむ」

先生もそれに頷き、話を再開した。

「強化以外にも、強化に関係する魔術『弱化』。
それらの中級である魔術『変化』。
更には、それらの上級である魔術『投影』が行使できる可能性がある。もっとも、試してみなければわからぬがな」

「弱化、変化、投影……」

声で、頭の中で、反芻する。

「弱化は強化と同じで、初歩にして極めるのは困難な魔術じゃ。
変化も似たようなものじゃが、強化か弱化が出来ぬことにはうまく魔術を制御出来ぬじゃろぅ。
して、最後に投影じゃが、これはとても難しいのじゃ」

「どう難しいんですか？」

「うむ。投影はのぅ。ゼロから魔力と己がイメージのみで物を創り出さねばならぬのじゃ。しかも、消費した魔力と出来上がった投影品の現界時間が釣り合わん。故に、燃費が悪く使い勝手もあまり良くない。
更には、魔力で創り出した模造品故、世界から拒絶され長くは保たぬ。その上、投影品は見せかけのみ複製品でしかないじゃ」

「なんか、途中からいいとこ全く無いですね」

投影が出来れば色々と便利なんじゃないかと思っていた刹羅は、投影の不便さに落胆の色が隠せない。

「あ、投影を行使するには対象物を知っておらねばならぬぞ？　それに『解析』の魔術が行使出来た方が良いのぅ。他の魔術も、解析が行使出来れば無駄も無くなり成功率が格段と上がるはずじゃ」

「解析、ですか……」

強化に弱化に変化に投影。更には解析も加わり、若干混乱気味の刹羅だったが、次の一言によって完全に混乱に陥った。

「まぁ、これらの魔術はわしの専門外故、使えぬがな」

「えぇっ！？」

その一言を聞き、刹羅は頭を抱えて苦しそうに　唸っていた。

刹羅は頭を整理するためにブツブツと呟く。

「えぇっと、強化と弱化が初歩で変化が中級で投影が上級で、つまりはえぇっと？」

うんうんと唸り、頻りに首を捻る。

もちろん、頭は肩とほぼ平行だ。

「しかも専門外で出来ないから知識のみ？」

「うむ」

刹羅の呟きに先生が答えるが、それに気付いていない。

「先生が使えないってことは、どこの魔術なんだ？」

「お主がいた世界の魔術じゃ」

「……はい？」

オレがいた世界の……魔術？

先生の言葉に反応し、刹羅は顔を上げた。

「あそこにも魔術があるんですか？」

「うむ。あそこの世界にもあるぞ？　ただ、今は廃れたらしいがのぅ」

「そうなんですか」

……廃れた魔術。今じゃあ使える人はいないってことか？

でも、先生はその魔術の知識を持ってる。

ってことは、知識だけは伝わってるってことか？

……わからん。

刹羅は、自分一人で考えてもわからんものはわからんと割り切った。

「先生。その、オレがいた世界の魔術っていうのはもう伝わってないんですか？　それとも、知識だけは伝わってるんですか？」

「確か、もう伝わっていなかったと思うぞ？　まぁ、断言は出来ぬがな」

「そうですか」

こめかみに中指を押し当てる。

どうやらこれは刹羅の考えるときの癖らしい。

「……まぁ、不確かなことを考えても仕方ないか」

軽く頭を振り、気持ちを切り替える。

「もう考えるのはやめだっ」

刹羅は大きく伸びをし、立ち上がる。

「回路もだいぶ馴染んできたし、魔術の修練を始めたいなっと」

紫の瞳を先生の方に向け、改めてそれを口にする。

「先生。魔術の指導、お願いします」

「うむ。良かろう！」

先生もそれに答え、立ち上がった。

「じゃが、まずは回路のスイッチを自由にオンオフ出来るようにならねばな」

「……道は長い、ってことかねぇ」

「せっちゃんガンバレー！」

デルフリムは一人、他人ごとのように応援して　いた。

第四話

それから三時間。刹羅は、みっちりと回路や魔術についての講釈を先生から受けていた。

「とまぁ、こんなところじゃ」

一仕事終えたようなすっきりとした表情で、ほぼブラックなホワイトボードの隣に立つ先生。

「……ぅあぃ」

オーバーヒート寸前のような魂の抜けた顔で頷く刹羅。

まるで瀕死の重傷を負ったかのようなぐったり具合だ。

「とりあえず今日は回路のオンオフが出来るようにしておくかのぅ。このままでは瞳の色が紫のままじゃし」

「……ふぁい？」

半死人状態の刹羅は、首だけを動かして疑問符を浮かべた。

「なんじゃ、気付いておらんかったのか？」

「鏡があるわけじゃないんで」

ていうか、自分のこと気にしたこと無いし。

ぼんやりとそんなことを考えながらのっそりと体を起こす。

「ところで、回路のオンオフってどうやってやるんですか？」

「うむ。わしがお主の回路に魔力を流すから、その魔力を元にスイッチを見つけるのじゃ。まぁ、一度わかれば後はもう簡単じゃ」

「はあ」

今一理解出来ていないような顔で返事をする刹羅。

そんな刹羅に先生は苦笑する。

「疲れているじゃろうが、もう少しじゃ」

「はい……」

頷く刹羅の肩に手を置く先生。

「先に回路を強制的にオフにしておくぞ？」

「はい」

途端、全身を駆け巡っていた力が無くなる。

刹羅はそれを実感しながらゆっくりと息を吐く。

「では、今から魔力を流す。集中するんじゃぞ」

刹羅は無言で頷き、神経を研ぎ澄ます。

先生が刹羅に魔力を流し始める。

じんわりと体が熱くなってくる。

それと同時に体中を這い回る悪寒。

「どうじゃ、わかるか？」

「……いえ」

「ふむ。体をどこかにスイッチは無いか？　スイッチを強くイメージすればわかるはずじゃ」

スイッチを、イメージ。

刹羅は右目を閉じて意識を集中する。

……ん？　もしかしてこれか？

胸の辺りには引き金が、頭の中には撃鉄がある。

躊躇うことなく引き金を引く。

頭蓋に撃鉄が叩き込まれる。

全身の血が沸騰する。

脳味噌がとろけそうだ。

全身を包む全能感と、自身を苛む無力感。

これは――

「どうじゃ、わかったか？」

「――あ、はい。わかります」

「うむ。そうか」

先生は嬉しそうに笑い、肩から手を離した。

「……ふむ？　瞳の色が紫ではない？」

回路の作動具合を見ていた先生が、刹羅の目を見て不思議そうに首を傾げる。

「それは、多分回路が一本しか起動してないからだと思います」

「ふむ。一本では瞳は変色せんのか」

「多分……」

先生は納得したように頷く。

「それはそうと。どうじゃ、体の調子は？」

「特に異常はありませんね。魔力も、さっきみたいに大量に流さなくても辛くないですし。
もしかして、さっきまでのは回路をうまく起動出来なかったからですかね？」

「ふむ。可能性はあるのぅ」

刹羅の問いに答え、先生はもう一度刹羅の目を興味深そうに見る。

（紫の瞳……）

ぼんやりとそんなことを考える。

刹羅は先生の視線に気付いたが、あまり気にすることもなく回路の具合を確かめていた。

先生は刹羅の瞳を見ることを止め、次の課題を出す。

「回路をオフに出来るか？」

「やってみます」

こちらは以外と簡単だった。

頭の中の撃鉄を上げる。ただそれだけで回路がオフになった。

「出来たようじゃな」

「はい」

刹羅は頷き、回路がオフの状態であることを改めて確認する。

よし、出来てる。

回路に向けていた意識を先生の方へと戻す。

「とりあえず今日はこれくらいにしておくかのぅ」

「はい」

返事をした途端、ドッと疲れが出てきた。

重い体で動きたくなくて、その場にだらりと寝転がる。

大きく伸びをし、たっぷりと肺に酸素を吸い込み、吐き出す。

見上げる空は変わらず夕焼け色だが、頻繁に視界が暗くなる。

「せっちゃん！　寝るなら布団！」

刹羅が目をしょぼしょぼさせていることに気付いたデルフリムが刹羅の体を揺らす。

「あー。わかってるよー」

半分寝た頭で返事をする。

「わかってるなら起きなさい！」

「ふぁぁぁい」

だるそうにのっそりと起き上がる刹羅。

それを見て満足そうに笑い、刹羅の手を引いてデルフリムは歩き出した。

第一話

修練を始めて七日目。刹羅はなんとか解析魔術、強化魔術、弱化魔術を修得していた。

もっとも、強化と弱化の成功率はかなり低いく、十回やって一、二回成功するかし無いか程度だ。

「強化（バレット）―開始（オン）」

そして今、刹羅はその成功率を上げるために今日何度目かの強化を開始する。

すでに解析を済ませてあるヘアバンドに魔力を流していく。

ちなみに、まだ髪は切っていない。その理由は櫛が見た当たらないからしい。

刹羅は特に気にしていないのだが、デルフリムが気にしており、目下櫛を探索中だ。

バンッ！

突如として、ヘアバンドが弾ける。

「はぁ、また失敗か」

対象の弱い部分に魔術を流して補強、または対象を強化するのが強化魔術だ。

魔術の制御が鍵となるのだが、どうもそれがうまくいかないらしい。

本人としては制御出来ているつもりらしいが、何度やっても結果がこれなのだ。

しかも、時折強化を施したものが鉄のように溶け出すこともある。

これは原因がさっぱり分からない。

とりあえず刹羅は魔力を過剰に流したからではないかと結論付け、深く考えないようにしている。

「はぁ。やっぱ回路が一本しか起動してないからかな？」

弾けてボロボロになったヘアバンドを見ながらボソッと呟く。

そう、そうなのだ。あの日以来何故か回路が一本しか起動しないのだ。

一本だけでも魔術を行使出来るのであまり気にしていなかったのだが、それが原因だというのならなんとかしなければならない。

刹羅はボロボロのヘアバンドを解析し、状態を確認するが魔力の残滓とヘアバンドがどれくらい、また、どういったダメージを受けたかくらいしかわからなかった。

「はぁ。やっぱ解析魔術ばっか練習しないで、もっと強化とか練習した方がよかったんかなぁ」

本日何度目かになるため息を吐く。

刹羅がこの七日間でもっとも力を入れたのが解析魔術だ。

解析魔術が自在に扱えれば強化や弱化がやりやすくなるし、もしかしたら自分に合った体の動かし方もわかるかもしれないと思ったからだ。

また、魂や想い、概念、存在意義などの曖昧なもの以外に、物質の細部や設計図もわかればより魔術を流しやすいと思ったからでもある。

「やっぱ、わかるのが基本骨子と構成材質くらいじゃうまくいかんか……」

また、ため息を吐く。このままでは数年先まで幸せが無くなりそうな勢いだ。

「やっぱ物質としてそこにあるものより、その物質に込められた想いとか能力とかの方がいいんかなぁ？　そっちの方がわかりやすいし」

刹羅が解析魔術を行使するにあたってもっとも読みやすいものが魂と込められた想いだ。次いで能力と武具。魔力。有機物。無機物だ。

それを先生に話すと、かなり驚いていた。

まず、そこに至るまでの順序が逆らしい。

普通は、無機物から有機物へとステップアップしていくものらしい

が、刹羅はその逆なのだ。

また、解析魔術では魂や込められた想いを読むことは出来ないのだそうだ。

それはもはや魔法の域すら超えているとまで言われた。

しかし、そう言われてもあまり実感のない刹羅は、とりあえず苦手な無機物の解析及び強化、弱化を繰り返し行っている。

以前、試しに何度か料理などにも解析魔術を行使したが、そもそも料理を作る技術が無いため作ることが出来なかった。

「先生はまだダメだって言ってたけど、肉体の強化やってみようかなぁ？」

以前、肉体強化を行ったときの成功率は無機物に比べて高かった。

と言っても、十回に三、四回程度の成功率だ。

「いやでも、夜には先生がビルをそのまま小さくしたような模型を貸してくれるって言ってたし」

どうしようかなぁ。と、首を捻る。

先生は毎日魔術の練習用にと、どこからともなく色々な物を持って来るのだが、それらに統一性は無い。

中には、何の変哲もないぬいぐるみまであった。

「そういえば、金属類はあんま解析してなかったなぁ」

ふと、そんなことを思い出す。

「今日にでもまたやってみようかなぁ？　あ、でも。ここに金属類って何があったっけ？」

記憶を遡るが、台所の調理器具くらいしか思い浮かばない。

「調理器具は解析したしなぁ。まぁでも、無ければ創れば――あ」

自分で言って気が付いた。

なんで気付かんかったんだろ。

必要なものは投影で創ればいいんだ。

あ、でも。投影品って、見せかけのみの複製品なんだっけ？

でも、投影って対象物と同じものを複製するんだから、その製作工程を投影すれば中身が伴うんじゃないか？

そこまで考えると、刹羅は立ち上がって右目を閉じる。

まずは、投影のために回路を切り替えるイメージをする。

シリンダーをイメージし、引き金を引く。

撃鉄が上がり、シリンダーが回転。

回路が切り替わり、そこに撃鉄が叩き込まれる。

カチン。と切り替わった回路に魔力が流れる。

「……ホントに出来たよ」

自分のイメージ通りに回路が切り替わったことに、刹羅は驚く。

先程まで強化に使っていた回路とは違う回路に魔力が流れているのを、改めて実感する。

「あとは投影だな」

ゆっくりと息を吸い込み、気持ちを落ち着かせる。

投影するのは先日見た包丁。

頭の中に包丁をイメージする。

「投影（トリガー）―開始（オン）」

頭の中に包丁の基本骨子と構成材質をイメージし、それをゼロから魔力で創り上げる。

強く、包丁をイメージする。

魔力が回路を流れ、右手に集まっていくのがわかる。

魔術が徐々に形を成していく。

紫色の魔力が右手の中で輝きを放ち、やがて一つの形を成した。

「……」

刹羅の手の中には一本の包丁がある。

機械で作ったような物ではなく、鍛冶師が鍛えた一本の包丁が、そこにはあった。

見た目は完全にデルフリムの持っている包丁だ。

それをしげしげと見ると、刹羅は不満そうな顔をした。

「なんだこれ？　こんな粗悪品以下が出来るとは思わんかったぞ」

そう吐き捨てると、包丁を放り投げ、腕を組んで思案する。

「やっぱもう一回包丁を解析して創造理念から込められた想いまで見直して創るしかないか」

包丁を放り投げた方を見るが、すでに形を失い跡形もなくなっている。

「それに、先生から教わった投影方法じゃなくて、自分なりの投影でやってみるか」

そういうと、刹羅は足早に歩き出した。

「物は試しにって言うし。いろんなことを体験しなくちゃ人生損でしょ」

と言いながら、すれ違う草木に片っ端から解析魔術を行使していく。

「あの樹、魂が宿ってる」

一際大きな樹を見た瞬間、解析魔術を行使せずともそれがわかった。

「やっぱ魂とか想いとかは見ただけでわかるな」

ボソッと、そんなことを呟く。

魂とか想いとか、今まで解析魔術を使わんでもわかってたんだよなぁ。なんでだろ？

それに、そのことに気付いたのも解析魔術が使えるようになってからだし。

先生言うべきかなぁ？　いやでも……

悶々としながらデルフリムの家である大樹の前に立つ刹羅。

「あっ！　せっちゃん！」

「うをっ！？」

いきなり根の間からひょっこりと顔を出したデルフリムに驚き、刹

羅は転びそうになる。

「どっ、お、おわたたたっ」

なんとか体勢を立て直そうとするが、足下を走る巨大な根――

「どォォォォッ！？」

ではなく、そのそばにある自分の足を引っかかってそのまま後ろに倒れていった。

ゴンッと、鈍い音が辺りに響く。

「――――――ッ！！　！？　！？　！？」

後頭部をおさえて苦悶の表情でのたうち回る刹羅。

この七日間ですっかり見慣れたドジっこスキルに、デルフリムはくすくすと笑っている。

そう、刹羅には漫画顔負けのドジっこスキルがある。

何もないところで転ぶのはもちろん。自分の足に引っかかったり、滑りそうに無いところで滑ったり、何故か何もないところで引っかかって転ぶ。

さらには、よく転びそうにもなるし、頭や足を何かの角にぶつけもする。

初めの内は二人して心配していたが、毎日転びそうになったり、転んだりするため今ではすっかり慣れてしまっていた。

しばらくのたうち回った刹羅は、後頭部をさすりながら立ち上がった。

「うをぉぉぉ、まだ痛い～」

「くすくす。なんでそんなに転ぶのかなぁ？　この間はあんなに暗くて不安定なところで全力疾走したのにバランス一つ崩さなかったのに」

「そんなん知らん。むしろオレが知りたい」

「もしかして運動音痴だからかな？」

「反射神経とバランス感覚と柔軟性はあるぞ」

「関係ないし足遅いにゃー」

「……でも、歩くのは早い」

「ジャンプ力無いにゃー」

「……関節も柔らかいぞ」

「筋力あんまり無いにゃー」

「……目と耳はいいぞ」

「もはや運動神経ですら無いのにゃー」

「……」

早くも反論する材料が無くなったのか、刹羅は黙り込んでしまった。

「にゃにゃー」

「にゃにゃーってなんだ。にゃにゃーって」

「にゃ・ん・と・にゃ・くぅ！！」

「はぁ」

デルフリムのハイテンションに疲れたのか、数年先の幸せを吐き出す刹羅。

それを見ても楽しそうににこにこにことしているデルフリム。

「……なにをやっておるのじゃ？」

そして、何故か森の奥から出てきた先生は、そんな二人を見て首を傾げていた。

第二話

刹羅は今、テーブルの上にある高層ビルをそのまま縮めたような模型を解析していた。

この模型は、もちろん先生が用意したものだ。

先生は家に戻って来るなり、今の実力を見たい。と言って模型を差し出してきたのだ。

そんな先生に何の疑問も持たず、刹羅はすぐに解析を始めた。

そして今、刹羅は模型に意識を集中している。

模型の設計図から始まり、基本骨子。構成材質。強度。寿命。電気配線。通気口など、出来うる限り細かく解析していく。

一分程で解析を終えたのか、刹羅は肩の力を抜いて息を吐き出した。

「どうじゃ？」

「全体の八割九割ってところです」

「一分内ではそれが限界か？　それても、無機物だからか？」

「両方です。なにより、魂や想いが籠もって無いモノを相手にするのは難しいです」

「ふむ」

顎に手を当て、考えるような仕草をする。

刹羅は、先生から次の言葉が出るのを待つ。

と、そこに台所にいたデルフリムがやってきた。

「せっちゃん！　せっちゃん！」

「ん？　どうしたん？」

「これ、食べる？」

満面の笑みとともに差し出されたのは魚の天ぷら。

魚は、刹羅の大好物である。

「ゴクッ」

知らず知らずの内に唾を飲む。

「じゃ、じゃあ、いただきまーふっ」

言い切る前に魚に食らいついた。

「んふぅ～～～」

まさに至福の時。と、その幸せそうに緩んだ顔が物語っている。

デルフリムも幸せそうにその顔を眺める。

「ん〝ん〝っ」

「んぐっ！？」

一人幸せそうに魚を頬張る刹羅に、先生は不満そうに少し大きめの咳払いをする。

それに驚いた刹羅は喉を詰まらせたのか、何度も胸を叩いている。

「はい、お水」

デルフリムは天ぷらと一緒に持ってきたコップを刹羅に渡す。

コップを受け取ると、刹羅は一気に水を飲み干した。

「ぷはっ。はぁ、はぁ、はぁ、ふー。ありがと、デルフリム」

「いえいえ」

そう言いながら、背中をさすっていた手を離す。

「その、すまぬな。刹羅」

まさか喉に詰まらせるとは思っていなかった先生は、すまなさそうに謝る。

「いっ、いえっ。別にいいですよ、そんな気にしなくてもっ」

まさか謝られるとは思っていなかった刹羅は、ぶんぶんと勢いよく手を振る。

しかも何故か両手で。

とりあえず、この気まずい空気をなんとかしたい刹羅は、話題を振ることにした。

「そういえば、さっき何か考えてましたけど何を考えてたんですか？」

「うむ。実はのぅ。この修練に期限を設けようかと思ってな」

「期限、ですか……」

「うむ。今の調子ならば生きるために必要な力はあと一ヶ月程度でつくと思ってな」

我が子の成長を喜ぶ母親のような表情の先生とは対照的に、どこか寂しそうな表情をする刹羅。

「じゃあ、一ヶ月後にはグラスティアに行くってことですよね？」

「うむ。向こうの知り合いに話はつけておるから住む場所にも困らぬぞ？　それに彼奴は歴戦のクルースニクじゃ。わしでは教えられぬことも教われるじゃろうし、体術もそうじゃ」

「……」

それは刹羅にとって、魅力的な話だ。

だと言うのに、やはりどこか寂しそうな表情をしている。

「……先生も、来るんですよね？」

じっと先生を見る刹羅。その目は、先生と別れたくない。と言っていた。

「……すまぬな。わしはグラスティアに長居出来ぬ存在なのじゃ」

「そう……ですか……」

やはり残念そうに俯く。

「じゃが、短い間ならグラスティアに滞在できるからのぅ。時々お主に会いに行くぞ？」

「……はい」

それで少し元気を取り戻したのか、少しぎこちないが笑顔で答えた。

「デルフリムは、グラスティアに来れる？」

隣で話を聞いていたデルフリムに、刹羅は問う。

「う～ん。正直わからないにゃー。ボクはこう見えても妖精郷の決まりをいっぱい破ってきたし、寿命も近いからにゃあ」

「じゃあ、ここから出られないってこと？」

「う～ん。そうじゃないんだど……」

デルフリムは一度考える仕草をすると、口を開いた。

「元々妖精は無制限に異世界渡りが出来る存在なんだけど、ボクはいっぱい決まりを破ったからその資格を取り上げられちゃったの。だからここから出られないの」

「じゃあ……」

「うん。資格が無い以上、せっちゃんと一緒にグラスティアには行けないの」

再び表情が暗くなる刹羅に、デルフリムは笑いかける。

「でもね、ボクたちはまた会えるんだよ？　その時のボクは今のボクとは違ってせっちゃんのことをまだ知らないし、姿も違うし、まだ名前も無いけど、仲良くしてね？」

「……わかった」

なんとか理解しようとする刹羅を、デルフリムは優しく抱きしめる。

「物わかりがよくてお姉ちゃんは嬉しいよ」

刹羅も、それに応えるように背中に手を回す。

しばらくの間そうしていたが、どちらともなく手を離した。

「じゃあ、みんなで一緒にいられるのは残り一ヶ月ってことか」

「うむ」

「そうだね」

三人は頷き合い、顔を見合う。

「じゃあ、みんなでいるのは残り一ヶ月だけだけど、楽しく過ごそうか！」

「そうじゃな」

「じゃあ、せっちゃん。おでこにちゅーしてー！」

「こっ、これっ！　止めんか、デルフリム！！」

「にゃはははっ！」

逃げるデルフリム。追う先生。

しばらくの間、二人はドタドタと走り回っていた。

第三話

翌日も今までと何ら変わらぬ朝を迎え、刹羅はいつもと同じ開けた場所で魔術の修練をしていた。

「強化（バレット）―開始（オン）」

手の中にあるのは、台所から拝借した包丁。

刹羅はその包丁の強化をかけているのだ。

「……終了（オフ）」

強化をし終えたのか、刹羅は手の包丁を見る。

「う～ん……。なんかビミョー」

首を傾げ、もう一度包丁を見る。

「さっき短刀でいけたから刃物類ならいけるかなぁ～と思ったけど、やっぱ難しいな」

包丁を手放し、次いで昨晩先生から魔術の修練用に貰った刀剣類や銃弾、槍などといった武器の中から一つ、手頃な物を取り出す。

刹羅が手には取ったのは短剣だ。

「強化（バレット）―開始（オン）」

短剣に魔術を流し込み、強化していく。

基本骨子、変更。
構成材質、補強。

「……終了（オフ）」

強化を終えた短剣をしげしげと見る。

「うん。成功率が上がってる」

それを確認するために、同じ型の短剣に強化をかけた短剣を勢いよくぶつける。

キィィィン

甲高い金属音と共に、短剣の刃が折れた。

「うん。やっぱ成功率が上がってる」

二振りの短剣を放り、次は刀を手に取る。

刀を解析し、強化をかける。

ひたすらこの繰り返しだ。

魔術を機械的に、作業をするかのように、ただひたすら繰り返す。

理由は単純だ。成功率の低い魔術を修練した方が他の魔術の成功率を上げやすいからだ。

「よし、これも成功」

すでに刹羅の足下には刀剣の類が何本も転がっていた。

刹羅は今し方強化に成功した槍を、折れた刀に向けて放つ。

穂先が触れたところから刃にひびが入り、砕ける。

それを確認すると、槍を手放して一息吐いた。

刹羅は折れる剣を手に取り、解析にかけながらぼんやりと呟いた。

「他にもいろんなこと試してみようかなぁ？」

解析を終えた剣を放り、体の伸ばす。

「こないだ先生に教えてもらった修復魔術とか、この前思いついた強化の方法とか」

前屈をしたり、体を後ろに反らせたりと柔軟運動をし始めた。

腕を伸ばしたり、間接を柔らかくしたり、股割りをしたりと思いつく限り体を柔らかくほぐしていく。

「でも、やっぱ曖昧な概念とかを強化したり、自分なりに考えた自分の魔術とか魔術の行使方法とかをやってみたいよなぁ」

柔軟運動を終え、強化を施した刀と剣をそれぞれの手に持つ。

「強化（バレット）―開始（オン）」

基本骨子、変更。
構成材質、補強。
存在意義、増強。

「……終了（オフ）」

刀と剣。その両方に強化をかける。

ただし、今までのような強化ではなく、刃物が刃物たる所以。つまり、『切る』という存在意義を強化したのだ。

しかも二振り同時に。

「強化（バレット）―開始（オン）」

再び強化を開始し、肉体を強化する。

「……終了（オフ）」

自分に足りない筋力などの力を、強化で補う。

準備を終えた刹羅は、足下に転がっている強化済みの槍を器用に足で引っかけ蹴り上げる。

「フッ！！」

一息に剣を振るい、槍を斬る。

ガキィィィン

――が、強化に失敗したらしく、刃は通らず逆に剣が折れてしまった。

「やっぱ失敗か」

すでにこうなることが予想済みだったらしい。淡々とした口調で剣を放る。

落ちた槍を拾い上げ、もう一度放る。

「フッ！！」

先程と同じく一息で刀を振るい、槍を斬る。

鋭い風切り音とともに、槍が二つに別れた。

「まぁ、成功と言えば成功かな」

槍の断面をしげしげと見つめる刹羅。

「やっぱオレはこういった曖昧なものの方が向いてるっぽいなぁ」

強化に成功した刀を軽く振るい、物は試しにと肉体強化を解いた状態で軽く振ってみた。

「ほいっと、ってうをっ！？」

本当に軽〜く振ったつもりだったのだが、サクッという音が聞こえてきそうなほど簡単に残った槍の穂先が斬れた。

予想外の事態にしばらくの間呆けていたが、突然目つきが変わる。

「もう一度、今の感覚を忘れぬ内に」

短剣を拾い上げ、右目を閉じる。

「強化（バレット）―開始（オン）」

基本骨子、変更。
構成材質、補強。
存在意義、増強。

「……終了（オフ）」

足下の強化済みの短刀を投げる。

放物線を描く短刀を注視し、投擲の構えを取る。

その構えは、先程剣を構えた時のような雑なものではなく、まるでそれのみを極めた達人のような鋭い構えだった。

「フッ！！」

全身のバネを駆使し、高速で短剣を投擲する。

そこには一分の迷いも隙も無い。

撃ち出された短剣は吸い込まれるように短刀へと迫り、穿った。

「強化（バレット）―開始（オン）」

即座に肉体強化を施し、足下に転がっている投擲槍を足で投擲する。

風切り音とともに、短剣を目指して飛来する。

刹羅から少し離れた場所で槍が短剣の束に刺さり、失速。そのまま

落ちていった。

刹羅はそれらを取りに向かいながら、頭の中で先程の工程を繰り返し、繰り返し、擦り込むように何度も再生してイメージを固める。

「感覚はわかってきたな。肉体強化とかも慣れてきたし、あとは他のモノも強化とか弱化とか出来るようにしたり、投影ももっと形にしないとね。……あと、出来れば変化と修復も……」

変化と修復という単語が出た途端、沈む刹羅。

実はまだその二つには手を出していないのだ。

刹羅は軽く頭を振り、気持ちを切り替える。

「ふぅ。弱化は強化より簡単だからまだいいけど、投影はものにしたいよなぁ」

昔から何かを作りたいと、いや、創りたいと思っていた。

破壊と破滅に関係することしか出来ない自分にとって、何かを創るということは一種の憧れだった。

たとえ、それが刹那の一瞬であろうとも何かを創ることが出来るのなら創りたい。

それが出来れば、きっと世界が変わるから。

きっと、何かが変われるから。

そこまで来て一度思考を区切り、槍と短剣を拾い上げる。

その槍と短剣を解析にかけながら元の場所まで戻り、投擲武器や矢、銃弾など、飛び道具を手に取り解析する。

「飛び道具には自信あるし、外そうとしない限りは中る」

解析と肉体強化を解き、一度回路を休ませる。

「的があれば一番いいけど、無いんならやっぱさっきと同じ方法でやろうかな？」

武器の中に混ざっていたブーメランを取り出し、投げる。

その後すぐに左手を突き出し、ブーメランの動きを見る。

大きな弧を描きながら旋回し、刹羅へと迫ってくる。

刹羅は微動だにせず、ただ左手を開いたままブーメランを待つ。

徐々にブーメランが大きくなっていき、風を切りながら迫り刹羅の左手にぶつかった。

「いっつー」

思いの外威力が強かったのだろう。刹羅は左手に収まったブーメランを恨めしそうに睨む。

「でも、これならいけるかも」

右目を閉じ、自己に埋没する。

「投影（トリガー）―開始オン）」

今ここにあるブーメランをイメージする。

基本骨子、想定。
構成材質、複製。

「……終了（オフ）」

手の中にはもう一つブーメランがある。

「……やっぱ粗悪品」

不満そうにブーメランを見る。

「やっぱ、理論通りの投影じゃあ創りたいモノは創れん。なら……！」

足を肩幅まで開き、意識を高める。

創造の理念。
製作に及ぶ技術。
担い手の想い。

人々の想い。
込められた魂。
使用された物質。
それらすべてを理解し、再現し、創り上げる。

左目も、閉じる。

否、再現する必要はない。俺はそれらの原典の原点。人も、神も、半神半人であろうとも、資格ある担い手であろうとも、その純粋すぎる想い（チカラ）故に、薄め、カタチを得なければ扱えなかった原典の原点が満ち溢れている場所にいるんだ。

そして、オレはその原典の原点にカタチを与え、武具とすることが出来――

ユルサナイ。
イタイ。イタイ。イタイ。
アツイ。アツイヨ。
ナンデタスケテクレナカッタ。
コロシテヤ――

左目だけ、開く。

「さて、カタチを与えてみるか」

鼓膜にこびりついて離れない怨嗟の声を振り切ることなく受け入れ、刹羅は右目を開く。

「あ、でも。想いを元に創り上げた霊装ならそれでいいけど、そうじゃないやつはやっぱさっき考えた通りの方法で創らんとダメか」

もう一度、今度はより注意深く解析をかける。

設計図を呼び出し、細部まで見渡し、概念を理解し、存在を知り尽くし、製作技術を選定し、カタチとする。

創造理念の構築。
基本骨子の想定。
構成材質の精製。
製作技術の選定。
それらすべてを理解し、あらゆるモノを凌駕する。

そしてようやくオレの投影は完成する。

この考えに間違いがなければ、霊装であろうと無かろうと関係無く出来るはずだ。

再び右目を閉じる。

「投影（トリガー）―開始（オン）」

頭蓋に撃鉄が叩き込まれる。

回路を走る魔力が今までより多くなり、ようやく回路一本分を満たす量になる。

開かれている左目が、徐々に紫に変色していく。

創造理念、構築。
基本骨子、想定。
構成材質、精製。
製作技術、選定。

「……終了（オフ）」

ゆっくりと右目を開く。

その瞳も、紫に彩られていた。

「投影、完了」

刹羅の手には先程までとは違う、存在の重みを持ったブーメランが握られていた。

そのブーメランを何度も見ている内に、刹羅の頬が嬉そうに緩む。

「ハッ！！　いかんいかん。この感覚を忘れん内に何度も繰り返さんと」

刹羅は二つのブーメランを分けて置き、投擲槍を見る。

「投影（トリガー）―開始（オン）」

創造理念、構築。
基本骨子、想定。
構成材質、精製。
製作技術、選定。

手に槍の感触が伝わってくるが、まだ視認出来ない。

けどそれが、視認出来ないだけで、確かにそこに存在していることが理解出来る。

「もしかして、このまま使えば不可視の武器として扱えるんじゃ――。いやでも、途中で可視可能になるだろうし。でもその前に投影品が壊れれば不可視の武器になるか」

刹羅は手の中にある、可視可能になった投擲槍　を見る。

「うん。これも成功だ」

存在の重みを感じ、満足そうに笑う。

「もしかして、飛び道具が一番適正があるんかな？」

首を傾げ、投擲槍を分けて置く。

「まぁそれは、今からわかるか」

刹羅は矢を手に取り、再び投影を開始した。

第四話

投影開始から約二時間。刹羅はほぼすべての武器を投影した。

結果を言えば、飛び道具と刃を持つ武器は投影出来たがその他の武器はうまく投影出来なかった。

いや、投影魔術という意味では成功しているのかもしれないが、刹羅が行使する投影魔術という意味では失敗作なのだ。

「ふぅ。あとはこれだけか」

弾丸を手に取り、解析する。

すでに魔力が切れかけで少し辛いのだが、刹羅はこれで最後だからと力を込める。

「これは……」

なにかを感じたのか、弾丸をジッと見つめる。

「いいこと思いついた」

ニヤリと、まるで悪戯を思いついた子供のような笑みを浮かべる。

「でも、試すのは今度だ。今はこの弾丸を投影するだけだ」

弾丸を手放し、右目を閉じる。

息を吸い込み、紡ぎ出す。

「投影（トリガー）―開始（オン）」

創造理念、構築。
基本骨子、想定。
構成材質、精製。
製作技術、選定。

この弾丸は、機械で造った量産品ではなく、人の手で創り上げられた弾丸だということは先程の解析で理解している。

その為だろうか。工程がスムーズに進む。

「……終了（オフ）」

手の中には一発の弾丸がある。

もちろん、存在の重みも。

「思ったより魔力を使わなかったな」

刃を持つモノを投影する時よりも多く消費すると思っていたが、魔力の消費量は大して変わらなかった。

刹羅はそのことに首を傾げながらも、頭蓋の中にある撃鉄を上げ、回路をオフにする。

「まいっか」

足元に転がる壊れた武器と残った武器、投影によって創り上げた武器を大きな鞄に詰め込むと、上機嫌で家に向かって歩き出した。

「ただいま～」

家に戻ってすぐ、デルフリムが迎えてくれた。

「おかえりー！」

「ただいま、デルフリム」

刹羅は鞄を部屋の隅に置き椅子に座ると、テーブルの上にぐてっと突っ伏した。

「どうしたの、せっちゃん？」

デルフリムは心配そうに刹羅の顔をのぞき込む。

「あー、いや、魔力の使い過ぎでちょっと疲れただけ」

ちょっと、というよりだいぶ疲れているようだ。

そのまま小さな寝息をたて始めた。

「まったく、寝るときはベットで寝ないとダメなのに」

そう言いつつも、どこか嬉しそうに刹羅に布団をかける。

「さて、せっちゃんが起きた時に何か食べれるものがあった方がいいよね」

デルフリムはピンク色のエプロンをつけ、台所に向かうと芋の天ぷらを作り始めた。

◆◆◆

その頃、先生は森の中でなにかの準備をしていた。

「ふむ。これくらいでよかろう」

先生は、地上五センチほどの高さに浮く古代ルーン文字で描かれた魔法陣を見て満足そうに頷く。

「夕食前には刹羅は戻って来るじゃろうから、その時にでもやるかのぅ」

もう一度魔法陣を見て、穴が無いかを確認する。

「うむ。戻るかのぅ」

先生は踵を返し、家へと向かって歩きだした。

「う〜む。やはり刹羅にルーン魔術を教えるべきかのぅ？　いやしかし、何度も調べたが適性はなかったしのぅ。間に何か挟めば出来ぬことはないが、それも魔術的なモノでなければならぬし……」

う〜む。と何度も首を捻りながら、先生は家へと向かっていった。

先生が家に着くと、デルフリムが刹羅の寝顔を覗いていた。

「なんじゃ、刹羅は寝ておるのか」

「あっ、おかえり、こんちゃん」

「うむ。ただいま戻ったぞ」

先生も椅子に座り、刹羅の顔を覗き込む。

「あまり寝顔とは言えぬ表情じゃな」

「うん。なんか真剣な顔してるよね」

二人の言う通り、刹羅の顔はお世辞にも寝顔とは言えぬ真剣な表情をしている。

まるで何か誓いを立てているかのような、強い意志を持った真剣な顔だ。

「この……き立つ……ば……」

小さく、刹羅が何かを呟く。

「む？　今なんと言っておったか聞こえたか？」

「ううん。残念なことに聞こえなかったよ」

「そうか……」

先生は少し残念そうな顔をしたが、そこでふと、壁際にある大量の武器が詰め込まれた大きな鞄が目についた。

「あれは……」

鞄に近付き、真偽を見極めるかのように鋭い目つきで武器に見つめる。

「デルフリム。これはどこで手に入れたのじゃ？」

自分が刹羅に与えた物と同じような姿形をした武器を指差す。

「それ？　それはせっちゃんが持って帰ってきたやつだよ」

「刹羅が？」

「うん」

先生は鞄をひっくり返してすべての武器を取り出し、手を切らないように、魔術を使って一つ一つ丁寧並べていく。

折れたもの。切られたもの。無傷なもの。そして、それらとはタイプの違う魔力を感じるものとに分けていった。

「なにやってるの、こんちゃん？」

その作業を不思議そうに見ていたデルフリムが、それを問う。

「うむ。少しこれらの武器が気になってな」

「どの辺が？」

先生は一振りの剣を執り、デルフリムに見せる。

「これのどこが気になるの？」

「うむ。わしは何の変哲もない武器をやったのじゃが、これは強い魔力を感じるのじゃ」

「強化とか弱化とかがかかってるんじゃない？」

「いや、それは無い。おそらくこれは、強化とは違う魔術じゃ」

先生は空中に古代ルーン文字を書き、そこに剣を翳す。

「なにやってるの？」

「古代ルーンを用いた解析じゃ」

一瞬の内に解析が終了し、文字が浮かび上がる。

「結果は？」

古代ルーン文字が読めないデルフリムは、先生の言葉を待つ。

しばらくすると、先生の口から古代ルーン以外の言葉が発せられた。

「ｕｎｋｎｏｗｎ」

「え？　それって、せっちゃんのいた世界の言葉だよね？　確か意味は――」

「不明」

「そう！　不明！　って、どうゆうこと？」

前のめりになりつつあった体勢を直し、デルフリムは一振りの剣を手に取る。

手に伝わる重さとその感触は、本物と何ら変わりない。

「これ、本物じゃないの？」

「うむ。本物と何ら変わらぬが、これは確かに魔力を帯びておる。……お主は何か知らぬか？」

真剣な目つきで、デルフリムを見る。

「……例え知ってても教えられないにゃー」

「何故じゃ？」

デルフリムの態度に、先生の目つきが鋭くなる。

「せっちゃんがダメって言ったからにゃー」

「……それは、ここにいる刹羅か？　それとも――」

その先を言おうとして、止める。

それを見たデルフリムは一度考え、口を開いた。

「いくつかヒントならあげられるかにゃ」

「ヒント？」

「うん」

急に真剣な表情に変わったデルフリムを見て、先生も真剣な表情になる。

「ヒント1。今のせっちゃんはある一つのモノを除いて、あの日以前のすべてを失っている。もちろん、記憶も。だからせっちゃんは

これがどういうモノか、完全には理解してない。本物と寸分違わないだけなのはそのせい。
ヒント2。前の彼はあるモノを鉄に変えて鉄を打つ、魔術師兼錬金術師である鍛冶師。
ヒント3。これはその剣に関係ないけど、聞く？」

先生は、無言で頷く。

デルフリムもそれに応えるように頷いた。

「ヒント3。彼は、破壊による創造を行う、最も不完全な原初の咎人」

「原初の……咎人？」

「うん。でも、今のせっちゃんに訊いてもそれについてはわかんないだろうし、今のせっちゃんは、それとは違うことで自分は咎人だって言うと思うよ」

「自分は、咎人……」

その言葉が妙に気になるが、デルフリムから与えられたヒントを元に色々と考える。

だが、何も思いつかない。

「せっちゃんが記憶を取り戻したらわかるから、それまで待ってあげたら？」

「そう……じゃな。うむ。そうかもしれぬな」

そうは言ってもやはり気になるのか、先生はまた考え事を――

「っるせェンだよ、テメェラッ！！」

「ひっ！？」

「ふにゃあっ！？」

……出来なかった。

「すっ、すまぬっ。刹羅！」

「ごっ、ごめんねっ。せっちゃん！」

慌てて振り返り怒鳴り声の主、神裂刹羅に謝る。が、

「むにゃむにゃ、このクソ医者共がッ」

どうやら、寝言だったらしい。

そのことに気付いた二人はホッとする。

「それにしても、結構な怒気じゃったな」

「うっ、うん」

まだ体が強張っているデルフリムは、ぎこちなく頷く。

「しかし、なんじゃ今の口調は？」

「ふにゃ？」

いきなり先程の刹羅の口調に文句を言い始めた先生に、デルフリムは不思議そうに首を傾げる。

「いやのぅ。初めて病室であの人に会った時、言葉遣いが汚かったから直したんじゃが、完全には直らなかったのかと思ってな」

「そうゆうことかー」

先生の説明に満足したのか、頷くデルフリム。

「でも、もしかしたら覚えたのは猫かぶりかもしれないよ？」

「うっ。た、確かに。今のを見るとそう思えなくもないのぅ。あるいは、本来の口調を隠しておる。とか？」

「さぁ？　それはどうかにゃ？」

ニヤッ、と笑うデルフリムに、どこか乾いた笑いで応える先生。

この二人のやりとりは、刹羅が芋の天ぷらを食べていることに気付くまで続いていた。

第五話

「そういえば、先生は弓を持ってませんか？」

芋の天ぷらを食べ終えた刹羅は、唐突にそんなことを言い出した。

「うむ？　一応持ってはおるが、それがどうしたのか？」

「はい、久しぶりに弓を引きたいんです」

「久しぶりに？」

先程、デルフリムから刹羅は記憶を失っていると聞いたばかりな上に、ずっと病院暮らしだった刹羅が弓を引く機会など無いと思った先生は首を傾げた。

「はい。昔、と言っても八年ほど前ですけど、色々な飛び道具を使って遊んでいたんですが弓だけはしっかりと習っていたので、久しぶりに引きたいと思って」

「ふむ。そうか……」

刹羅の話に違和感などを感じられなかったので、先生は心の中で首を傾げながらも首を縦に振った。

「では、お主の弓の腕を見せてはくれぬか？」

「え？　なんでですか？」

「え？　あ、いや、ただ純粋にお主の腕を見たかっただけなのじゃが……」

問いに問いで返されたことに戸惑いながらも、先生はそう答えた。

「……別にいいですけど、八年もやってませんでしたからかなり下手だと思いますよ？」

「それでも構わぬから見せてくれぬか？」

「まぁ、別にいいですけど」

何故に下手なものを見たがるんかな？

などと思いながら、刹羅は皿を片付けて外に出る。

次いで先生も外に出て、デルフリムを待つ。

「む？　遅いのぅ」

待ち初めて十分程経ったが、未だデルフリムが出てこない。

刹羅もそのことに首を傾げていると、

「にゃうわっち！」

頭上からかけ声と共にデルフリムが降ってきた。

いや、違う。正確には、飛び降りてきた、だ。

「ぷりちーリムちゃんただいまさん「さて、行くか」ちょっ、名乗りくらい最後ま「うむ。そうするか」こんちゃんも！？」

二人がスタスタと歩いて行くのを恨めしそうに睨むデルフリム。

「うぅぅっ、こんちゃんも、せっちゃんも酷いよー」

一人落ち込むデルフリム。何か手元にあったらガジガジと噛みつきそうだ。

それに気付いた刹羅は、面倒くさい、とでも言いたげな顔でため息を吐く。

「はぁ、ほら行くぞ、デルフリム」

「あっ」

刹羅はデルフリムの所まで戻り、その小さな手を引いて歩き出す。

繋がれた手を嬉しそうに見ながら、デルフリムは刹羅のあとをついていった。

三人は、昼間刹羅が修練をしていた場所に来ていた。

目的地に着くと、先生は何かを呟き弓と矢、そして的を二つ出現さ

せ刹羅に渡す。

それを受け取った刹羅は矢をつがえずに弓を何度も引き、感覚を確かめる。

八年前の記憶を引きずり出し、八節を確認していく。

八節の動きをイメージし、それをトレースする。

しばらくそれを繰り返した後、まだ不満足そうな顔をしながらも的を立てていく。

矢をつがえ、引き絞り、そして放つ。

矢は真っ直ぐ飛び、的の中心の枠の縁を射抜いた。

「「お～」」

吸い込まれるように的を射抜いた矢を見て、二人は感嘆の息を漏らす。

だが、刹羅にとってこの結果はかなり不満なものらしく、顔を歪めて舌打ちをしていた。

もう一度矢をつがえ、自分を空にする。

そして放つ。

矢は、先程と同じ様に吸い込まれるように的に向かって飛んでいき、軽快な音と共に先程の矢の隣、的の中心の枠の縁に沿って隙間無く突き刺さった。

「「お～！」」

それを見た二人は、やはり感嘆の息を漏らす。

「ちっ」

それでも不満なのか、何度も矢を放ち、動きを修正していく。

段々と矢が無くなっていき、それに合わせるように的がボロボロになっていく。

やがて、矢は無くなり的も穴だらけになっていた。

しかも、矢は的の中心の枠内からは一本たりとも外れていないのだ。

先程まで感嘆していた二人も、さすがにその光景には驚いている。

だが、刹羅の方を見るとやはり不満そうな顔をしていた。

「先生。まだ的ってあります？」

「え？　あ、ああ、的か。うむ。あるぞ」

この光景に呆けていた先生は、一瞬何を言われたかわからなったがすぐに理解し、今度は的を十個呼び出した。

刹羅は礼を言ってそれを受け取り、的を並べ、刺さっている矢をすべて抜く。

……昔みたいに、構えて射ればどこでも確実に射抜ける訳じゃないんだ。

今は心と頭の記憶がないんだ。魂に刻まれた記録を引きずり出せ。

そうだ、それは俺が歩んできた記録。

けれど、記憶じゃない。記録だ。

例え記録の中の自分がどれだけ優れてたとしても、記録はあくまで記録。客観的なものでしかない。

だが、それをものに出来ないようならこの先生き残ることは出来ない。

集中しろ。記録の中から八節を引きずり出し、トレースしろっ。

筋力不足によるブレなぞ修正してみせろ。

飛び道具ならどんなものでも出来るのは何故か思い出せ。

弓を構え、ゆっくりと引き絞る。

そうだ、思い出せ。

どれだけ自分を空に出来るかを。

狙いをつければ中るんじゃない。

自分を空にして自然と同化しろ。

それから狙え。

狙うのは、イメージの中にいる俺だ。

そして放て、そうすれば中る。

そう、中てるんじゃない。中るんだ。

外そうとしなければ中る。これは不変だ。

そして放つ。

矢は、真っ直ぐ飛び寸分違わず的の中心を射抜いた。

次の矢をつがえ、放つ。

矢は、先程と同じ軌道を飛び、“矢”に突き刺さる。

「「！！」」

二人が驚いている気配を感じるが、これは当たり前のことだ。

感嘆する程のことですらない。

次の矢をつがえ、再び放つ。

結果は同じ。矢は、矢を射抜く。

それをただひたすらに繰り返す。

気が付けば、矢はすべて使い果たし、最後に射た一本を残してすべての矢の筈が砕けて使い物にならなくなっていた。

「循環回路（シリンダー）―起動（セットアップ）」

回路を起動させ、魔力を流し込む。

「投影（トリガー）―開始（オン）」

矢を投影し、つがえる。

投影は、もちろん刹羅の投影法だ。

そしてまた、矢を放つ。

しばらくの間、投影によって創り出された矢を使い、矢を射抜き続けた。

「すごいを超えて、もはや不気味ですらあるな。弓の腕も、あの投影も」

「そうだね。でも、投影なら刃が一番なんじゃないかな？」

「何故じゃ？」

デルフリムの言葉に先生は首を傾げる。

「前回は、鉄を打って刃とする人だったから」

「前回？」

「うん。前回。これもせっちゃんが思い出したら訊けばわかるよ」

「ふむ。そうか。では、今回はどうなんじゃ？」

「今回は、飛び道具だね」

いつの間にか弓を木に立てかけ、矢を両手に三本ずつ持ってそれを投擲する刹羅。

右の矢は寸分違わず的を射抜き、左の矢はその矢の隣を射抜く。

「……矢って、投擲する物ではなかったと思うのじゃが……」

「う、うん。やっぱり何度見ても不思議だよ」

次々と矢を放ち、的の中心の矢に矢を突き刺すと、今度は別の的に投擲剣を投影して投擲する。

初めはどこかぎこちない動きをしていたが、少しずつそれを修正していき、最適化していく。

段々と的の中心に近付いていき、スピードも速くなっていく。

「フッ」

鋭く息を吐き、投擲する。

剣は束尻にぶつかり、刺さっている方の剣は砕ける。

砕けた破片は僅かな時間だけ残っていたが、すぐに消えてしまった。

「……やっぱ魔術で創ったから折れるんじゃなくて砕けて消えるんだな」

投影で出来た矢が突き刺さっている的を見ると、壊れた矢は投擲剣と同じ様に跡形もなく消えていた。

「まいっか」

再び投擲剣を投影し、投擲する。

それからは、矢の時と同じ光景の焼き増しだった。

投擲剣が投擲剣が穿ち、また新たな投擲剣が投擲剣を穿つ。

その光景は、投擲槍や短剣など、様々な武器で繰り返され続けていった。

「ふぅ」

刹羅は一息吐き、まだ満足していない、といった表情で的を見る。

的には、様々な武器がそれぞれ一本ずつ突き刺さっていた。

「まだやりたいけど、魔力と筋力的にキツいな」

小刻みに震える両腕を忌々しげに見つめ、投擲した武器と的と弓を回収する。

「あんな下手くそなのでしたから、見てても詰まらなかったでしょ？」

「……下手くそ……なのか？」

先程の人間離れした弓と投擲の腕のどこが下手くそなのか、まったく理解出来ない、と先生の顔が言っている。

「そりゃそうですよ。筋力不足だし、八年もやってませんでしたから技術的にも全然です。それに勘もだいぶ鈍ってます。昔ならどんなに間が空いても一、二射で修正出来たのにあんなにやらないと中心に当たらないんですから」

不満で不満で仕方無いと言った様子と口調だ。

「そ、そうなのか」

“アーチャー”
“魔弾の射手”

それら単語が、先生の頭の中に浮上する。

「武装刻印も、弓ならいいのぅ」

「武装刻印……？」

それがなんなのか、一瞬思い出せなかったが、すぐに思い出した。

「あ、ああ！　武装刻印！」

ポンッと手を叩き、思い出した、思い出した。と頷く刹羅。

「……忘れておったのか？」

「すっかり」

あははは、と笑って誤魔化そうとする刹羅を見て、先生はため息

を吐いた。

「まぁ、よかろう。すでに刻印を刻む準備は出来ておるが、どうする？」

「即っ！」

「まさに即答だねー」

身を乗り出して答える刹羅を見て、笑うデルフリム。

先生もくすくすと笑い、立ち上がった。

「では、希望通り早速行くとするかのぅ」

「はい！」

「ニャイヤイサー！」

三人は並んで森の中に入っていった。

第六話

道すがら、刹羅は色々と先生に質問をしていた。

「じゃあ、回路の絶対数は決まってるんですよね？」

「うむ。回路は魂と肉体の繋がりじゃからな。眠っているものがあったり、魂と肉体の繋がりがうまくいっていない限り、回路数に変更はないはずじゃぞ」

「じゃあ、魔力の総量は増やせるんですか？」

「うむ。それは可能じゃ」

「じゃあ、総量を増やすのはどうすれば？」

「そうじゃなぁ、まずは自分の総量を知り、それを使い切り、回復させ、それを繰り返すんじゃ。まぁ、感覚としては筋肉と同じ鍛え方かのぅ」

「ふむ」

腕を組み、考え込む刹羅。

総量が増えれば、ある程度幅が利く。

魔力が無くなればグラスティアでは常人以下。

魔力の総量以外にも、肉体という名の基盤から鍛えないといかんな。

一応筋トレはしてるけど、今の両腕を見る限り全然だな。

そうまとめ、刹羅は新たな質問をぶつけた。

「魔術って、回路に魔力を流して行使しますよね？　回路と適性があれば、どんな魔術でも行使出来るんですか？」

「まぁ、そうじゃな。じゃが、適性とは回路の適性のことを言うんじゃ」

「回路の……適性……？」

「うむ。例えば、Ａの回路には強化の適性があり、Ｂの回路には弱化の適性があるとしよう。Ａの回路で強化を行えば、もちろん効果も成功率も上がり、効率も良い。じゃが、Ｂの回路で強化を行えば、効果も成功率は下がり、効率も悪くなるんじゃ」

「つまり、適性回路で魔術を行使しなければ、どれだけうまく魔術が行使出来ても意味がない、と」

「まぁ、そんなところじゃ」

刹羅は再び腕を組んで悩みだした。

オレは適性回路で魔術を行使出来てるのか？　出来てない確率の方が高いかもしれんけど、やってみるしかないか。

刹羅の右目を閉じ、即座に内に埋没して自身に解析をかける。

回路適性、解析、強化、弱化、変化、投影、復元、加工、れんザッ、ザザッ。

回路適合率、十二％。

一の回路、強化。

二の回路、弱化。

三の回路、変化。
四の回路、復元。
五の回路、加工。
六の回路、れんザッ、ザザッ。

解析、指定回路無し。全回路適性あり。

ザッ、ザザッ、のかいザッ、げんザザッ。

ん？　なんかボケてるのがある。これが眠ってる回路、とか？　ははは っ、まさかね。

刹羅は心の中で苦笑する。

でも、やってみるもんだね。どの回路がどの魔術の回路かわかったんだ。これからはその回路で適性魔術を行使しないとね。

明日からの方針が決まり、どんなことをしようかと考えていると先生から声をかけられた。

「着いたぞ、刹羅。ここじゃ」

着いたのは薄暗い森の中。

数歩先には、淡い光を放つ古代ルーンの魔法陣。

「これが……ですか？」

「うむ。渾身の作じゃ」

幾重にも折り重なった魔法陣を、不思議そうに見つめる。

「ではまず、腕を出せ。刻印の基盤を刻む」

「はい」

刹羅は言われた通り袖を捲って左腕を出す。

先生は人差し指と中指の指先に淡い光を灯し、左腕に基盤となる古代ルーンを刻んだ。

「では、この陣の中心に立つんじゃ」

刹羅は頷き、魔法陣の中に入っていく。

「中心に立ったら、回路を開け。すべてじゃ」

右目を閉じ、自己に埋没する。

「循環回路（シリンダー）―起動（セットアップ）」

そして、言われた通りに回路を開いた。

「うむ。では、刻印を刻む。ゆっくり、大きく息を吸い込み、肩の力を抜け」

深呼吸をし、全身の力を抜く。

それとほぼ同時に、先生の口から人の声帯では発せられないのではないかと思えるような音が、言葉として発せられた。

朗々と、歌い上げるように言葉を紡ぐ。

それに呼応し、魔法陣が徐々に上昇していく。

腹の辺りまで上がると魔法陣は上昇を止め、回転し始める。

やがて魔法陣は混ざり合い、左腕に巻き、一つの形を成した。

「これが、武装刻印……」

刹羅は、左腕に刻まれた淡い紫の光を放つ刻印をしげしげと見つめる。

「どうじゃ、体に異常はないか？」

「はい、特には」

だんだんと光が収まって見えなくなってきている武装刻印を見つめる先生。

「とりあえず、その刻印に魔力を流してみてはくれぬか？」

「いいですけど、何か起きるんですか？」

「まぁ、やってみればわかる」

刹羅は首を傾げながらも、視認出来なくなった刻印に魔力を流す。

それに呼応するように刻印の一部が淡い紫の光を放つ。

次の瞬間、光を放っていた刻印が姿を消し、刹羅の前に武装として顕現した。

「……布!?」

二色の布となって……

予想を遙かに超え、もはや武器ですらない物が出てきたことに驚き呆ける刹羅。

何度見ても、表が緋、裏が黒の大きな布。

しかも、何故か左腕に巻き付けられ、手首で雁字搦めになっているため、手首から先が外れない。

これがなんなのかさっぱり理解できず、助けを求めるように先生の方を見た。

「これは……、もしや聖骸布か？」

「聖骸布？」

「うむ。聖骸布というのはのぅ、聖人の遺体を包んだ神聖な布じゃ」

「……なんの能力があるんですかねぇ？」

神聖な布と言われてもいまいちピンとこない刹羅は、首を傾げた。

「うむ。聖骸布そのものにも強い護りの力があるんじゃが、やはりそれに様々な加工を施さねば効果は出ぬのじゃ」

なる程、と刹羅は頷く。

「じゃが、このような緋と黒、二色の聖骸布なぞ初めて見たわ。少しわしに見せてくれぬか？」

「いいですよ」

聖骸布を緩めて先生に渡すと、手触りや古代ルーンを用いた解析を行い始めた。

「やはり聖骸布か。じゃが、この護りはかなり特殊じゃな。しかもすでに加工済みなのか」

なにやら険しい顔つきでブツブツと呟く。

「外界からの護りはわかるが、内界からの護りもあるとはどういうことじゃ？　ほかにも何かあるみたいじゃがわからぬな。まぁ、魔術を行使する上では特に問題は無いじゃろう」

解析を終えた先生は、刹羅に聖骸布を返す。

「では、刹羅。その聖骸布を一度刻印に戻してみよ」

「……どうやるんですか？」

「おおっ、すまぬすまぬ。言い忘れておったわ」

笑って誤魔化そうとする先生を、目で非難する刹羅。

「コホン。やり方は簡単じゃ。顕現させた時と同じように刻印に魔力を流すだけじゃ」

刹羅は言われた通りに魔力を流す。だが、

「ん？」

「どうしたのじゃ、刹羅？」

「いや、戻らないんですけど」

「……なぬ？」

眉間に皺を寄せ、刹羅は先生を見る。

先生は顎に手を当てしばらく悩んでいたが、それらしいものは見つからなかったのか、何度も首を捻る。

「……もしや、常時顕現型武装刻印か？」

「常時顕現型？」

「うむ。文字通り常に顕現しておる武装刻印のことじゃ。これは常に能力が発動出来る代わりに、刻印化出来ぬのじゃ」

先生の説明に納得した刹羅は、何度か頷いた。

「でも、これは大きすぎませんか？」

肩まで巻いてみても、服が三着は作れるんじゃないかと思えるほど余る聖骸布。

このままだと邪魔にしかならない。

「切っちゃう？　もー、ザックリと」

「ふむ。それも一つの手じゃな」

デルフリムの提案に賛同する先生。

「切れば刻印化出来ますかね？」

「それはわからぬな。まぁ、刻印化出来なければ仕舞っておけばよかろう」

「そうですね。それじゃあ、早速」

刹羅は短刀を投影し、聖骸布に刃を当てる。

「ちょっと待て」

「はい？」

制止の声を受け、刹羅は刃を止めた。

「その聖骸布は腕に巻き付いた状態で顕現したんじゃ、腕に巻くことに意味があるんじゃろう。じゃから、腕に巻いてから切った方がよかろう？」

「確かにそうですね。それに今は成長期ですから、その分も考えて

切らんと後で悲惨な状態になるし、その辺も考えないといけませんね」

「うむ」

刹羅は聖骸布を一度巻き直し、成長分も多めに考えて大体切る場所の目安をつける。

デルフリムに手伝ってもらい、聖骸布に刃を当てる。

そのまま切ろうとしたが、何故か切れない。

何度か刃を通そうと悪戦苦闘するが、やはり切れなかった。

「……何故に？」

刃が潰れているのかと思い短刀を見るが、なんの異常も無い。

試しに他の刃物を投影するが、結果は同じでうまく切れない。

納得がいかない刹羅は、短刀の存在意義を強化し、振り下ろす。

多少は切れたが、それだけ。やはりうまく切れない。

「……何故に？」

首を傾げ、短刀を見る。

なんの異常も無く、強化は正常にかかっている。

試しに他の刃物を切ってみる。

まるでバターにナイフ入れているかのように、あっさり切れた。

「強化は出来てるけど、なんで切れないんだ？」

再び首を傾げる刹羅。

「何故切れぬか。わかぬか、刹羅？」

「……さっぱり」

先生の問いにも、刹羅は首を傾げたまま答える。

しばらく考え、ある一つの答えに辿り着いた。

「もしかして、聖骸布の能力かなにかですか？」

「うむ。そうじゃ」

よく出来ました。と言いたげな表情で先生は頷いた。

「仕掛けは簡単じゃ。その聖骸布は、外界からの護り。つまり、周りからの魔術的なモノに対して高い守護能力があるんじゃ。それを身につけておれば、呪詛系統などの魔術的な干渉を受けぬ。ただ、直接的な魔術は聖骸布がある部分しか効果は無い。それに効果も、ダメージを幾分か軽減させる程度のものじゃ」

「……とりあえず、即死はないと……」

「まぁ、そんなところじゃ」

やっぱなんか微妙。

そんなことを思いながら、聖骸布を見る。

「ってことは、投影品じゃあ聖骸布は切れないってことか？」

「いや、そう言うわけではないぞ？」

刹羅の独り言に、先生が答える。

「じゃあ、なんで切れないんですか？」

「それは簡単じゃ。単に刃の角度が悪いだけじゃよ」

「……角度？」

聖骸布と刃の角度を見る。

「……ああ！」

刃が聖骸布に対して横に傾いていることに気付いた。

「そりゃ確かに角度が悪けりゃ切れんわなぁ」

うんうんと頷き、角度を修正して聖骸布を切る。

さすがに強化してあるだけあって、特に抵抗もなく切ることが出来た。

刹羅は腕に巻いてある聖骸布の余った分を適当に巻いて邪魔にならないようにすると、デルフリムが持っている残りの聖骸布を見る。

「すーぱーリムちゃんえーっくす！」

何がしたいのだろうか。デルフリムは聖骸布を体に巻き付けてマントのようにし、変なポーズをとっていた。

「「……」」

刹羅と先生が、哀れみの目でデルフリムを見る。

「……すーぱーリムちゃんえーっくす！」

めげずに、再び同じ台詞を言う。

「「……」」

「……すーぱーリムちゃんえーっくす！」

若干涙目で同じ台詞を言うデルフリム。

だんだんと可哀想に見えてきた。

二人の哀れみの目に耐えられなくなってきたデルフリムは、うずくまっていじけ始める。

「はぁ、なにがしたいんだよ」

ため息混じりに呟き、デルフリムに近付く。

「ほれ、いじけとらんとちゃんと立ちなさい」

刹羅はデルフリムを立ち上がらせ、頭を撫でた。

「うにゅ～～～」

変な声を出しながら、されるがままになる。

「なにがしたかった知らんけど、とりあえず泣くな」

「……うん」

目尻に溜まった涙を拭ってやると、デルフリムは嬉しそうな顔をした。

「うん。やっぱお前は笑ってる方が似合ってるな」

「ふにゃあっ！？」

途端、顔を真っ赤にするデルフリム。

「ん？　どうしたん？」

「にゃっ、にゃんでもにゃいよっ」

「そうか？」

疑問符を浮かべて首を傾げる刹羅。

（う〝ー。あんな笑顔でそんなこと言われると、さすがににゃあ……）

赤くなった顔を隠すように俯き、巻き付けた聖骸布にくるまる。

その姿にまた首を傾げ、とりあえず聖骸布を刻印化するために魔力を流す。

だが、やはり聖骸布は刻印化することはなかった。

「ふむ。やはり無理か」

「はい。でもまだ、デルフリムがくるまってる方は確かめてないんで、やってみないとわからないですけど……」

そう言ってデルフリムの方を見る。

それとほぼ同時に、

「リムちゃんふっかーつ！」

と叫び、勢いよく立ち上がった。

そのままクルクルと回転しながら聖骸布を取り、刹羅に渡した。

「はい、せっちゃん！」

「ん。ありがと、デルフリム」

刹羅はデルフリムから聖骸布を受け取り、魔力を流す。

だが、結果は先程と同じ。聖骸布が刻印化することはなかった。

「やはりこの聖骸布は常時顕現型武装刻印か」

「みたいですね」

刹羅は聖骸布は適当にまとめ、脇に抱える。

「ほかの武装刻印は顕現出来ますかね？」

「まだすぐには無理じゃろぅ」

「なんでですか？」

刻印を見ながら、刹羅は首を傾げる。

「武装刻印は、その者にあった最適の武装を創り出す特殊な術式じゃ。故に、刻印がその者に馴染むまではそう多くの武装を顕現出来ぬのじゃ」

「そうなんですか……」

ほかにどういった武装が出てくるのか期待していた刹羅としては、少し残念だった。

「じゃあ、この聖骸布を服にすることって出来ませんか？」

「出来ぬことはないが、何故じゃ？」

「十字戦争参加時に守りが必要じゃないですか」

刹羅の言い分に納得した先生は頷いた。

「確かにのぅ。じゃが、わしは裁縫が出来ぬぞ？」

「ボクも出来にゃいよー」

「オレは裁縫自体がわかりませんよ」

三人は困ったように聖骸布を見、顔を見合わせる。

「じゃあ、ほかの服とかに組み込むことって出来ませんか？」

「ふむ。出来ぬことは無いじゃろぅが、基となるモノがそれなりの

霊装でなければ無理じゃぞ？」

そんな優れた霊装はここには無い。

そうなると、必然的に裁縫をするという選択肢しかなくなる。

故に二人は困っていた。

どうしようか、と二人が考えていると、デルフリムがとんでもないことを言いだした。

「んにゃあ？　霊装ならあるよー？」

「なぬ！？」

「ホントか！？」

二人は勢いよく振り向き、デルフリムを肩を掴んで揺さぶる。

「うん。ってこのままだと舌噛んじゃうからやめて～」

「ハッ。す、すまぬ」

「すまん」

二人はすまなさそうに謝り、肩から手を離した。

「まぁ、許してあげましょう！」

デルフリムは腰に手を当て、えっへんと威張るように胸を張った。

「それでね、霊装なんだけど、今家にあるから家に戻らないといけないんだー」

「ふむ。そうなのか」

「じゃあ、家に戻るか」

刹羅の言葉に二人も頷き、三人は並んで歩き出す。

その姿は、まるで親子のようであった。

第一話

家に戻るや否や、デルフリムは霊装を取りに奥へと消えていった。

「そういえば、この間の体の検査の結果で聞きたいことがあるんですけど、いいですか？」

「ふむ。なんじゃ？」

刹羅の問いに答えられるよう、先生はいくつか考えられる問いと答えを用意していく。

「検査結果は、世界からの排他も無く穏やかに暮らしていれば十五年。これから送るであろう生活を考えれば、どんなに長くても十年。でしたよね？」

「……うむ……」

「この体は今、先生の知り得る知識と魔術の全てを使って多少は快方に向かってるけど、完全に治る。とは言い切れないんですよね？」

「……うむ……」

先生の表情が、悔しそうに歪む。

しかし刹羅は、自分の体の話をしているというのに、眉一つ動かさない。

まるで、赤の他人の話をしているかのようだ。

「二十五までに戦争終結、か。随分と時間があるなぁ」

時間がありすぎる。とでも言いたげな表情だ。

その表情を見て、先生は悲しそうな顔をした。

「……お主は、長く生きたくはないのか？」

先生の問いに、刹羅は首を捻る。

「ん～～、特に生には執着無いんですよねぇ」

ポリポリと頬を掻きながら、アハハと乾いた笑いを漏らす刹羅。

その目には、確かに生に対しての執着心が無い。

まるで、どこかにそれを置き忘れてきてしまったかのような印象を受ける。

先生は、それに危うさのようなものを感じながらも何も言うことが出来なかった。

二人の間に、僅かな沈黙が降りる。

刹羅はなにやら考え事をしているのか、こめかみに第一関節を曲げた状態の中指を押し付けており、先生も何か考え事をしているのか、顎に手を当てている。

数分程沈黙の状態が続いていたが、それを破るようにデルフリムが奥から戻ってきた。

「おまたー！」

そう言いながら、両手に持った焦げ茶色のローブと変わった形状の

蒼い二振りの剣。そして全てが黒い大刀をテーブルの上に置いた。

「これがデルフリムの言ってたやつ？」

「そだよ～」

テーブルの上に置かれた霊装を見た瞬間、刹羅の瞳が赤くなった。

「オイオイオイオイ、これ全部俺のじゃねェか」

「……刹羅？」

「せっちゃん？」

急に口調が変わった刹羅を見て、二人は訝しげな表情をする。

そんな二人の様子を見て自分の口調が変わっていることに気付いた刹羅は、小さく咳払いをしてから霊装を手に取った。

「ふむ。このローブは……隠れ蓑だな。この双剣は……蒼天」

順々に霊装を手に取り、確認していく。

隠れ蓑と呼ばれた霊装は、焦げ茶色のフード付きローブ。

蒼天と呼ばれた霊装は、その名の通り空を彷彿させる色を持つ、鉈よりも分厚い片刃の剣だ。

その形状はとても特徴的で、柄は包丁のように端により、その反対側、つまり刃側の方からは剣身とほぼ同じくらいの長さの棒のようなものが伸びており、使い方次第では広範囲の防御が可能となっている。

また、元から双剣として創られているため一振りでは扱いが難しい上に、普通の双剣とは重心も違うため、二振りであっても扱うのはなかなか難しいのだ。

その特異な形状故に、この剣に普通の剣と同じところがあるとしたら、双剣であるが故の短さくらいのものだった。

「そして、この黒い大刀は――」

先程から何度かチラチラと見ていた黒い大刀を無造作に掴み、

「――テメェ、黙ってっと溶かすぞ」

ボソッと、呟いた。

幸い、声量が小さかったため二人には聞かれずにすんだのだが――

『すっ、すまねぇ、ライルッ』

代わりに、黒い大刀から悲鳴じみた声が聞こえてきた。

その声を聞いた二人は、

「!?　剣が喋りおった!?」

「お久しぶりッス、ストの旦那!」

それぞれ別の反応を示した。

『あん?　お～、フリムか?』

黒い大刀はデルフリムの声でその存在に気づいたのか、懐かしそうにそう言った。

『オレはどのくれぇ寝むってたんだ？』

「ん～、そんなに長くは寝てないよ。ザッと十年くらいかにゃ？」

『意外と短かったんだな』

「そだねー」

二人――いや、一人と一振りは楽しそうに会話をしている。

そして、話に夢中になっているが故に気付かなかった。

「オイ、ストーム」

そのすぐそばで、蒼天を振り上げている刹羅に。

「ファッキンッ！！」

気合いと共に、刹羅は何の躊躇もなく蒼天を振り下ろす。

「うにゃあっ！？」

『うおっ！？』

デルフリムは黒い大刀――ストームを持って、なんとか避ける。

「オイ、デルフリム。その駄剣を俺に寄越せ」

「にゃ、にゃんでかにゃ？」

「ムカつくから溶かす」

『そんな理由で！？』

「立派な理由だ」

ニヤリと邪悪な笑みを浮かべて、蒼天を握り直す。

『あー、ライル？』

「なんだ、駄剣？」

『なんでムカついてんだ？』

「ア？」

不良やヤクザなどと言ったガラの悪い人を彷彿させるような表情で、首を傾げる刹羅。

『もしかして、あれか？　前々回の記憶が戻ったのか？』

「ハァ？　何言ってンだテメェ。俺の記憶は全て記録と化してンだよ。ラベルのねェ本が地平の彼方まで山積みだ。本のラベルはそれに関するワードがねェと読めねェ」

『じゃ、じゃあ、なんでムカついてんだ？』

「なんとなくだ」

『なんとなく！？　なんとなくで溶かされんの、オレ！？』

「ったりめェだ」

刹羅はニヤニヤと笑いながら近付いていく。

『オレはこのまま溶かされたくねぇッ』

「だったら擬人化して逃げればいいだろうが」

『っ！？　そこまで思い出したのか？』

ストームの問いに、刹羅はニヤリと笑みを浮かべて答える。

「ワード・黒の大刀。名、能力、性能、使い方。そして真名。今、全てが記録されている本を閲覧してるところだ」

『そうか。んじゃあよぉ……。オレがいろんなワードを教えてやるから――』

「溶かすな、ってか？」

『応っ！』

「そうか……」

くつくつと笑いながら、デルフリムの手からストームを引ったくる。

「ンじゃアよォ。情報を聞く間だけは生かしといてやンよ」

『鬼ッ！！　悪魔ッ！！』

ストームの罵りを、刹羅はイイ笑顔で受け流す。

「お褒めに与り恐悦至極、ってなァ」

『ちくしょう。相変わらずイイ性格してやがるっ』

「ファック。俺を誰だと思ってンだよ」

『変な口調の悪魔』

「……」

刹羅は無言でストームを抜き放ち、踏みつけて折りにかかる。

『ギャアアアア！！　折れる折れる折れるぅぅぅうううう！！』

「うるせェ。そのまま折れろ」

『ギャアアアア！！』

ストームの悲鳴が、辺りに木霊した。

それから小一時間程ストームをシメ続けた刹羅は、今は機嫌良さそうにお茶を飲みながらストームを踏んでいる。

今では目の色も元に戻っているのだが、口端を吊り上げてニヤリと笑っている。

「で？　いったいどんな情報をくれンだ？」

『その前に足退けてくれッ』

「あん？」

『……いや、なんでもねぇ』

ストームは諦めたようなため息を吐き、自身の知る情報を話す前に確認をしてくる。

『オレが言えんのは飽くまでワードだけだ。詳しくは言えねぇ。それでも構わねぇよな？』

「構わねェよ。今は一つでも多くの情報と一つでも多く使える力が知りてェだけだからな」

『わかったぜ、相棒』

ストームは嬉しそうな声でそう言うと、自身の知る情報を話始めた。

『ワード・錬鉄、錬金術、魂魄、バレル・グラデーション、加工、回帰、氣とかだ。他にもまだあるけど今はまだその時じゃねぇ』

「……そうか……」

刹羅は右目を閉じ、裡に埋没する。

地平の果てまで堆く積み上げられたラベルの無い本の山の一部に名が現れ、閲覧が可能となっていく。

それ等全てを閲覧する為に、刹羅はラベルの付いた本を片っ端から呼び出して物凄い早さで読んでいく。

だが、それ等全てを閲覧するのには流石に時間が掛かるだろう。何故なら、一部と言っても地平の果てまで堆く積み上げられた本の山の“一部”だ。恐らく妖精郷にいる間に全てを読むのは不可能だろう。

刹羅もそれはわかっているので、今は錬鉄と錬金術、加工、氣、これ等四種類について載っている本のみを呼び出して読んでいる。

……そうか、俺の投影は――いや、錬鉄は、投影と錬金術を織り混ぜたようなモノだったのか。

それに、加工ってのも錬鉄や錬金術と相性いいな。

うをっ。強化も弱化も変化も全部加工と錬鉄から来てンのか。

こりゃ、一気にレベルアップ出来るかもしれねェぞ。

それにこの氣ってのもいいな。うまく使えば身体的な面での性能を多少なりとはカバー出来んな。

それから暫くの間、刹羅は裡に堆積した記録を閲覧し続けた。

第二話

結局その日は草花の蕾が閉じるまで……つまり、夜まで刹羅は自己最速のスピードで記録を閲覧し続けた。

その為、おおよその内容は理解出来、すぐにでも実践しようと考えていたのだがデルフリムとスートムに今日は休めとしつこく言われた為、今は外で空を見上げながら一人お茶を飲んでいる。

「我が身は空虚ながらんどう」

誰に聞かせるでもなく小さく呟く。

「器は穢れ、座は堕ちる」

遠くを眺め、手を伸ばす。

「幾星霜の時を越えようとも――」

ふと、背後に人の気配を感じ口を閉ざす。

「どうしたんですか、先生？」

「……」

振り向くこと無く問い掛けるが、返ってくるのは風の音のみ。

刹羅は一つため息を吐き、

「ファック。返事はどうした？　刹那」

「――――っ！？」

背中越しに先生がビクッと震えたのを感じ取る。

それでも刹羅は振り向くこと無く言葉を続ける。

「なんで名を知ってンだ？　ってツラしてンだろ」

「……」

「わかるに決まってンだろ。その魂にしっかり刻まれてンだからよォ」

「――――っ」

「それに姿まで――いや、年まで偽る必要あんのか？」

「――――！？」

「そう驚くことかよ。体と魂の姿の違い見りゃア一発でわかンぞ？」

「……」

刹羅はゆっくりと振り向く。

その視線の先には、刹羅より二つ三つは年下であろう白髪の少女が樹の影に隠れるようにして立っていた。

「ほら。来いよ、刹那」

少女――刹那を手招きする刹羅。

刹那は暫し迷うような仕草を見せるが、辛抱強く待っているとおずおずと近付いて来た。

それを見た刹羅は横にズレ、刹那が座れるだけのスペースを空ける。

刹那は少し恥ずかしそうにしながらも、刹羅の隣にちょこんと座った。

「……」

「……」

二人の間に沈黙が流れる。だがそれは不快なものではなく、寧ろ心地よささえ感じられた。

それからいったいどれだけの間沈黙が続いたのだろうか。

一瞬とも、永遠とも感じられる沈黙を先に破ったのは刹那だった。

「のぅ……刹羅。いつからわしの真なる名を知っておるのじゃ？」

「ファック。んなもん初めっからだ」

「初め……から……？」

言葉の意味がわからないのか、不思議そうに首を傾げる。

その姿は年相応の少女のそれで、とても可愛らしく見えた。

「初見からってことだ」

「と言うと、あの病室で会った時か？」

「ああ」

そう平然と答える刹羅に、驚いたように目を見開く刹那。

まさかあの時すでに名を知られていたとは……。そんな気持ちが心を支配していた。

だがそれは、彼女にとって嬉しくて仕方がないことであった。

「おい、刹那」

「な、なんじゃ？」

その気持ちを悟られぬよう注意して答えたつもりなのだが、どうしても声が緊張してしまう。

「その口調。いい加減やめたらどうだ？　話しにきィだろ？」

違和感バリバリだぜ？　などと言い、刹那の頬を軽く引っ張る。

「ふにゅう～～～～！」

「ははっ。よく伸びる、よく伸びる」

「うーにゅ～にゅ～～！」

「ちゃんと喋りなさい。でないとわかりませんよ？」

「うにゅーーーー！」

そう言いながらも手を離すことのない刹羅に抗議するように、刹那はポカポカと刹羅の胸を叩く。

「ははっ。そんなんじゃ効かねェぞ～？」

まるでじゃれつく子供を相手にするかのような刹羅に、刹那はより一層不満そうな顔をする。

きっと頬を引っ張られてなければ頬をパンパンに膨らませていただろう。

「うにゅう……」

「ん？　どうした、刹那？」

急に抵抗するのを止めた刹那の頬から手を離し、刹羅は不思議そうに顔を覗く。

「父様のばか……」

「はい？」

今何つった？　父様？　それ俺のことか？

「なぁ。もしかして、父様って俺のことか？」

コクンッと、少し恥ずかしそうに刹那は頷いた。

……はい？　俺は誰とも子を成したことはねェぞ？　初代も、二代目も、三代目も。もちろん、四代目になる今世も無い。八年前からずっと病院の一室に監禁されてたんだからな。厳重な電子ロックと内からは開けられない鍵の二重ロックで。

それに刹那は俺には似てねェし。

そんな刹羅の疑問に答えるように、刹那は口を開いた。

「父様は、未来の父様は、せつを助けてくれたんです。家族に、娘にしてくれたんです」

とても嬉しそうな笑顔でそう言うと、ベッタリと刹羅にくっつく刹那。

いきなり娘と言われてもどう接すれば良いのかわからない刹羅は、出来るだけ平静を装って刹那の頭をポンポンと撫でる。

「未来の俺ってのは、そんな善人紛いの事をするような変わりモンになっちまったのか？」

誰にも聞こえない程小さな声で呟く刹羅。

その手付きは、どこかぎこちないものだった。

◆◆◆

しばらく撫でていると、それが子守唄になっていたのか、いつの間にか刹那は眠っていた。

「どう？　なっちゃん寝ちゃった？」

「ああ、もう寝てるよ。ぐっすりとな」

刹那が寝付くまで少し離れた場所で待っていたデルフリムが、刹那を挟むように隣に座ってきた。

「どうですか？　ある程度は記憶を――いえ、記録を閲覧出来ましたか、我が主（マイ・マスター）？」

「まぁな。初代に関するモンは全然だが、二代目、三代目に関するモンは大体はわかる」

「何をしていたのですか？」

彼が本当に己が主である神裂　刹羅なのかを――いや、■■■■■■■■■■■■なのかを見極める為に、デルフリム敢えて問う。

刹羅もそれを理解しているのか、何も問わず、空を見上げたまま口を開いた。

「二代目はストームと隠れ蓑を繰り、龍殺しを生業とした剣士。その最後は、生涯でたった一度だけ恩を受けた老夫婦を逃がすために一つの小さな村の前で億を超える敵兵を屠った純血の人間。
三代目はあらゆる武器の創造、及び初代の時に創造した武器の再創造を行った魔術師兼錬金術師の鍛冶師。その最後は、この魂が刻んできた時の中で最初にして唯一の友の遺志を継ぎ、腐りきった王国

を相手に一人戦った半精霊半人間」

そこで一度区切り、デルフリムの方に顔を向け

「己が“悪”にのみ味方する男。ライアネル・クロムハーツだ」

その答えに満足そうな笑みを浮かべ、

「お帰りなさいませ。そして初めまして。生涯でただ一人の主、ライアネル・クロムハーツ様」

まるで恋人に向けるかのように、万感の思いを込めて彼女は彼の名を呼んだ。

第三話

翌日から刹羅の周りの環境は一変した。

先生――いや、刹那はまるで親と一緒にいられなかった時間を取り戻そうとするかのように事ある毎に刹羅に甘えるようになった。

デルフリムは時折口調や雰囲気が変わり、刹羅の鍛練を付き合ったり、何故か色仕掛けをするようになってきた。

もっとも、お子様ボディーのままなので色気も何も無いのだが。

そしてストームは擬人化し、刹羅の鍛練及び話し相手となった。

この八年の間、医者を除いた同性とのやり取りが一切無かった刹羅にとってそれは有り難いものであった。

もっとも、そんな事はおくびも見せなかったが……

「なァ、ストーム」

『なんだよ、ライル』

そして二人は今、川の畔でびしょ濡れになって地面に寝転がっていた。

「この前お前が言ってた能力の中に幾つか聞き慣れ無いのがあったが、あれは何だ？」

刹羅は――いや、ライアネルは隣に寝転がっている袴姿の男、ストームに問い掛ける。

『今更だな、ライル。二週間も前の事を訊いてくるなんて』

「黙れ、ストーム」

ライアネルはストームを睨み付け、寝転がっている状態から鳩尾に蹴りを放つ。

『ぐぼぇっ！？』

ライアネルの体の柔らかさや関節の柔軟性を考慮していなかったのか、ストームまともに蹴りを受けて悶絶している。

そんなストームを嘲笑い、ライアネルは勢い良く起き上がった。

「うしっ、休憩終わりっ」

『げほっ。おい！　まだ十分くれーしか休んでねぇぞ？　もちっと休め。じゃねぇとまた血ぃ吐いて倒れるぞ？』

「知るか、ンなもん」

ライアネルは上着に付いている赤を軽く水で洗い、未だ長いままの髪の毛をポニーテールに纏め上げる。

『男のロングポニー……ぷっ』

「……」

『あれ？　何でかな？　何か色濃い殺気と怒気を感じるような～……』

ストームは、まるで油を挿していない機械のようにギギギッとぎこ

ちなくそちらの方へと振り向き、

『あの～、何故蒼天を構えていらっしゃるので？』

「循環回路（シリンダー）―起動（セットアップ）」

『何故回路起動！？　しかも目ぇ紫って、全回路起動かよっ！？』

まるでバネでも仕掛けてあるかのようにストームは跳ね起き、腕をクロスさせる。

直後、甲高い金属音が二人の間に鳴り響く。

「チッ」

『チッ。じゃねぇッ！！　オレを殺す気かッ！？』

「……チッ」

『やっぱ殺す気だったのか！？』

慌ててはいるものの、ストームは歴戦の戦士を彷彿させる洗練された動きで蒼天を弾きライアネルを吹き飛ばす。

吹き飛ばされたライアネルは空中で身を捻り、水の中に着地した。

「そら、構えろ。続きをやるぞ」

『だからもちっと休めって！』

ストームは己が相棒の体を気遣い休むよう進言するのだが、ライアネルは全く聞く耳を持たず、魔術を行使する。

「強化（バレット）―装填（セット）」

今までとは違う詠唱を口にする。

この二週間でライアネルの戦闘スタイルや詠唱は変化をした。

戦闘スタイルは主に蒼天を使った近接戦闘と投擲による遠距離戦闘。

魔術の詠唱は所々に変化があったが、根本は変わっていない為、効果に大きな変化は起こっていない。

だが、確かに変化した事もある。

今までは強化であれば全身や全体にしか出来ず、得意とするもの以外は細かな選択が出来なかった。

しかし今では、部分的な魔術行使がある程度は可能になり、無駄に魔力を消費することが無くなった。

また、魔力量も増えるように鍛えている為、今では以前よりも長時間の魔術行使が可能になり、こうして自分より格上の実力者に短時間ではあるが立ち向かえるようになっていた。

最も、ストームとの鍛練を始めてから今までただの一度も勝てていないのだが……

「ファッキン！！」

掛け声と共にライアネルは強化した足でぬかるんだ地面を蹴り、川の中から空中に躍り出る。

強化を施した腕で蒼天を上段から振り下ろす。

『脇腹が空いてんぞッ！！』

その言葉通り、蒼天を振り上げた左の脇腹は空いており、ストームはそこに鋭い突きを放つ。

「なろッ」

ライアネルは空中で器用に身を捻り、右手に持った蒼天の腹で受け止める。

「ぐっ！」

だが、それだけでは突きの威力を殺しきれず、ライアネルは再び川の中に沈む。

そこにストームが追撃を仕掛ける。

川の中に倒れていたライアネルの目に、空を裂きながら迫り来るストームの足が見えた。

ライアネルは咄嗟に地面を叩く。

瞬間、地面が隆起しストームの蹴りを妨害した。

『チッ、錬金術か！？』

ストームは追撃を止め、即座に距離を取る。

一瞬遅れてストームが居た場所から土で出来た突起が生え、ストームの後を追うように次々と出現していく。

「ぐぅっ」

ライアネルは、何故か顔を歪めながら起き上がり油断無くストームを睨み付ける。

『だから無理すんなって。陣の補助も無しに、しかも龍脈からの氣じゃなくて自身の魔力で錬金術を行使なんてすると、ぶっ倒れんぞ？』

「ファック。ンなもん千も承知だ！」

『千ってなんだよ、千って』

「……ファッキン！！」

『うおっ！？』

再び川の中から空中に躍り出て蹴りを放つライアネル。

ストームはそれを捌き空中から地上に落とそうとするが、そうはさせないとライアネルは蒼天を叩き込む。

コンパクトに蒼天を振るい出来るだけ隙を作らず、蹴りと蒼天を叩き込む際に生まれる反動で宙に舞い上がろうとする。

しかしストームもそれはさせないと拳を振るい、蹴りを放つ。

ライアネルはそれらの攻撃に自身の攻撃を合わせ、宙を舞う。

『チィッ』

宙に舞い上がった瞬間、ライアネルの動きが変わった。

今まで以上に鋭く、早く、重い一撃がストームに叩き込まれる。

本来、空中では踏ん張りが効かない為、力も出なければ早くも動けない筈なのだがライアネルはまるで空中に床があるかのように縦横無尽に駆け巡り、優雅に舞い、苛烈に攻める。

地上でぶつかり合う時より格段に強く、空中は俺の独壇場だとでも言うかのように動き回るライアネル。

『くっ』

トリッキーな動きでストームを翻弄し、攻め立てる。

ストームの眉が僅かに撓み、それに呼応するかのように徐々にライアネルが押し始める。

そしてついに、ライアネルの蹴りがストームの顔を捉えた。

『ガッ！』

ストームの上体が僅かに反れる。

それを好機と、ライアネルは更に攻め始めた。

肩、胸、頭の順に蒼天と蹴りを放ち、ストームの体勢を崩させる。

それから何度かライアネルの攻撃がストームに当たり、ついに傷を一つ付けた。

しかし、ストームに傷を負わせられる程の攻撃が出来たからと言ってストームとの差が縮まるわけではない。

その証拠に、ストームは傷を付けられてからは一度も攻撃を受けること無く防ぎ続け、隙あらば拳を放ちライアネルの体勢を崩している。

徐々に手数が増えていくストームに反比例するようかのに、ライアネルの手数か減り防戦一方になっていく。

「くっ！」

『オラ、どうしたァ！！　動きが鈍くなってきてんぞッ！！』

その言葉と共に、ストームの蹴りがライアネルの鳩尾に吸い込まれていく。

「なろォがッ」

蒼天を無理矢理引き戻し、ストームの蹴りを蒼天の刃から伸びる棒、蒼天窮（ソウテンキュウ）で何とか受け止める。

だが、蹴りの威力は蒼天窮を貫通し、ライアネルにダメージを与える。

更には、勢いを殺すことも出来ず後方に吹き飛ばされた。

痛みから体勢を立て直すことが出来ず、背後に迫る岩肌に叩き付けられそうになる。

ギリギリでそれに気付いたライアネルは、足を後方に向ける。

足が岩肌にぶつかる直前、紫の光が足の裏から吹き出し爆発する。

瞬間、ライアネルの体が前に吹き飛んだ。

「うをっ！？」

あまりの勢いに、ライアネルは顔から川の中に突っ込む。

『うわっちゃあ～』

ブクブクと川の中から上がってくる泡と浮かび上がって来るライアネルを見て、ストームは思わず顔に手を当てる。

『ったく、まだ慣れてねぇのに魔力ブースターを連発すっからそーなんだよ』

ストームはため息を吐きながら気絶しているライアネルを川から上げ、仰向けに寝かせる。

「ん～、とーさまぁ～？」

と、そこに眠たげに目を擦りながら刹那がフラフラと歩いて来た。

『応っ、お嬢。どうした、オシッコか？』

「……ｌａｇｕｚ（ラグズ）」

『へ？』

刹那の言葉に反応するかのように水面が膨れ上がり、竜の姿を象る。

『え？　あ、ちょ――』

「デリカシーの無い剣にはお仕置きです。錆びなさい、です」

急いで走り出すストームに、水竜が襲い掛かる。

ストームを追い掛け、大質量の水竜が動く度に地面が抉れ地鳴りが起こる。

岩肌にぶつかり飛び散っても直ぐに再生し、水竜を象る。

なかなか攻撃が当たらないことが不満なのだろう。頬を膨らませて新たな言葉を紡いだ。

「ｌａｇｕｚ（ラグズ）―双頭水鎌」

水竜の頭が二つに分かれ、尻尾が鎌に変わる。

『な、ちょっ！？』

水竜の双頭が絶え間無く動き、僅かに出来る隙を補うように鎌が踊る。

それを何とか避け、時には防ぎ、片腕を刀身に変え切り裂く。

「……その能力はズルいです」

刹那は、切り裂かれた水竜を見て更に頬を膨らませる。

切り裂かれた水竜は再生すること無く水に還っている。刹那はその事が不満なのだろう。

水竜に命を飛ばす。

それに応じ、攻撃に更に苛烈になっていく。

『ド畜生がァッ！！』

ストームは、腕を振るう瞬間や蹴りを放つ瞬間だけ刀身化し、水竜を削っていく。

『しゃらぁぁぁぁぁ！！』

更に攻撃の速度を上げ、水竜を刻んでいくストーム。

水竜相手に奮闘するストーム。だが、刹那は既にストームの事を見ていなかった。

「父様、父様」

刹那は、ライアネルのそばに居た。

刹那はライアネルを起こそうと、何度か体を揺らす。

その度にライアネルは小さく呻き、顔をしかめる。

しかし、ライアネルが起きることは無かった。

刹那はもじもじと股を擦り合わせ、更にライアネルを揺らす。

「父様、父様」

「うっ、ううっ」

強く揺すられ、ライアネルは苦しそうに目を開ける。

そこには、顔を真っ赤にしてプルプル震えている刹那がいた。

目には涙が浮かび、顔にはエマージェンシーと書いてある。

「ど、どうした、刹那!?」

その表情にどこか鬼気迫るものを感じたライアネルは、慌てて体を起こし立ち上がる。

「……です」

「何？」

「……ちゃいそうです」

「何だ？」

「……漏れちゃいそうです」

「何がだ？」

「だ、だから、おしっこ……」

「へ？」

「漏れちゃいそうなんです」

「おしっこがか？」

「……んぅ」

赤い顔を更に赤くし、刹那は小さく頷いた。

それを聞いたライアネルはホッと一息吐く。

「なんだ、それならそうとはっきり言やァいいもんだろうが」

ライアネルは呆れたようにそう言うと、刹那の頭をぽふぽふと撫でる。

「うぅっ。もう、漏れちゃうですぅ」

股を擦り合わせる速度が早くなり、もう貯水タンクが破裂寸前の緊急事態だと報せる。

「うをっ!?　い、急げッ!!　垂れ流すなよ!?　漏らすなよ!?」

ライアネルは刹那の手を引き、林の中に連れていく。

勿論ゆっくりと、だ。

「ほら、サッサと済ませて来い」

「んぅ」

もじもじしながら草むらの中に入っていく刹那。

それを見届けると、ライアネルは草むらから離れようと足を向ける。

例え自分を父と呼び慕っていたとしても、刹那は女の子だ。

それを考慮すれば離れるべきだと考え、離れようとしたのだが

「とーさま。怖いから手、握って……」

今にも消え入りそうな刹那の声が聞こえ、足を止める。

「俺は別に構わねェけど、お前は恥ずかしくねーのか？」

「せつは恥ずかしくないです。だから手……」

草むらから出る小さな手を見てため息を吐き、ライアネルは手を握ってやる。

小さな手はボロボロの手を握り返し、キュッと力を込める。

一瞬、顔を歪めたが、すぐに何事無かったかのような表情に戻るライアネル。

それから少しすると衣擦れの音が聞こえ、小さな音が耳に届く。

ライアネルは小さく苦笑した後、顔と体を背け、裡に意識を向ける。

先程のストームとの鍛練をイメージとして再構築し、改善点を探す。

魔力ブースターの制御に動き、剣速剣筋踏み込み、地上での攻撃、空中での防御、かな。まだまだ改善点は大量だな。

先読みももっと上手く出来るようにならんとな。

先程のストームの動きを脳内でシュミレートし、目の動き、足捌き、踏み込み、肩の動き、体捌き、重心、筋肉の脈動、呼吸の速度等から導き出される幾億の平行の可能性の中から最も可能性の高いものを選択し見極める。

更には、自身に隙を生じさせ、選択肢を更に絞る。

そこから導き出される幾つかの平行の結果を元に、防御する。

記録はあっても記憶と経験が無いライアネルにとって、この戦闘スタイルは綱渡りよりも危険なのだが、それでもやっている。

否、やるしかないのだ。例えそれが諸刃の剣であろうとも……

しかも、記録を閲覧しながら戦っている為、かなりの集中力を必要とする。

戦闘時のライアネルの状態を簡単に言えば、本を読みながら戦っているようなものなのだ。

故に、戦闘のみに集中するのは難しく、また、記録を閲覧しながら微調整も行わなければならない為、かなり大変なのだ。

――と、思考に埋もれていると、手を引っ張られている事に気付きそちらに顔を向ける。

「終わったか？」

「はい……」

恥ずかしそうにしながら草むらから出て来る刹那。

「そういやァ、今ってまだ夜中だよな。どうしてこんな時間にこんなとこにいンだ？」

「えっとぉ、それは――そのぉ……」

俯き、小さな声でボソボソと要領を得ない返事を返す刹那。

それを見たライアネルはため息を吐き、刹那の頭を乱暴に撫でた。

「ふぇっ？　父様？」

いきなり頭を乱暴に撫でるライアネルに、訳が分からないと言った表情でされるがままになる。

「あんま遅くまで起きてンじゃねェぞ？　体にわりィから」

「ごめんなさいです……」

「分かればよろしい」

芝居掛かった仕草でそう言うライアネル。

その様子が可笑しかったのか、刹那は小さく笑った。

そして、それを見たライアネルも、少しだけ、口元を緩めた。

第四話

それからまた十日が経った。

ストームに会ってからライアネルは、一日目は筋トレや武器の扱い方、魔術抜きの模擬戦等を丸っと一日行い、二日目は体を休ませつつ魔術の行使や知識、記録の閲覧に時間を割き、三日目は氣の習得と魔術有りの模擬戦に時間を費やすと言うサイクルで日々を過ごしている。

そして今は、筋トレをしていた。

「四十七っ……四十八っ……四十九っ……五十！　はぁっ、はぁっ、はぁっ、ラスト腕立て終わり～」

ライアネルは肩で息をしながら仰向けに寝転がる。

『んじゃあ、小休憩後に氣の鍛練な』

「ハァ？　ちょっと待てよ。氣は明後日だろが」

『休憩兼鍛練のつもりで言ってんだが、無理か？』

「ファック。っざけんな。俺を誰だと思っていやがる」

『つんで「一般的に意味の通用する単語で喋れ」……』

「ったく。我が剣ながら恥ずかしいぜ」

『うるせぇ、一般的な人間以上ダンピール以下』

「ファック。ンな事はとっくの昔に理解しとるわ」

腕を振って勢い良く体を起こし、立ち上がる。

「んじゃあ、やるか。氣の鍛練」

『なんだ、もういいのか？　まだ五分くれーしか休んでねぇぞ？』

「構わねェよ」

体を軽く伸ばし、準備を始めるライアネルを見てストームも準備に

入る。

ライアネルは足を少し広めに開き、腰を落とす。

丹田に意識を集中し、そこに全身を駆け巡る力を集中させるイメージを構築する。

力の流れを感じ取り、掴む。

丹田に集中させた力、氣を圧縮し膨張させ圧縮し、と繰り返し感覚を掴んでいく。

『今回のお前は、二代目ライアネル・クロムハーツとは比べ物にならんほど生命力が少ない。則ち、氣が少ないと言うことだ。まずは気の絶対量を増やせ』

氣の鍛練を行う度に、ストームはそう言う。

それは魔力や魔術の面でも同じ事で、三代目ライアネル・クロムハーツとは比べ物にならないほど少なく、拙い。

それを良く知っているストームは事細かに注意し、それを良く理解

しているライアネルは黙々と指摘された点と記録の二点から修正を行っている。

『いいか？　破裂寸前の風船みてぇになるまで膨らませろ。それを受け止める皿は生地みてぇに引き伸ばせ』

「わーてるよっ」

不機嫌そうにそう答えながらも、しっかりとそれを実行するライアネル。

膨らむ風船は氣の絶対量を、受け止める皿の大きさは一度に扱える氣の量を示す。

例えどれだけ多くの気を持っていても、それを受ける受け皿が小さければ意味が無いのだ。

また、それらは飽くまでイメージでしかないのだが、確かにライアネルが体感しているものでもあった。

『無理に引き伸ばすなよ。死ぬほど痛ぇから』

「わーてるよっ」

前科持ちだからな。

『膨らませ過ぎて破裂させんなよ。死ぬから』

「わーてるよっ」

幽体離脱したからな。

『……なんか心の声が聞こえた気がしたんだが、気のせいか？』

「気のせいだ」

断言するライアネルに、不審そうな視線を向けるストーム。

そんな視線など何処吹く風、と言った様子のライアネル。

それを見たストームは小さくため息を吐き、

『無理無茶無謀は結構だがよう、死ぬ一歩手前で止めとけよ？』

「わーてるよっ」

『ったく。人が心配してやってんのに……』

「ファック。誰が心配してくれっつった？」

『はぁ。そこは素直に有り難がれよ……』

「誰が有り難がるかよ」

『そーかよ』

ストームは再びため息を吐く。

それからはお互い何も言わず、ただ黙々と氣の鍛練を続けた。

氣を練り、圧縮させ、膨らませる。

受け皿となる躯に気を馴染ませ、浸透させていく。

徐々に徐々に気の量を増やし、自己を高めていく。

それを繰り返す毎に、少しずつライアネルの瞳が赤に染まっていった。

◆◆◆

それから二時間が経った。

今は氣を纏った状態で体を動かしている。

蒼天を振るい、蹴りを放ち、イメージの中のストームに一撃を入れるべく動き回る。

地上では攻撃よりも防御に重きを置き、地を蹴った瞬間、防御から攻撃に転ずる。

魔力ブースターを使った時のように縦横無尽に宙を駆け巡る事は無く、ただ宙に浮いているのだ。

まるで、空を飛んでいるかのように。
ただ、まだ慣れていないのだろう。時折、空中でフラつき落ちそうになっている。

「フッ、ふぅぅぅ」

一通り終えたのだろうか。ゆっくりと息を吐き出し、ライアネルは構えを解く。
蒼天を鞘に納め、辺りを見渡す。

「なんだ。まだストームは戻ってねェのか」

一時間程前にデルフリムの所に行くと言ってこの場を離れたストームは、未だに戻ってこない。

「まぁ、アイツは方向音痴だからな。多分森ン中で迷ってンだろ」

そう言うと、ライアネルは少し離れた場所に蒼天を放り、足を開いて腰を落とす。

「ふぅぅぅっ」

ゆっくりと息を吐き、意識を裡に向ける。

一気に氣を高め、裡から爆発させた。

「ゴッ、ガァァァァアアアアア！！！！！」

一瞬の内に瞳が赤に染まり、大気を震わせる。

氣の量が多ければ多いほど辺りに影響を与えるのだが、まだ氣の量が少ない今のライアネルでは精々大気を震わせる程度が限界なのだ。

「アアアアアアアア！！！！！」

雄叫びと共に更に生命力を燃焼させ、氣へと変換する。

長い髪が、ゆっくりと浮き上がる。

「ガッ、ガガガッ」

しかし、それまでだった。

それ以上の変化は無く、段々と膝が震えだし、上体がグラつく。

生命力を燃焼させ過ぎたのだ。

「あ、ああ……、あ、あ……」

体がゆっくりと前に傾いていく。

「あ、が……」

そこで、ブツンッ、と意識が途切れた。

†　†　†　†　†

小高い丘の上で、ボロボロのローブを風に靡かせ、全てが漆黒の大刀を握って立って居る。

前方には、幻獣を含め、億を優に超える軍勢。

後方には、古ぼけた小さな村と数キロ先に避難途中の村人がいる。

国は彼等を切り捨てると決めた。

その判断に間違いは無い。

一を切り捨て九を救う。
それは国の、王の判断として間違いは無い。俺も普段ならそうするだろう。

だが、今回は違う。ここには命の恩人がいる。

一切れのパンと一杯の水。

十二年前のあの日、あの老夫婦の施しを受けなければ、俺は死んでいた。

あれは、この十六年の人生の中で最初で最後の施し。

この大恩を返すために、今ここに居る。

「我が名はライアネル・クロムハーツ!!　金色の彗星!!　黎嵐の魔剣士!!　千の龍を殺す者（サウザンド・スレイヤー）とは俺の事だッ!!」

世界中に響き渡るよう、声を張り上げ名乗りを上げる。

「さぁ!!　命が惜しくない者!!　名を上げたい者!!　我こそはと思う者は掛かって来いッ!!　来ないのならば、我が行くッ!!」

右手に持った大刀を握り締め、構えを取る。

「ゴッ、ガァァァァアアアア!!!!!」

全身を力で満たし、爆発させる。

大気が震え、地が裂ける。

雷鳴轟き、爆風が吹き荒れる。

世界にまで影響を及ぼす程の力を一気に圧縮させ、裡で爆発させた。

「ガァッ！！」

瞬間、全身を全能感が包む。

「行くぜ、ストォォォォムッ！！」

『オーケィ、ラァァァァイルッ！！』

人間と大刀が吼える。

相棒の呼応するかのように大刀にヒビが入り、漆黒が砕け散る。

漆黒が砕けた大刀を振り上げる。

瞬間、刀身が金色に輝く刃へと変わった。

「久遠剣・終の型――」

振り上げた大刀を、一気に振り下ろす。

「――斬光滅龍牙！！」

金に輝く斬撃が、億の軍勢を切り裂いた。

†　†　†　†　†

ぐっ、うぅっ。

意識が段々と浮上していくのが分かる。

また、気絶してたのか。

そんなことを思いながら、意識がたゆたう感覚に身を任せる。

そういやァ、今懐かしい夢を見たな。

あれは二代目ライアネルの最期の戦。

俺とストームの、たった二人で億を超える軍勢に正面から立ち向かう最期の華。

戦の結果なんてよく覚えてねェし、あの老夫婦が生き延びれたのかも知らねェ。

けど、満足だった。

俺の髪と瞳が限り無く黒に近い紺だから、ただ黒に近いからと言うだけでサッサと捨てたクソ共。

俺をよく奴隷階級と間違えてなぶりやがったカス共。

それら全てのクソ共に、最大級の屈辱を与えてやれたんだからな。

あの世界では、例え英雄と呼ばれる程の行いをしても身分が低ければ高い者に功績を奪われる。

例えどれだけ強くても、例えどれだけの偉業を成し遂げようとも、身分が無ければ意味が無い。

けどなァ、あれは俺にしか出来ねェ。

あの、腐れヘタレ野郎共にゃア、ゼッテー出来ねェよ。

そして何より、攻め込んで来た国の王と、攻め込まれた国の王が俺を讃えたんだ。

俺を屑扱いしてきた奴等にゃア、最大級の屈辱だろォよ。

何と言っても、満身創痍の状態で、誰の助けも借りずに億を超える軍勢を屠ったんだ。

しかも、結果的には国を救い両国の架け橋となったらしいからな。

誰もが嫌でも賛辞を送らにゃならん。

ククククッ。出来ればそのツラを拝みたかったね。

屈辱にまみれた、その醜いツラを。

暗かった世界が徐々に明るくなっていく。

どうやら微睡みは終わりらしい。

ゆっくりと浮上していく感覚に身を任せ、白い光にのまれていった。

「うっ、うぅっ」

変わらぬ茜色の柔らかな光が、目蓋の上から刺激してくる。

ゆっくりと目を開くと、そこには見慣れた小麦色の肌があった。

「あ、せっちゃん起きた?」

ライアネルの顔を覗き込む、逆さのデルフリムがいた。

しかも、ドアップで。

「うをっ!?」

予期せぬ突然の事態に思わず起き上がろうとしたが、デルフリムの

手によって制される。

「まだ寝てなきゃダメだよ？　せっちゃん今空っぽなんだから」

言われている意味が今一理解出来ていないライアネルは首を傾げる。

と、そこで何やら後頭部に柔らかな感触を覚え、今の状況を分析する。

逆さまの顔。柔らかな感触。近い顔。

……？

どうやらまだ頭が覚めていないようだ。膝枕をされていることに全く気付いていない。

いや、過去の記録にもそんなものは存在していないから知らないだけなのかもしれない。

それを良いことに、デルフリムは愛しい主の重みと近さを堪能する。

しかしそれだけでは足りぬと感じたデルフリムは、そっと手を伸ばし頬を撫でる。

長らく日に当たっていなかった肌は白く、柔らかい。

シミやそばかす、出来物も何も無い肌。

女性が羨ましがるだろうな、等と思いながら頬を撫でる。

長い髪は、髪質だろうか？　硬い。

そう言えば、あまり髪が短いと寝癖がなかなか直らない、とぼやいていた主を思い出す。

それは過去の記憶。けれどそれは、今の彼にとって未来の可能性の一つ。

無限の選択肢の中から選び出される、たった一つの小さな道。

それを選択するしないは彼次第。

けれどそれは必ず起きると信じている。

だって、彼は言ったんだ。自分には平行の可能性も、平行の自分も居ない。あるのは一つ。俺だけだ、と。

だから信じる。

例えここに居る自分は滅び行く運命に在ろうとも、過去の自分は彼に会える。

只その事実さえあれば、十分だ。

もう一度彼の顔を覗き込む。

漸く彼も、今の状況を理解出来たらしい。

恥ずかしそうにそっぽを向いている。

けれど、逃げようとする事は無い。

「膝枕されるの……嫌？」

「ファック。べ、別に恥ずかしくなんてねェぞ？」

「ホント？」

顔赤いのに……

「そっ、それに、まだ寝てなきゃなんねーんだろ？」

「うん」

ホントはもう大丈夫なんだけどね。

「な、なら仕方ねェはな」

甘えたいな素直に甘えれば良いのに……

でも、その辺が可愛いんだよね。

おっと、そんなことを考えてると我が主に怒られちゃう。

ボクは第二位の妖精、デルフリム。またの名を妖精姫。貴方を愛する眠りの姫。

どうか私を、起こして下さいね？

『ファック。たりめェだ。』

なんて声が、聞こえた気がした。

第一話

ついに、グラスティア行きが明日へと迫った。

ストームは、久方ぶりに暴れられると上機嫌。

デルフリムは、もう別れの時が近いと悲しげ。

刹那は、時々ならば会えるとわかっているのだが、やはり寂しそう。

三者三様の反応をしている中、刹羅は――いや、ライアネルはと言うと、

「五十八、五十九、六十、六十一……」

いつも通り、筋トレをしていた。

本来なら、彼等のように感慨に耽っていても良さそうなものなのだが、彼は違った。

ただひたすらに己が肉体を鍛え、自分自身の魔力と氣に耐えられる

器を作るために専念している。

「八十二、八十三、八十四、八十五、八十六……」

『応っ、片腕懸垂たァせいが出るねぇ』

「話しかけンな。気が散る」

『……氣を使って肉体を強化してるのとかけてんのか？』

「かけて……ねェッ」

今のが最後の懸垂だったのだろう。ぶら下がっていた木から手を離し、そのまま地面に着地する。

「で？　何の用だ、駄剣？」

『開口一番に駄剣かよ。まぁ、いいけどな』

諦めたようにため息を吐くストーム。

「それは開口一番じゃねェだろ。最初に言ったのは、で？　だ」

『……まぁ、いい。それよりメシだぞ、メシ』

「ア？　もうそんな時間か？」

『草花見ろ、草花。頭上げてんだろ？』

「頭なんて付いてねェだろ」

『……お前ホント屁理屈やら揚げ足やら取るの好きだな』

「忘れたか？　俺の腹は黒いぜ？」

『知ってるよ。てめぇに白い腹なんぞ期待してねぇ』

「腹が白い訳ねェだろ」

『……もういい。何か疲れてきた』

本当に疲れた様な顔でそう言うと、踵を返し元来た道を歩いていくストーム。

ライアネルも、ニヤリと笑いストームの跡をついていく。

先程まで赤かった瞳は元の黒に戻り、僅かに疲れが溜まっている両腕や足をぷらぷらさせながら辺りの木々を眺めていく。

木々の間を飛び回る蛍のような小さな光を目で追い、小さく笑う。

この光の正体は妖精。まだ幼い、生まれて間も無い妖精達だ。と言っても生まれてから既に数日が経過しており、幼少期は過ぎている。

今は人間で言うところの小学校低学年くらい。好奇心旺盛で、毎日木々の間を飛び回っている。

「いいねェ、こう言うのは」

誰に聞かせるでも無く呟き、笑みを浮かべる。

と、そこに、一匹の勇気ある妖精がライアネルの方へと向かってき

た。

妖精は、ライアネルの周りを何度も回りを好奇の目で見ている。

ライアネルは何も言わずに立ち止まり、小さく笑いかけてみる。

すると、妖精は何度もライアネルの周りを回った後、恐る恐る肩に乗ってきた。

流石にこれには驚いたのか、一瞬目を見開いたがすぐに元に戻りそっと妖精の頭をぽふぽふと撫でてみる。

人にとっては普通の大きさでも、まだ幼い妖精にとっては巨人の手。体を強張らせ、キュッと目を閉じる。

ライアネルは出来るだけ優しく、壊れ物を扱うようにそっと一撫でした。

「すまんな、怖がらせて」

自分でも驚くほど優しい声が出たことに少し驚きながらも、笑いかける。

妖精も、その優しい声に釣られたのか、そっと目を開き、窺うような視線を向けてくる。

ライアネルは、怖がらせないように下から掌を見せ、妖精が触れる距離で手を止める。

妖精はその手をジッと見つめた後、ちょんっ、ちょんっ、と指をつつき、恐る恐る触ってみる。

その仕草が妙に愛らしく、思わず笑みがこぼれた。

と、それに気付いたのか、今度は弛んだ頬をペタペタと触る。

どうやら、もう警戒心は無いようだ。

小さな手に触られる感触はとてもくすぐったくもあり、どこか心が和らいだ。

「俺はデルフリムのとこに行くンだが、お前も来るか？」

その問いに妖精は首を傾げた後、肩から離れ辺りを浮遊する。

「わかんねェか。じゃあ、ついて来たけりゃついて来い」

そう言って歩き出すライアネル。

妖精は暫く右往左往した後、意を決したように頷き、ライアネルの跡をついて行った。

「よっ、と。ただいま」

入り口である穴から滑り降りてきたライアネルは、着地と同時に二人に帰宅を告げる。

「あ、やっと来た。せっちゃん遅〜い」

「父様、お帰りなさいです」

先に待っていた二人、デルフリムと刹那は、ライアネルが入ってくるとすぐにそう言ってライアネルを出迎える。

ライアネルはテーブルまで移動すると、刹那の頭を撫で隣に座った。

「ア？　ストームは？」

「あれ？　一緒じゃないの？」

「確か、父様を迎えに行ったはずですが……」

二人は首を傾げ、ライアネルの方を見る。

「ああ、アイツはちゃんと俺ンとこに来たよ。けどな、途中コイツに会ってな。コイツの相手した後、前見たら居なくなってたんだよ。てっきり先に来てるもんだと思ってたんだが……」

そう言って肩に乗っている妖精を撫でる。

妖精はくすぐったそうに目を閉じ、撫でられるがままになっている。

「にゃ？　妖精？」

「ああ」

テーブルから身を乗り出し、妖精を見つめるデルフリム。

妖精はライアネル肩から飛び立ち、デルフリムの周りを何度も回る。

「……そっか」

妖精と何か話をしたのだろうか。デルフリムは頷き、少し寂しそうな顔をする。

けれど、それも一瞬の事であり、すぐにいつもの表情に戻った。

「ストさんが戻ってきたら食べよっか！」

「ああ。それでも構わねェけど、腹減ってんならお前らだけでも先食っててていいぞ？」

「ううん。ボクは大丈夫だから待ってるよ」

「せつも待ってま――」

くぅ～～～～。

部屋の中に、可愛らしい音が響く。

「うぅっ」

俯き顔を真っ赤にする刹那。

ライアネルとデルフリムは苦笑し、刹那に食事を進める。

しかし、刹那はストームを待つと言って聞かず、時折可愛らしい音をお腹から響かせながら座っている。

時折チラチラと料理を見るのはご愛嬌、と言ったところだ。

飛び回っていた妖精も、今はテーブルの上に座り興味深そうに料理を見ている。

「遅ェな、あのバカたれ」

手の中にある鉄の塊を様々な形に作り替えながら呟く。

その様子を不思議そうに眺めている妖精と、一喜一憂する妖精の様子を眺める刹那。

「そーだねー」

そんな二人を眺めるデルフリム。

ライアネルは鉄の塊を擬人化したストームに作り替え、頭を叩かれたような絵にする。

くぅ～～～～。

何度目かになる刹那の腹の虫。

その音が鳴る度、小さくなる刹那。

その様子に我慢出来なくなったライアネルは、箸を取って手を合わせる。

「俺はもう腹減って仕方ねェから先食うぞ？」

チラリとデルフリムに目配せをする。

その目配せの意味をすぐに理解したデルフリムは、同じ様に箸を手に取り、刹那にも渡す。

「え？」

「なっちゃんも食べよ？」

「で、でもまだ……」

「ストームのバーたれはいいンだよ。つか、アイツはメシ食わなくてもなんともねェ。剣だし」

「でもっ」

「俺がいいって言ってンだからいいんだよ。つかもう食う」

そう言ってライアネルは手を合わせた。

「いただきます」

言うや否や、ライアネルは好物の魚料理に手を出す。

「んんぅ～！」

頬を緩ませ、口一杯に魚を詰め込む。

まるで頬袋だ。

もっきゅ、もっきゅ、なんて音が聞こえてきそうな食べ方に、デルフリムや刹那だけでなく、妖精すらも笑っている。

「じゃあ、ボクも食べよっかな～」

デルフリムも箸を料理に伸ばす。

「ふもっ！」

その手を、頬袋状態のライアネルが叩く。

「痛っ」

叩かれた手を擦りながら、涙目でライアネルを見る。

「何するの、せっちゃん！」

「ちゃんといただきますを言え。糧となった命と、作り手に対する礼儀だ」

「あ、うん。そうだったね。ごめんなさい」

「俺に謝る必要は無い。言うなら糧となった命に言え。全ての命は命を食らって生き長らえてるんだからな」

「うっ、うんっ」

至って真剣な表情をしてそう言っているのだが、その顔を見たデルフリムは、必死になって笑いを堪えている。

「ん？　どうかしたのか？」

首を傾げる頬袋。

当の本人は全くその状態に気付いておらず、それも相まってか余計に笑いを誘った。

「ふっ、ふふっ」

刹那も笑いを必死になって堪えているのだが、我慢しきれず、少し漏れている。

妖精は隠すこと無く楽しそうに飛び回っている。

「？」

そんな三人の姿に疑問を抱きながら、もきゅもきゅと魚を頬張る童顔。

「ほら、お前等も食え。はよ食わねーと俺が魚全部食っちまうぞ？」

喋りながらも箸は止まらず、獲物を捕えている。

「そうだね。んじゃ、いっただっきまーす！」

「じゃ、じゃあ、せつも。いただきます」

ライアネルに倣い、二人も料理に手を伸ばした。

第二話

妖精も加えた四人が食事を終えて二時間が経った。

だが、未だにストームは帰ってこない。

しかし、これはよくある事なので、時折入り口を見る刹那を除き誰も気にしていない。

「そうそう。せっちゃん、仕上がりはどんな感じ?」

食器を洗いながら、隣でタオル片手に濡れた食器と格闘しているライアネルに問う。

「ア?　仕上がり?」

「うん。どれくらいの魔術を使えるようになったのかーとか、体の鍛え具合とか、どれくらいかなーって」

「そうだなァ、一言で言えばダメダメだ」

「そう？　ここに来たばっかりの時より大分鍛えられてると思うよ？　ほら、体も引き締まってきてるし、魔力も氣も総量は倍近くになってるし」

「だが、飽くまで引き締まっただけ、倍近くになっただけだ。二代目の肉体は果てし無く強靭だった。氣は何百倍もあった。三代目の肉体は強靭だった。魔力は何百倍もあった」

「でも、せっちゃんはせっちゃんだよ？」

「わーってるよ。けどなァ、満足出来ねェンだよ。今のままじゃアすぐに死ぬ。生き残るためにも、戦うためにも、もっと鍛えなくちゃならねェ」

「……うん」

いつの間にか止まっている手に目を落とし、少し複雑な表情をする。

そんなデルフリムの方を見ること無く頭に手を乗せ、ぽふぽふと叩く。

「なんで撫でるんじゃなくて叩くのかにゃ～」

「ファック。俺も知らねェ。多分、初代の癖なんだろ。他の代じゃア、特にそんなのはねェからな」

叩くのを止め撫でてみるのだが、どこかぎこちない。

「ふふっ」

「ア？　どうした？」

「ううん。なんでもないよー」

「？」

いきなり機嫌が良くなったデルフリムの様子に首を傾げる。

「わからなくてもいーんだよー♪」

鼻歌混じりに洗い物を再開する。

「はい、せっちゃん♪」

「あ、ああ」

どんどんと上機嫌になっていくデルフリムに戸惑いながらも、食器を受け取りタオルで拭く。

次々と渡されていく食器を受け取ることに専念していると、すぐ隣から硝子が割れるような音が響いた。

「いつっ」

「どうした!?　大丈夫か!?」

人差し指の先から流れる血を見て、すぐにその手を取る。

「だ、だいじょ――ひゃんっ！」

大丈夫だよ、と答える前にライアネルに指をくわえられ、小さな悲鳴を上げる。

そんな事など気にせず、ライアネルは傷口の血を吸出し、ぺろりと

舐めた。

「んぅっ。く、くすぐったいよぉ」

デルフリムの小さな抗議も無視し、傷口を凝視する。

「大丈夫そうだな」

「だ、だからそう言ってるじゃんかぁ」

その言葉を聞き、そうだったっけ？　とでも言い出しそうな表情で首を傾げる。

「まぁいい。ちょい動くなよ？」

「ふぇ？」

そう言うと、回路を起動させ、右手の人差し指と親指を立てて銃の形を作る。

「復元（バレット）―装填（セット）」

人差し指の先に魔力が集まり、魔術として形を得る前の状態で装填される。

それをデルフリムの指の小さな傷口に向けて照準を合わせ、引き金を引いた。

「解放（ショット）」

魔力が解き放たれ、傷口に当たる。

瞬間、魔術として形を成し、デルフリムの傷を塞いでいく。

否、塞いでいるのではない。復元させているのだ。時間を巻き戻し、復元すると言う、時間を制御する特異な魔術で。

「これでいいだろ」

ふぅ、と一息吐き、手を離す。

「すっご〜い！　ねねっ、いつそんなの使えるようになったの！？」

少し興奮気味に詰め寄ってくるデルフリム。

そんな彼女を押し返しながら一言、

「黙秘をさせてもらう」

とだけ言った。

「ぶー！　いーじゃん、ケチー」

「ケチで結構」

「むぅぅぅ！！」

頬を膨らませて不満を露にするデルフリム。

そんな子供っぽい彼女に一言、

「お前は立派なレディなんだろ？　そんな餓鬼みてェなツラすんな

よ」

「むっ、ボクは子供じゃないもん！」

そう言って更に頬を膨らませる姿に苦笑し、ライアネルは再び食器を拭き始めた。

第三話

それからまた時が経ち、草花が頭を垂れる時刻になった。

外は変わらず夕暮れだが、時刻は既に夜。

未だストームは帰ってこない。

夕食も終えたのだが、未だに、だ。

そんなストームを心配する者は、やはり刹那しか居らず、若干憐れだ。

そして、心配をしていない二人はと言うと。

「それでは！　第一回、断髪式を始めます！　ぱふぱふぱふ！」

「無駄にテンション高ェな」

散髪を始めようとしていた。

「へっへっへっ。お客さん、ご注文は？」

「なんだ？　その胡散臭い商人みてェな喋り方は？」

「む。しつれーな。これは歴とした――」

「はいはい。わーったからサッサと切ってくれ」

「むぅ」

つれない態度のライアネルに、若干不満そうに頬を膨らませるが、それもすぐに元に戻り鋏片手に訊いてくる。

「じゃあ、短く切っちゃっていいんだよね？」

「ああ、それで頼む。もう、バッサリと切ってくれ」

「はいはーい！」

ライアネルの言葉を聞き、嬉々として鋏を動かし始めた。

◆◆◆

無音の空間に、シャキン、シャキン、と鋏が髪を切る音が響く。

辺りには、長い黒髪が川のように延びている。

あとは髪の長さ等を合わせるだけとなった頃、唐突にデルフリムが口を開いた。

「ねぇ、せっちゃん」

「ア？　何だ？」

「せっちゃんは、これから先、ライアネル・クロムハーツとして生きていくの？　それとも、神裂刹羅として生きていくの？」

手を止めること無く、訊いてくる。

「そうだなァ、どっち俺だからどっちでもいいンだが、強いて言うならどっちもだな」

「どっちもって？」

「まんまの意味だ。どっちも俺で、どっちも“悪”の味方。違いがあるとすりゃア、口調と礼儀を弁えてるくれェだ」

「そっか。じゃあ、どっちを名乗るの？」

「そうだなァ、多分神裂刹羅だ」

「なんで？」

「ファック。ンなもん決まってンだろ。ライアネル・クロムハーツが生きるのは戦場だ。戦場以外で名乗る意味がねェ。それに、真に心許せる友以外に、魂に刻まれた名を許す気はねェ」

「そっか……」

「まぁ、なんだ。他に理由があるとすりゃア、その、刹那がくれた名だから、だな」

「ふふっ」

「な、なんだよ？」

「べっつに～」

おどけた様子のデルフリムを、強く睨み付ける。

（ホント、素直じゃないなぁ）

ほんのりと朱に染まった主を見て、彼女は小さく笑うのだった。

◆◆◆

一方、その頃のストームはと言うと。

『何処だここーーーーー！！』

未だ森の中を歩いていた。

しかも、歩いている場所はライアネルと会った場所から全くと言っ

てもいいほど動いていない。

『ここは来た覚えがあるな、うん。確かにここには来た。んで、確かこっちに行けば行けた筈……』

そう言いながら進んでいくのだが、しばらく歩くとまた同じところに出る。

『……まさか、これが迷子ってやつか？』

自覚無き方向音痴は、漸く自分が只今絶賛迷子中だと言うことに気付いたようだ。

『ヘルプミー！』

叫びは虚しくただ響く。

『……ヘルプミー！』

もう一度叫ぶ。

しかし返ってくるのはエコーのみ。

『相棒！　相棒ーーー！！　オレを呼んでくれぇぇぇ！！　そしたら一発なんだからよーーー！！』

彼の叫びは、ただ虚しく森に響いた。

◆◆◆

「ん？」

仕上げも終わり、鏡で髪型を確認していたライアネルがふと眉を寄せる。

「どうかしたの、せっちゃん？」

「いや、なんか呼ばれたような気がしたンだが……気のせいか」

「ふぅん？」

一人納得するライアネルに首を傾げ、頭の上に疑問符を浮かべるデ

ルフリム。

「まぁ、いいのかな？」

「ああ。いいンじゃねェか？」

「そっか」

いまいち納得出来ていないが、とりあえず頷いておくデルフリム。

「ねねっ、それより髪型どう？」

手に持った鏡をライアネルが見ている鏡に写るように動かし、後ろも見せる。

「いいンじゃねェか？　短すぎねェし」

「そうでしょそうでしょ！　流石リムちゃん！　良い仕事してるぅ！」

「はいはい」

上機嫌にじゃれつくデルフリムをあしらおうとするのだが、簡単に避けられスルスルと懐に入ってくる。

「誉めて誉めて～。リムちゃんは良い子良い子って～。そしてお嫁さんに欲しいって言って～」

スリスリとライアネルの胸に摺り寄る姿は、まるで子犬のような愛くるしさがある。

「嫁はいらねェ」

「えぇー、何で～？」

「いや、特に理由はねェ。まぁでも、強いて言うならよくわからねェからだな」

全く興味が無さそうなライアネルを見て、何故か気合いに満ちた表情をする刹那とデルフリム。

「よくわかんないなら、リムちゃんで試してみましょう！　手取り足取り教えて上げますよ～？」

「ファック。バカかテメェ。俺は興味ねェっつってンだよ」

「じゃあ、どうすれば興味を持つんですか？」

「さぁな」

「「むぅ」」

ライアネルの答えに、二人は揃って唸り声を上げる。

そんな二人の様子に疑問を抱くが、すぐに興味が失せたのか、ライアネルは立ち上がり外へと通じる穴に向かう。

「あれ？　せっちゃん何処行くの？　まだ話の途中だよ？」

「そうですよ、父様。まだ話の途中です」

「いや、俺はそう言うの興味ねェし。つか、別にどうでもいいし」

そう言うと、ライアネルは穴に足を掛ける。

「むぅ。折角せっちゃんに女の子の良さとか、女の子の素晴らしさを教えて上げようと思ったのに～」

「知らね、興味ねェ」

「大人の世界とか、夜の情事とかのエッチな――」

「オイ、デルフリム」

ライアネルが彼女の名を口にした瞬間、辺りの温度が急激に下がったかのような悪寒が全身を苛んだ。

「次ィ、それを言ってみろ」

肩越しに、絶対零度の殺意を放つ。

「――殺すぞ」

一瞬見えた瞳は、形容し難いモノであった――

◆◆◆

ライアネルが去った空間に、二人の少女が残った。

デルフリムは唇をキュッと強く結び俯いている。

膝の上に置かれた手は、白くなるまで強く握られ震えていた。

「……」

向かいに座る刹那は、ガタガタと震え、体を抱き締めている。

直接ではないにしろ、あの、何処までも冷たい殺気を浴び、恐怖で歯の根が合わなくなっている。

そしてその顔は青白く、涙を流していた。

「ボクがいけないんだ。今のは、全部ボクが悪い。そう、ボクがいけないんだ……」

今ここに居ないライアネルに謝罪をするかのように、沈痛な面持ちで何度もその言葉を繰り返す。

「申し訳御座いません。申し訳御座いません、我が主。貴方の、始まりの貴方の深い傷を抉ってしまいました……」

消え入りそうな声で、謝罪の言葉を絞り出す。

何度も、何度も、繰り返し、繰り返し。

彼女はただひたすらに言葉を紡ぎ、少女は遠退く意識に身を委ねた。

◆◆◆

木々が回りを囲む川の畔に、一つの人影があった。

人影は上着を脱ぎ、半身を川につける。

そこで漸く人影に光が辺り、その姿が露になった。

「……」

人影の正体はライアネル。

彼は空を見上げ、この世界には存在しない月を想う。

「……なんで、あんなにも激しい憎悪が全身を駆け巡ったンだ？」

問い掛けるのは、自身であって、自分ではない。

故に、答えが返ってくるはずも無く、空っぽの裡にただ響くだけ。

まるで、全ての光を失ったかのような、深く暗い闇を湛えた瞳。

全ての清濁を知り、うちひしがれているかのような佇まい。

夜明けを知らぬ童子のように、空を見上げて日を願う。

「あとで、謝っとくか……」

風に流されてしまうほど、小さく弱い声。

空を見上げて呟くと、彼は静かに息を吐く。

「――――」

何かを呟き、ゆっくりと川に全身を浸けた。

†　†　†　†　†

「ラキフェスッ！！」

腕の中で弱々しく咳き込む唯一の友の名を呼ぶ。

「ハハ、そんなに近くで怒鳴らなくても……聞こえてる、よ」

見慣れた笑みを浮かべ、彼は小さく呟く。

「待ってろッ、今すぐ傷を塞いでやるッ！！」

脇腹を押さえつけ、必死になって溢れ出す血を止めようとする。

しかし、傷だらけ体からは止まることを知らずに血が溢れ出す。

両手は彼の血で汚れ、衣服は既に彼の傷を塞ぐことに使い果たし、もう傷を塞ぐものは無い。

「ハハ、いくら君でも……それは無理……じゃないかな?」

いつもと変わらぬ、何処か抜けた笑みで、彼はもう諦めろと告げてくる。

けど、諦められる訳がない。

この魂に刻みし無二の友。

コイツを救えなくて何になるっ!

赤く染まったズボンを脱ぎ、裏返して脇腹に巻き付ける。

「待ってろ、今医者ンとこに連れてってやるっ!」

「僕はもう……無理だ。せめて……君だけでも、逃げてくれっ」

「ファック。やなこった！」

自分よりも背の高い彼を背負うのは一苦労だが、それで助けられるのなら何でもない。

出来るだけ揺らさないように気を付け、走り出す。

「やめ……るんだっ。君も、酷い怪我をしてるん、だか……ら、そんなことを……すれば、死んで……しまう！」

「ファックッ！！　怪我なんてしてねェッ！！」

隠しきれない胸の傷と、そこを走る激痛を無視するために、敢えて大きな声を出す。

「つかよォ、お前には待ってくれてる奴が居ンだから、もっとしっかり気ィ張れッ！！」

彼と共に己も鼓舞するために、気合いを込めて叫ぶ。

「そう……だね。ハハ、彼女が……待ってくれてるんだ。しっかり……しない、と……」

急に静かになったことを不振に思い、彼の名を呼んでみる。

「ラキフェス？　オイ、ラキフェス！　ラキフェスッ！！」

段々と重くなってくるラキフェスに、危機感を感じて何度も呼び掛ける。

だが、返事はない。

「寝ンな、バカたれ！！　寝たら死ぬぞッ！！」

ぐったりと、力無くもたれ掛かってくるラキフェスを揺すりながら走り続ける。

「オイッ、起きろ優男ッ！！」

山のように、海のように、広く高く積まれた死体を越えが、陣地を目指す。

今の自身に持てる最高の速度で疾駆する中、足下に転がっていた腕に気付けず、それを踏んでしまい大きくバランスを崩してしまった。

「うをっ！？」

ラキフェスの体がズレ、背中から滑り落ちた。

「ぐっ。すまねェ、ラキ――」

詫びを入れようと彼の体を起こすと、そこには生気の無いラキフェスが居た。

「ラキフェス？　ラキフェスッ！！」

ピクリとも動かず、呼吸も、脈も無い。

「――――ッ、ラキフェェェェス！！！！」

物言わぬ友が、腕の中に居た。

†　†　†　†　†

ゆっくりと、目を開く。

「チッ、嫌なことを思い出しちまったな」

時折、再生される過去の記憶。

記録と化したはずの記憶が、一時的とは言え、形を得て甦る。

それは大概、気絶をしている時に起こる。

だが、今回は違う。

今回は、瞑想中にいきなり意識が切り替わり、過去の記憶が再生されたのだ。

しかも、あまり思い出したくない記憶。

魂に刻みし無二の友の死の記憶。

あれ以来、飲めなかった酒が飲めるようになった。

あれ以来、吸えなかった煙草が吸えるようになった。

あれ以来、人とまともな付き合いを持たなくなった。

……いや、それは元々だったな。

あの二年後に、アイツとの約束を果たし、俺は肉体的な死を迎えた。

後悔はない。

だが、本当に悔いは無いのかと問われれば嘘になる。

どうしても、悔いは残るものだ。

あの時、アイツを連れていかなければ、と。

あの時、もっと多くの手勢を連れていけば、と。

あの時、もっと俺が強ければ、と。

そうすれば、アイツの涙を見ずにすんだろうに、と。

今更考えても仕方ないが、どうしても考えてしまう。

ＩＦの可能性を……

「あー、やっぱ俺は弱いなぁ」

胡座を解いて、立ち上がる。

「もう考えンのはヤメだ」

敢えて声に出し、無理矢理にでも切り替えろ、と脳に命令する。

「今日出発なンだ。そろそろ行かねェとな」

まだ重い体を引き摺らぬよう一度頭を振り、気合いを入れる。

「よしっ、行くか！」

先程まで眼前にあった川に背を向け、元来た道をしっかりと見据える。

「来いッ、ストームッ！！」

左手を地面と水平に伸ばし、相棒の名を呼ぶ。

瞬間、鋭い風切り音と共に漆黒の大刀が回転しながら飛んできた。

それをしっかりと受け止め、一度振るう。

『呼んだか、相棒？』

「ああ。呼んだぜ、相棒？」

それで全てが通じ合うのか、二人はそれ以上は何も言わず、ゆっく

りと歩み出した。

第四話

二人はデルフリムの家である巨大な樹ではなく、そこから少し離れた場所にある開けた場所に向かっていた。

と言っても、ストームは大刀の状態でライアネルの手の中にある為、歩いているのは実質ライアネルだけだ。

『……そろそろだな』

「ああ……」

二人が目指す場所には、グラスティアに向かうための陣がある。

そして、その場所にあの二人も居る。

ライアネルは何処か確信めいた予感と共に、歩を進めていく。

それから五分と経たず、広場に出た。

「「……」」

そこには、ライアネルの予想通り刹那とデルフリムの二人が居た。

「待たせたな」

ライアネルは、まるで何事もなかったかのような態度で二人に挨拶をする。

しかし、二人から返ってくるものはなく、何か言いたげな表情のみが、そこにはあった。

「せっちゃん……」

「父様……」

俯いていた顔をバッと勢い良く上げ、二人は同時に口を開いた。

「「昨日はごめ――」」

「アー、昨日のはすまねェな。いきなり怒鳴っちまって」

「「――え！？」」

少し申し訳なさそうに頭を下げるライアネル。

彼はあまり謝ると言うことをしたことが無いのだろう。

謝る仕草が、どうもぎこちない。

だが、それは仕方の無いことなのだろう。

何故なら、彼はその魂に刻んできた年月の中で、まともな扱いをされたことが殆ど無かったのだから。

「な、なんで？」

「ア？」

デルフリムにはわからなかった。

何故、自分が謝られているのか。

彼女には、理解が出来なかった。

「なんで、せっちゃんが謝るの？」

「ア？　なんでって、そりゃア――」

こめかみに中指を押し当て、悩むような仕草をした後、

「――俺自身が、怒った（イカッタ）理由が全くわかんねェからだ」

その答えが意外だったのか、二人はポカンと口を開いている。

「「……」」

「ア？　どうした？　二人揃って間抜けヅラ晒して」

「いや～、何て言えばいいのかにゃ。てっきり“あの事”を覚えてて怒ってるって思ってたから……」

「ア？　“あの事”？」

その“あの事”とやらが何なのかさっぱりわからないライアネルは、眉を寄せて聞き返す。

「う、ううん！　覚えてないなら覚えてないで良いんだよ！？」

「ハァ？」

眉間の皺を更に深め、挙動不審なデルフリムを見やるが、誤魔化すように笑うだけなので仕方無く視線を切った。

「刹那も、すまなかったな」

「せ、せつは大丈夫です！」

なんともなかったことをアピールするように、刹那は両手を広げ、ブンブンと勢い良く振る。

その姿を見て、何処か無理をしているように感じたが、必死になってなんともないことをアピールしている姿に、

俺に不安を感じさせない為に、頑張ってンだな。

と思ったライアネルは、そっか、とだけ答えた。

「ンじゃア、この話はこれで終わりだな」

「うん！」

「はい！」

元気の良い二人の返事を聞き、満足そうに頷くライアネル。

「さて、話は変わるンだが、予定通り今日、俺はグラスティアに向かう」

「うん」

その言葉を聞き、デルフリムは少し寂しそうに頷く。

「もうすぐにでも俺は出るつもりだ」

「はい……です……」

刹那も、寂しそうな顔をする。

「はぁ。お前等、なんつーツラしてンだ。こう言う時は、笑って送り出すモンだろ？　つか、すぐにでもつっても物を受け取ってからだけどな」

そう言うと、デルフリムの方に向けて手を差し出す。

「まぁ、お前のことだ。もう物は全部持って来てンだろ？」

「にゃはははは。わかる？」

「たりめェだ」

ニッと笑い、ライアネルはストームを逆手に持ち直す。

「ついでにコイツの鞘も有ると助かるンだが」

「鞘はせつが持ってます！」

そう言っていそいそと鞘を取り出す刹那。

「……どっから取り出したのか、とか。どうやって仕舞ってたのか、とかは訊かねェ方が良いよな……」

鞘を取り出す刹那を見て、ライアネルは少し引き吊った表情をする。

「？　どうかしましたか、父様？」

「いや、何でもねェ……」

「？　そうですか？」

可愛らしく首を傾げる刹那を見て、

服を捲って腹の辺りから物を引っ張り出すっつーのは、流石にどうかと思うぞ？

と思うライアネルであった。

「まぁ、取り出し方はともかく、ありがとな」

礼と共に、ストームの鞘を受け取る。

「んじゃあ、次はボクからだね！」

「からだねって、お前は俺の荷物を渡すだけだろ？」

呆れたような表情でため息を吐く。

「むぅ。なっちゃんもおんなじようなことしてるに、この扱いの違いは何？」

「日頃の行いの差だろ」

「それだったら、寧ろリムちゃんにチューくらいあってもーー」

「ア？」

「――抱っこでいいよ？」

「……」

「リム姉様……」

「え？　にゃ、にゃに？　この空気……」

二人から送られる憐れみの込められた視線に、思わずたじろぐデルフリム。

「……まぁ、いいか……」

「え？　チューしてく――」

「ア　ゞ？」

「――抱っこ？」

「ア　ゞ？」

「……抱っこ？」

なんとしても抱っこを獲得したいのか、粘るデルフリム。

「ア゛ア゛？」

それに対して、ライアネルは睨みで応戦する。

「抱っ……こ……？」

粘る幼女。

「ア゛ア゛？」

睨む童顔。

何度かそんなやり取りをした後、この方法では戦局に変化は無いと判断したのか、デルフリムは戦法を変えてきた。

「ぎゅっ？」

その名も、擬音作戦だ。

「ぎゅっ？」

しかし、その作戦は全く意味が無いようだ。

ライアネルが、言っている意味がわからない、とでも言いたげに眉を寄せているからだ。

「ギュッ！」

しかし、そんなことでめげるデルフリムではない。

先程より語調を強める。

「ギュッ？」

だが、何を勘違いしているのか、ライアネルは何かを握り潰すようなジェスチャーをする。

「ギュ～～～～ッ！」

それは違うと首を横に振り、再び擬音を口にする。

「ギュ～～～～ッ？」

今度は首を締め上げるようなジェスチャーをする。

それも違うと首を振り、デルフリムは何かを抱き締めるようなジェスチャーをした。

「ギューーーーッ！」

それを見たライアネルは、漸く得心いったと言うようにポンッと手を叩き、完全に的外れな答えを口にした。

「ああ！　さば折りか！」

「違うよ！？」

「流石にそれは違うと思いますよ！？」

二人に強く否定され、ライアネルは眉間に皺を寄せる。

「ンじゃア、何だよ？　さっきの擬音っぽいのから抱っこじゃねェことはわかったンだが、それ以上はわかんねェンだよ」

お手上げだとでも言うかのように、ライアネルは手を上げ降参の意を示す。

そんな姿を見て、二人はまるで信じられないものでも見ているかのような表情をした。

「本当に……わかんないの？」
「本当に……わからないんですか？」

若干の憐れみが込められた視線に晒されたが、それすらも意味がわからんとでも言いたげな表情をするライアネル。

「まぁ、わからんモンはわからんでいいか。いずれわかることだろうし」

そう言ってライアネルは話を切り、話を初めに戻した。

「で？　俺の荷物は？」

「ギュッ！　の話は？」

「で？　俺の荷物は？」

「だからぁ、ギュッ！　の話は？」

「で？　俺の荷物は？」

「あの～、ギュッ！　のはｎ「で？　俺の荷物は？」……」

無言の圧力ならぬ、有言の圧力に屈するしかなくなったデルフリムは、最後の抵抗にと涙目で上目遣いをする。

何処か保護欲を掻き立てる姿なのだが――

「で？　俺の荷物は？」

――無情にも、その一言にバッサリと切り捨てられてしまった。

「うぅっ。せっちゃんがいじめるぅ～」

刹那ではなく、何故かライアネルに泣き付くデルフリム。

だが、ライアネルはデルフリムの頭に手を置き前に進めないようにする。

「せっちゃぁぁぁん！」

両手を必死になって伸ばすが、如何せん、お子様と少年ではリーチが違いすぎる。

例え、ライアネルが小柄な方だと言っても、流石にお子様と変わらぬほどのチビではないのだ。

「で？　俺の荷物は？」

必死に腕を伸ばしてくるデルフリムに対して、ライアネルは無情とも言える態度で問い掛ける。

「ギュッ！　ってしてくれたら――ううん。ギュッ！　ってさせてくれたらすぐに出すよ？」

腕を伸ばしたままの状態で、デルフリムは条件を提示する。

それに対してライアネルは、中指と親指で輪を作り力を溜めると言う返事を返した。

その構えは、所謂デコピンと言うものだ。

「せ、せっちゃん？」

ギリギリと力が溜められていく光景に、僅かに後ずさるがすぐにそれに気付き、慌てて元の位置に戻ろうとしたが、

「せいっ」

「あたっ！？」

その時にはすでに、デコピンを放たれた後であった。

それからも三十分ほど似たようなやり取りが続いたが、ライアネルに強化を施したデコピンを何発も入れられ、ヒリヒリと痛む額を押さえながら渋々退いたデルフリム。

その額の一点だけが赤くなっていたのはご愛嬌、と言ったところであろうか。

「ほぅ……これが俺の荷物か……」

デルフリムから渡されたのは、黒い革製のウェストポーチ。

特に大きな物ではなく、動きを阻害しない程度の物だ。

「それはねー、ただのポーチじゃないんだよ？」

えっへん、と威張るように胸を張るデルフリム。

その様子に少し呆れながらも促すと、勿体振るように少し長めの間を置いてから口を開いた。

「それはね！　なんと、異空間に繋がってるんだよ！？」

「異空間？」

いきなり異空間などと言われ、何を言ってるんだコイツ。みたいな表情になるライアネル。

「あー！　その顔は信じてないなー！」

その表情が不満なのか、デルフリムは頬を膨らませる。

「何の説明も無しにンな事言われたら誰だってそうなるだろ」

「うぐっ！」

「それとも何か？　お前の言うことは無条件で全て信じろってか？　ファック。それこそ無理な話だ」

「うぅっ」

簡単に言い負かされたデルフリムは、しょんぼりと項垂れる。

「まぁ、でも。説明次第では信じてやンよ」

「ホント!?」

バッと勢い良く顔を上げる。

まるで先程までの落ち込みようが嘘のようだ。

「ああ。俺に二言はねェ」

ニヤリと笑い、ライアネルはデルフリムの頭をぽんぽんと撫でる。

「うん!」

デルフリムは元気良く頷き、早速説明を始めた。

「あのね、そのポーチはね、悪喰(アクジキ)って言ってね、何でも呑み込むの！　でね、悪喰の中はね、特殊な空間になっててね、無限って程じゃないけどね、それに近い許容量があるの！」

身振り手振りで一生懸命説明をするデルフリム。

一生懸命なのはわかるのだが、微妙に解り難い。

「アー……つまり、だ。このポーチの名は悪喰。コイツの腹ン中は特殊な異空間が形成されてて、それン中には大概の物が入る、と」

「まぁ、そんなところです」

ライアネルの確認に、刹那が答える。

「そっか」

「はい」

短いやり取りをした後、ライアネルはポーチを開けてみる。

「あ、気を付けて下さいです父様」

「ア？」

口の開いたポーチ片手に、眉を寄せる。

「どうした？」

今まさにポーチに手を突っ込もうとしていたライアネルは、その状態で止まったまま刹那の方に目を向ける。

「そのポーチ、悪喰は、人も呑みます。一度呑まれると出れませんですから、手を入れる時は気を付けて下さいね？」

「……対処法はあンだろ？」

「「勿論です（だよ！）」」

二人の返事を聞き、ライアネルはその対処法を聞き始めた。

「対処法はとても簡単です。魔力、若しくは氣を練るだけです」

「……それだけか？」

「それだけだよー。悪喰は、魔力と氣を食べれないからねー」

「つまりなんだ。喰えんモンは喰わんってだけか」

「はいです」

正直な所、納得をしてもいいものなのか果てしなく疑問な所だが、とりあえず頷いておくライアネル。

「あ、因みに、もし食べられても内側から魔力か氣をたっくさん練れば吐き出してくれるよ」

「そうか」

……なんかさっき聞いたことと違うような……まぁ、いいか。

「あ、そうそう。ポーチの中の物を取り出すのは簡単だからね」

「……どう簡単かは言わねェンだな」

「それはお楽しみだよ～」

何がお楽しみなんだか……

そんなことを思いながら、ライアネルは悪喰を腰に巻く。

「……なんで逆？」

「ア？」

腰に巻かれた悪喰を見て、デルフリムは首を傾げる。

「いや、だから。なんでポーチの口が前じゃなくて後ろなの？　普通前じゃないの？」

「ンなこたァ、知らねェよ。俺はこっちのが楽だからしてンだよ」

ライアネルは、この状態が俺にとっては正しいんだ、とでも言うかのように後ろに回した悪喰をポンポンと叩く。

「まぁ、それはどうでもいいとして。衣服の類いやら何やらは全部悪喰ン中に入ってンだな？」

「はいです」

刹那の答えに頷き、ライアネルは次の問いを口にした。

「で、隠れ蓑と聖骸布からなる霊装の方はどうなった？」

「むふふふふ。勿論あるよ～」

不気味な笑い声を出しながら、デルフリムは自信満々に答えた。

「リム姉様とせつの二人で創ったんですよ？　ちゃんと父様の趣味に合わせて」

刹那もその出来に自信があるのか、誇らしげに胸を張る。

「ほぅ、俺の趣味に合わせて、か」

ライアネルもその出来が気になるのか、不適な笑みを浮かべる。

「ンじゃア、早速見せてくれ」

「はいはーい！」
「はいです！」

二人の元気の良い返事が辺りに響き、二人はいそいそと霊装を取り出した。

……だから何で服捲って腹から出てくンだよ!?　つか、明らかに質量がおかしいッ。出て来たモンと全くもって釣り合わねェッ!!

「？　どうかしましたか、父様？」

「い、いや、何でもねェ……」

「？　そうですか」

可愛らしく首を傾げる刹那を見て、何も言えなくなってしまった。

ポンポン

「ア？」

「気にしたら……負けだよ？」

「……ああ」

「？」

二人のやり取りの意味がわからない刹那は、ただ首を傾げていた。

第五話

それから程無くして復活したライアネルは、二人から手渡された霊装を眺めていた。

緋と黒に彩られたシンプルな外套。

ロングコートなのだが飾り気が無く、ポケットも無い。

表側が緋、裏側が黒の単純な配色。

長さもライアネルの身長に合わせられている。

「確かに、俺の趣味だな」

予想以上の出来なのか、少々驚いた様子だ。

「でしょでしょ～！」

「頑張りました」

ライアネルの反応が嬉しかった二人は、嬉しそうな笑みを浮かべ、少し誇らしげだ。

「そういやァ、これの能力はどうなってンだ?」

ライアネルは、解析魔術の行使を敢えてせず、二人の口から聞くことにした。

「これはですね、隠れ蓑の迷彩能力を失う代わりに聖骸布の能力を得たモノです」

ライアネルに問い掛けられたことが嬉しかったのか、刹那は嬉々として答える。

「勿論それだけじゃないよ！　この霊装には幾つか姿があってね、今のところは二つの姿が顕現出来るの！」

「二つの姿?」

「はいです！」

刹那は上着の裾を捲り、小さなホワイトボードを取り出す。

……突っ込まん。突っ込まんぞ。

「一つ目の姿は今の姿です。こちらの能力はさっき説明した通りです。二つ目の姿は、焦げ茶色のロングコートで、フード付きです。姿形はフードが付いている以外は同じですが、能力は違いますです」

刹那はホワイトボードにもう一つの姿を書き、そこに注釈を書き入れる。

「こちらの能力は隠れ蓑と同じですが、そこに＋αとして魔力や氣の気配の断絶もありますです」

「そういやァ、隠れ蓑にはその能力は無かったな」

説明と共に書かれていく注釈を読みながら頷く。

「便利でしょ～、この能力！」

「ああ。確かに便利だ」

何と言っても、隠れ蓑と聖骸布、どちらの能力も使えるのだ。

これを便利と言わずに何と言うのだ。

「で、どうやって切り替えンだ？」

「それはですね、」

「魔力を流すか氣を流すかで切り替えられるよ！」

「……リム姉様……」

「えへっ」

茶目っ気たっぷりにそう言うと、デルフリムは刹那の肩を掴む。

「ほら、霊装の説明はそこまでにして、せっちゃんに渡したい物があるんでしょ？」

グイグイと刹那の背中を押す。

「そ、それはリム姉様も同じはずですっ」

頬を朱に染め、切羽詰まったような声でデルフリムに訴えかける。

「そーだよー。でも、なっちゃんが先。ボクは後でも良いの！」

そう言って更に刹那の背中を押す。

「と、父様……」

「ア？　どうした？」

早速霊装の切り替えを試していたライアネルは、霊装を片手に持ったまま顔を上げる。

「こ、これを父様に……」

モジモジしながらも、刹那はしっかりとその手にある物を渡す。

「これは……」

ライアネルはそれを受け取り、ジッと見つめる。

手渡された物は、銀の懐中時計。

蓋に一枚の葉のレリーフがある以外は何も無い、シンプルな物。

調べてみなければわからないほど、精巧な手作りの懐中時計。

開くと、中の歯車が見えるような構造になっており、カチッ、カチッ、と規則的な動きと音が聞こえてくる。

「これを俺にくれんのか？」

「はいです……」

恥ずかしそうに俯き、キュッと手を握る。

「そうか。……まぁ、そのー、……なんだ。あ、ありがとな」

「はい！」

ライアネルの言葉に喜色満面の刹那。

ほんのりと顔の赤いライアネルを見て、ニヤニヤしながらデルフリムは言葉を発する。

「そんなに嬉しいならもっと素直にうれしーって言えばいいのに～」

「ファ、ファック！　勘違いすんなよッ！　俺はただ礼儀として礼を言っただけだッ！！」

「そっかー。そーだよねー。うれしーよねー。そう言うの好きだもんねー」

「うっ、うるせェッ。だから別に喜んでねェつってんだろーがッ！」

ギャアギャアと喚くライアネルを他所に、ニヤニヤと笑みを浮かべ、デルフリムは何度も同じ様なことを言う。

その度にライアネルが喚き、反論する。

そんなやり取りが、刹那が止めに入るまで続いていた。

「さてさて、次はボクの番だね！」

デルフリムは嬉々としてライアネルの前に立つ。

「まずはボクからのプレゼントだよ！」

その言い回しに疑問を抱きながらも、すぐにわかる事だろうと思い、特に問う事無くデルフリムの動きを待つことにした。

何処から取り出したのだろうか。デルフリムは短刀を手に持ち、見せびらかせるようにライアネルの前で揺らす。

「これはねー、露斬（ツユギリ）って言うんだー」

全てが漆塗りの短刀。

鞘から抜くと、鮮やかな刃文と白銀の刃が顔を見せる。

その刀身を見ていると、本当に露を斬ってしまえるのではないかと錯覚してしまう。

「これは――良い短刀だ」

刃の上に指を滑らせ、その感触を味わう。

「でしょー！」

ライアネルの言葉を聞き、嬉しそうな表情を浮かべる。

「まぁ、使えそうだし。貰っといてやるよ」

「おうっ！　貰っといてやってくれぃ！」

「ふふっ」

二人のやり取りに、刹那は自然と笑みが零れる。

「さてさてーっ。次は二代目ライアネル・クロムハーツの恩人の孫

にして、短い間だけでしたが相棒だった女性、トリニスタ・イル・ローゼンバークからの贈り物ですっ！」

「……は？」

トリニスタ・イル・ローゼンバーク。その名を耳にした時のライアネル表情は、とても言い表し難いものであった。

トリニスタ・イル・ローゼンバーク。
性別・女。
享年・二十二歳。
主兵装・大弓。
副兵装・双短剣。
霊装・フェイルノート。
霊装・アイギス。

彼女の名から、容姿や性格以外の情報が流れ込んでくる。

いや、容姿や性格はすでに知っているのだから今更記録を確認するまでもないだけだ。

「トリニスタ・イル・ローゼンバーク……さん？」

その女性の名に聞き覚えの無い刹那は、小さく首を傾げる。

「うん。トリニスタ・イル・ローゼンバーク。二代目せっちゃんの相棒！　だ・け・ど！　その二人の本当の関係は！　相棒以上恋人以上夫婦未満の――」

そこでピタリと、デルフリムの言葉が止まった。

首筋と耳の付け根に、冷たい感触を感じたからだ。

「ファック。何訳わかンねェ情報垂れ流してンだ？」

握り締められたストームと露斬。

それらが首筋と耳の付け根に触れており、それ以上何か喋れば削ぎ落とす、とその瞳が雄弁に物語っていた。

「にゃ、にゃはは……」

若干頬をひきつらせながら笑うデルフリム。

「つかよォ。それ、トリスから聞いた妄言だろ？」

「にゃははは……」

情けなく笑うデルフリムを見て確信したライアネルは、ストームと露斬を鞘に納め、右手を目の半分を覆うような位置に置き、左目を閉じて親指をこめかみに当て、人差し指で眉間を掻く。

呆れた時に出る彼の癖である。

「あのアマ、何考えてやがる……」

「アマとか言わないの！」

「へー、へー」

「そーゆー場合は、はい、だよ！　へいでも、へーいでも無いからね！」

「へ～い」

「……せっちゃん？　それ、わざと？」

「さァな。俺の性格から考えてみりゃア、わかンじゃねェか？」

「むぅ」

デルフリムの中ですぐに『わざと』、と言う答えが出てくる。

そんな自分に苦笑し、デルフリムはトリニスタから預かっている物を取り出す。

「まぁ、今回は見逃してあげよーかなぁ。「いや、別に見逃さなくてもいいし」さてさて、話を戻しましょう！　「強引だな」……トリニスタから預かったのはこれです！　「無視か」……これです！」

そう言ってデルフリムが取り出した物は、妖精の羽をイメージしたような幻想的なフォルムの大弓と、しっとりとした質感の霞みのように薄い銀色の胸当て。

フェイルノートとアイギス。

ライアネル・クロムハーツが、トリニスタ・イル・ローゼンバーク

に渡した、二つの霊装だ。

「……アイツが、これを……？」

受け取ったフェイルノートとアイギスを、感慨深そうに見つめる。

「……うん」

その表情を見て、デルフリムは小さく微笑む。

ライアネルはフェイルノートを左手に持ち、聖骸布を緩める。

「有り難く返して貰うぞ、トリス」

呟き、頭上に掲げた。

「我が声に答えよ、妖精の大弓よ！」

声が響き、それに共鳴するかのように大弓が震える。

瞬間、淡い光を放ち、光となって左手の甲と武装刻印が刻まれている左腕に纏わり付き、幻想的なフォルムの刻印と化す。

手の甲から肘にかけて刻まれた刻印。

その姿を確認したライアネルは、満足げに笑みを浮かべ、聖骸布を巻き直す。

締め付け具合を確認し、右手に持っているアイギスを眺める。

「……相変わらずアイギスは俺を嫌ってるみてェだな」

自分がアイギスに拒否されていることを感じられることに苦笑し、ライアネルはアイギスを悪喰に仕舞おうと近付けてみる。

「……スゲェなコイツ。口の大きさ広がったぞ」

悪喰の口の大きさは普通のポーチと何ら変わらぬ大きさだったのだが、アイギスを入れようと近付けた瞬間、まるで大口を開けたかのように開いたのである。

そしてそれを綺麗に飲み込み、跡形もなく食らってしまった。

「……」

マジで食ったってしか表現出来ねェな。

アイギスを丸飲みした悪喰に、目を点にするライアネル。

「あ、そうそう」

そんな姿を見たデルフリムは、何かを思い出したらしく、ポンッと手を叩く。

「悪喰の中はものすっごく時間の流れが遅いから、食べ物とかも保存出来るよ」

「また便利だな、コイツ」

悪喰をポンポンと叩き、ライアネルは二人に向き直る。

「さて、そろそろ行くぜ？　俺は」

ストームを肩に担ぎ、ニヤリと口端を吊り上げる。

「うん。いってらっしゃい」

「行ってらっしゃいです、父様」

デルフリムは何処か哀愁を漂わせた表情で、刹那は少し寂しげな表情で、しっかりと答える。

そんな二人に不適な笑みを称えたまま近付き、頭をポンポンと叩く。

「ファック。何湿気たツラしてンだよ。永遠の別れじゃねェンだ、もちっと笑え」

ニッと笑い安心させようとするが、上手くいかず、少しひきつったような表情になってしまった。

そんな表情を見た二人は、クスクスと小さく笑う。

「アー……、やっぱ笑おうとすンのは難しいな」

笑顔は作るものでも出すものでもなく、自然と出るもの。

これが彼の持論である。

そして、それは彼自身が体現していると言っても良い。

と言うよりも、彼自身が笑顔を出せと言われても出来ないだけなのでもあるが……。

「んまぁ、とにかく、だ。笑え！　笑って見送れ！　湿気たツラすンな！　それじゃア俺がつまんねェ。だから、俺の為に笑え！」

そんな顔で別れたら心配だろうが。

そんな思いがライアネルの中にはあったが、そんなことは微塵も感じさせないように振る舞う。

「うん！」

「はい！」

そんなライアネルに元気付けられたのか、それとも必死になって笑

顔になろうとしたのか、二人はとびきりの笑顔をライアネルに向ける。

可愛らしい二人の少女から送られたとびきりの笑顔にライアネルはほんのりと頬を朱に染め、

「ファ、ファックっ。そうだ、それでいいンだよ。そうしてりゃア、いいんだ。うん」

「くすくす。なぁに？　心配だったの？」

「るっせェッ！！　勘違いすんなよ。湿気たツラで見送られると、俺の気が滅入るからだ」

「はいはい」

「テメェ、マジでわかってンのか？」

「うん、わかってるよ～」

くすくすと笑いながら答えるデルフリム。

このやり取りが楽しくて仕方がない、と言った様子だ。

（うん。大分、ライアネル・クロムハーツ様に戻ってきてるね。この、クールな感じのツンデレと、少し感情的なツンデレ。あとは、ファックと勘違いすんなよ以外の口癖が出てくればいいんだけど、流石に今はまだ口癖じゃないのかな～）

そんなことを思いながら、デルフリムは言葉をかける。

「それじゃあ、知らない世界で不安だろ――」

「いや、別に」

「……」

（……まさか「いや、別に」もこの頃からの口癖だとは思わなかったよ。もしかしたら他のそうなのかな？）

「アン？　どうした、デルフリム？」

ぼぅっとそんなことを考えていたデルフリムにとって、不意打ち気

味に来たライアネルの声。

その声に驚きながらも、何とか答えた。

「う、ううんっ。なんでもないよ！」

「？　そうか？」

「うんっ」

デルフリムの反応にライアネルは眉を寄せるが、にこにこと笑っている姿を見ているとどうでも良くなってしまった。

「まぁ、いいか」

そう、小さく呟く。

「さて、今度こそ行って来るぜ！　刹那！　デルフリム！」

ストームを振り下ろし、ビシッと切っ先を二人に向けて宣言する。

「行ってらっしゃいませです、父様！」

「いってらっしゃい、せっちゃん！」

その宣言に、二人は笑みで答える。

ライアネルも、二人に不敵な笑みを返すと露斬を悪喰に仕舞い、二人に背を向け一歩踏み出す。

その先には、一つの大きな魔方陣が浮かんでいる。

ライアネルは迷わず魔方陣に足を踏み入れ、ストームを一振りする。

「行くぜ、ストームッ！！」

『オーケィ、ラァイルッ！！』

その叫びに呼応するかのように魔方陣が光を放ち、足下から頭上に向かって浮上していく。

「『いざ行かん、グラスティアへ！！』」

二人の声が重なると同時に一際強い光を放ち、魔方陣が弾け飛んだ。

「行ってらっしゃいませ、我が主」

弾けた光が段々と弱まり燐光が辺りに漂う中、小さな呟きが、ゆっくりと辺りに染み渡るように響いた。

第六話

神裂刹羅とも、ライアネル・クロムハーツとも名乗る少年は、霊装越しに感じる照り付けるような熱さと、体前面に感じる圧迫感。そして全身に感じられる浮遊感で目を覚ました。

いや、目を覚ましたという表現は少しおかしい。

正確には、目を開いた、だ。

「うをっ!?　なんだこれ!!」

光を得た視覚に写るのは、限りなく黒に近い灰色の塊。

左右を見渡しても一面同色。

背を向けている上のみが異なる色をしていたが、それもすぐに同色に変わり、背中に感じた熱も消えていった。

彼が現れたのは空中。しかも、雲の真上だ。

しかし、今はもう分厚い雲の中。

いきなり空中に放り出されたのでは、いくら彼でも驚いてしまう。

いや、彼でなくても驚いてしまうだろう。何の前触れもなく空中に放り出されては。

「ファック！　いきなり空中とかざけンな！！」

『そーいきり立つなよ。つか、刹那はこんなお茶目出来ねぇし、ミスもしねぇと思うぞ？』

「ファック！　ンなもん千も承知だッ！！」

『百な、百』

「恐らくジャミングか、何か大きな力が近くにあってポイントがズレたンだろ。或いは、俺が来たことによってチィとばかしこの世界に異変が起きたンだろ」

『無視かよ……。しかもなんか冷静だし……。まぁでも、それは――――その可能性は大だな』

呆れたような口調から、急に真剣な口調に変わる。

ライアネルはその変化に一瞬眉を潜めたが、すぐに表情が一変する。

『気付いたか、相棒？』

「ああ。気付いたぜ、相棒」

未だ分厚い雲の中に居る為、この下がどうなっているのか目視での確認は出来ないが、二人は確かに何かを感じ取っていた。

「下にうじゃうじゃ居やがる」

『ああ。最悪の気分だ。胸糞悪ぃ』

顔をしかめ、頭を下にすることによって降下するスピードを速める。

そこから更に瞳の色を赤く変色させ、全身に氣を纏う。

それによって空中での移動を可能にし、雲を突き抜けんと更に加速する。

『腐った血肉と』

「腐った魂の」

「『クソみてェな臭いだ』」

雲を突き抜けた先には、中空に浮かぶ大陸と夥しい数のグールが居た。

◆◆◆

「はっ、はっ、はっ、はっ、セェイッ！！」

赤髪の少女は、その手に握った刀を袈裟に振るう。

刀は、背後に迫っていた一匹のグールを切り裂き地に伏せる。

「姫ッ！！　早くお逃げ下さい！！」

赤髪の少女は、自分の背後に居る白髪の少女を守りながら刀を振るう。

「貴女を置いては行けないわ！　逃げるなら貴女も一緒にっ！」

白髪の少女は震える手でレイピアを握り締め、気丈にも迫り来るグールを睨み付けた。

「私は手負いです！　その様な者を連れていては逃げ切れません！　どうか早くお逃げ下さい！！」

赤髪の少女は、一匹、また一匹と迫り来るグールを一太刀の下に切り捨て、切り払う。

「嫌よ！！　せめて、せめて貴女だけでも生きて連れて帰るわ！！」

少女達の周りには、グールだけでなく、何人もの人の食い散らかされたような死体も転がっている。

死体は全て赤髪の少女と同じデザインの制服を身に付けており、所属部隊が同じであることを示していた。

「姫は次代を担う者！！　ここで果ててはなりませぬっ！！」

怒声を上げ、負傷した足を引きずりながらも刀を振るう。

生温い紫の体液を撒き散らしながら散っていくグールを一瞥することすらもなく、新たに迫るグールを斬る。

個の戦闘能力では赤髪の少女の方が上だが、圧倒的な数と頭が潰れない限り死ぬこと無い体を持つグール相手では流石に辛いようだ。

その証拠に、少女達はジリジリと後退を余儀無くされている。

少女達の相手が、もし知能の有るモノなら、彼女等は一瞬にして囲まれなぶり殺されて食われていただろう。

だが、相手は幸運にも食らうことしか頭に無いグール。

コイツらが相手ならば、何かしら逃げ様があるだろう。

だがしかし、一人は足を負傷した手負い。もう一人は、たしなみ程

度でしかない剣術と人並み以下の体力。

この状態では、一人を囮、ないし犠牲にしなければならない。

赤髪の少女はすでに国に、王に、姫に、命を捧げる覚悟が出来ているので囮になることもいとわないのだが、白髪の少女は違う。

大切な部下を、大切な友人を、大切な姉のような存在を、失いたくないのだ。

「姫ッ！！　聞き分けてください！！」

「聞き分けないッ！！　私も残るっ！！」

未だに震える手を無理矢理押さえつけるが、全く効果はなく、寧ろ震えは大きくなっていった。

「くっ」

震えながらも力強い声で答える白髪の少女の姿に、これ以上何を言っても意味を成さないと言うことがわかってしまった。

そして、そんな事がわかってしまう自分に苛立ちを感じてしまう。

赤髪の少女は小さく舌打ちをし、刀を握る手に力を込める。

己が主君を守るために。

「はあああああ！！！」

気合いと共に刀を振るい、同時に三匹のグールの頭を横凪ぎに斬りかかる。

腕に大きな負荷が掛かるが、それを無視して振り抜いた。

瞬間、頭を失った首から紫の血を吹き出す噴水が出現した。

頭を失った三匹のグールは、よたよたと数歩歩いてから力無く崩れ落ちる。

だが、グールはこの三匹だけでは無い。

まだ二十匹近くも少女達の周りに居り、その十数キロ先には千を越えるであろうグールの群れがある。

少女達に、逃げ場はなかった。

だがそれでも、少女達は諦めず眼前に迫り来るグールを睨み付ける。

「ハァッ！！」

赤髪の少女は凄まじい集中力の下、刀を振るい、一太刀毎に確実に命を絶つ。

白髪の少女も足元に向けてレイピアを振るい、何とか牽制をする。

だが、動きが一瞬だけ、しかも僅かにしか鈍らない。

その為、あまり牽制の意味が為されていなかった。

せめて、グールの足にレイピアを刺すことが出来れば違うのだろうが、白髪の少女にはそれをすることが無い。

何故なら少女は、人に刃を向けたことが無いから。

何故なら彼等は、元は愛すべき自国の民だから。

何故ならそれは、人を傷付ける覚悟が無いから。

だから少女は、中途半端なことしか出来なかった。

「きゃあっ！？」

「姫！？」

そしてそれ故に、背後から迫るグールに気付くことが出来なかったのだ。

「くっ、姫を離せぇッ！！」

赤髪の少女は、白髪の少女の首筋に牙を立てんとするグールに斬りかかろうとするが、周りのグールが行く手を阻むように襲い掛かって来て邪魔をしてくる。

「邪魔だッ！！」

身を大きく捻り、刀を一閃する。

一刀の下に五匹のグールの胴を凪ぎ、吹き飛ばす。

離れ離れになった上半身と下半身が、辺りに転がった。

「離してっ！　離してっ！！」

「姫を離せッ、下郎がッ！！」

赤髪の少女は、必死になって抵抗を続ける白髪の少女の下に一直線に駆ける。

一刻も早く救い出したいが、残った二匹のグールが邪魔をする。

少女は力任せに刀を振るい、二匹を吹き飛ばす。

「姫ぇぇぇ！！」

今正に食らい付かんとするグールから、大切な主を救い出さんと手を伸ばす。

「茜っ！！」

声に応えて白髪の少女も手を伸ばす――――が、

ガシッ！！

「なっ！？」

突如として赤髪の少女の動きが止まる。

《あ゛ー》

濁った声が、足下から響く。

上半身のみとなったグールが、赤髪の少女の足を掴んでいたのだ。

「このっ、邪魔だッ！！」

刀を振るい、手首を落とす。

それでも尚締め付けてくる手に、若干の恐怖を覚えるが、無理矢理その手を引き剥がし這い寄るグールの頭を刎ねる。

動かなくなった死体を、他のグールが貪り喰らう。

その光景から目を背け、少女は立ち上がって走り出す。

だが、直ぐ様また別の上半身のみのグールがしがみついてきた。

「邪魔だッ！！　邪魔だ邪魔だ邪魔だ邪魔だ邪魔だァ！！」

乱暴に刀を振り回し、次々と頭を刎ね飛ばす。

全てのグールを仕留めると、赤髪の少女は白髪の少女の方へと向き直る。

そこには、突き立てられた牙に、今にも皮膚を喰い破られんとする白髪の少女がいた。

「た、助けて……」

喰い殺される恐怖に、声は震え、雫が頬を伝う。

「姫ぇぇぇぇぇ！！！！！」

刀を投げ捨て、飛び出す。

グール共に離されたが、距離はそう無い。

だが、助けられない。

そう思わせてしまう、あまりにも絶妙で絶望的な距離。

しかし少女は諦めない。

大切な主を護るために、例え無理でも、例え不可能でも、例え０．０００００１％すらの可能性が無くても、

「彩歌様ぁぁぁぁぁ！！！！！」

手を、伸ばすっ！！

だが、無情にも、その手は、届かず、牙は、食い込み、その皮膚を、喰い破ら――――

「ファッキンッ！！」

《ぐぎゃっ！？》

――――れることは無かった。

空より舞い降りた、漆黒を担う緋によって。

少女は、少女達は、空より舞い降りた一人の少年に、救われたのだ。

◆　◆　◆

少年は相棒を構え、更に更に加速する。

「あの大群、全て狩れると思うか？」

不敵な笑みを浮かべ、相棒に問う。

『思うか出来るかじゃねぇ。やるかどうか、だろ？』

「ファック。わかってンじゃねェかよ」

『たりめーだ。このブラック・ストーム、何年テメェの相棒やってると思ってんだ？』

「千より先は覚えてねーよ」

二人は笑い合い、直ぐ様視線を眼下に向ける。

視界に広がるのは、夥しい数のグールとその先にある一つの街。

中々の大きさで、人口もかなりのものだろうと推測される。

自分達が降り立つ場所が徐々に鮮明になっていく中、ライアネルは

ある光景を目にした。

「オイ、ストーム。ありゃなんだ？」

『なんだって、何がだ？』

「彼処だ、彼処。ほら、街と大群の丁度中間地点。彼処でガキ二人がグール相手に得物振り回してっとこ」

指を差して位置を教える。

『あ？　見えねぇぞ、そんなもん』

「よく見てみろ。ちゃんと居っから」

『だから見えねぇっての！　つーか、お前の目が良すぎんだよ！』

「そうか？　パッと見た瞬間と、何と無くの勘でわかんねェか？」

『わかんねーよ！！　つか、お前霊感強ぇからそれもあんじゃねーのか！？』

「それは要素としてあるかもな。まぁ、見えねェなら仕方無ェな」

……“あれ”をやってみるか？　そうすりゃア見えるだろうし。……いや、止めとくか。まだ出来る気がしねェし。

そこで一端思考を切り、意識を戦闘に切り替える。

「ストーム。このまま落ちるとあのガキ共ンとこに落ちる。グール共と殺り合うにゃア、アイツ等邪魔だ。退けるぞ」

『了解！　それはそうと、名乗りを上げるか？　“悪”の味方只今参上！！　ってな具合に』

「上げねェよ。ったく。ガキかテメェは」

『ガキじゃねぇよ！　つか、助けたいなら素直に助けたいって言えば――』

「あん？」

『――……いや、何でもねぇ……（ツンデレめッ）』

「ちっ。まぁいい。行くぞストーム」

『オーケーだぜ、ライル』

空中で身を捻り、体勢を立て直す。

段々と近付いてくる大地。

より鮮明になるグールと二人の少女。

一人の少女はグールに捕らわれ、もう一人の少女は刀を投げ出し走り出す。

「た、助けて……」

「彩歌様ぁぁぁぁぁ！！！！！」

叫びが、響き渡る。

「チッ。しゃーねぇなァ」

少年は緋をはためかせ、漆黒を天に翳して舞い降りる。

「ファッキンッ！！」

《ぐぎゃっ！？》

漆黒は、不浄切り裂き解放す。

「テメェ等邪魔だ。すっこんでろ」

少年は、背を向けたまま見向きもせずに白き姫君を赤き守護者に押し付ける。

「こっからは、俺の戦場だ！！」

背後から繰り返される警告を跳ね除け、一歩を踏み出す。

震える姫君は声を出すことも出来ず、その力強い後ろ姿に目を惹か

れる。

感謝と警告を繰り返す守護者は、見知らぬ者を警戒するも負傷した足が邪魔をする。

少年は、漆黒を担ぎて不浄を見据える。

一度だけ、チラリと背後に目を向けた後、少年は不満げに舌を打つ。

「チッ。邪魔だな」

リズムを刻むかのようにタンタンっと、足で地面を叩く。

瞬間、大地が隆起し少年と少女達を分かつ。

隆起する大地は、街を囲うように広がり決して越えられぬ壁となる。

少女達は、隆起した大地に立つ少年を唖然とした表情で見つめる。

はためく緋が、暗い空に映える。

担う漆黒が、暗い時の流れに逆らう。

「行くぜ、ストォォォォム！！！！！」

少年が吼え、

『オーケィ、ラァァァァイル！！！！！』

漆黒が答える。

少年は、初速から最高速で駆け出す。

今、長きに渡る序章は終わり、少年の物語は始まる。

命を削る戦いの中で、少年は何を得られるのだろうか。

今、“悪”を名乗る氣功魔術師の物語（タタカイ）が始まる。

継ぎ接ぎの魔術師、始動。

幼き少女と“悪”の本

幼き少女は本を読む。

読むのはいつも、この本だ。

ハッピーエンドでもなければ、バッドエンドでもない物語。

主人公は一人の青年。

けれど彼の心理描写は一つもない。

ただひたすらに彼が悪として書かれている。

人間の汚い部分も書かれているが、それ以上に青年が汚く悪い存在として扱われていた。

物語の中の青年は常に戦っていた。

戦と聞けば、単身で乗り込み両軍を完膚無きまでに叩き潰す。

誰よりも多くの人を殺し、誰よりも多くの人を瀕死に追いやった。

この世に存在する全ての悪を濃縮した存在として、彼は存在していた。

彼を討つために人々は団結し、いがみ合っていた国同士も手を結び、全ては彼を殺して平穏と安寧を手に入れるために一致団結した。

彼との戦を繰り返す内に人々の絆は強くなり、掛け替えのない友へと変わっていく。

それに比例するように戦での死人やけが人は減り、徐々に青年が押されていく。

しかし彼には敗走と言うモノが存在しなかった。

幾たびの戦を繰り返しても不敗。それが彼だった。

どれだけ斬りつけても立ち上がり、何度射抜かれても突き進み、敵対する者全てを斬り伏せた。

手に握られているモノは、咎十字と呼ばれる異形の武器。

その一薙ぎで十人を吹き飛ばし、舞うように、跳ぶように、動き回り、一瞬たりとも止まることなく屠っていく。

彼らはいつも敗走を余儀なくされた。

彼らはいつも青年からの追撃を恐れたが、彼が背を向けた相手に切りかかることは、ただの一度も無かった。

まるで、敗走していく彼らを嘲笑うかのように見下ろすだけだった。

圧倒的な力の差に、人々段々と青年に戦を仕掛ける回数が減っていく。

やがて、戦を仕掛ける回数が限り無くゼロに近くなってきた頃、青年の姿がパタリと見えなくなった。

理由はわからない。

けれど、人々は歓喜した。

あの“悪魔”を退けたのだと。

それ以来、青年を討つために団結した国々は同盟結び、平穏と安寧を手に入れた。

その日以降、青年を見た者はいなかった。

だが、青年はいなくなったのではない。

新たな戦場（カリバ）を求めてさまよっていると言われている。

事実、青年は大きな戦があると必ず現れる。

あとは同じ。

ただ、同じことを繰り返し、繰り返し、そして唐突に去る。

この本には、それしか書かれていない。

絶対悪の青年と、彼を討たんとすることで団結する人々。

それだけだ。

この本を読んだ人は、皆が皆口を揃えて青年を悪と言う。

理由は様々だろうが、もっとも大きな理由はおそらく皆同じだろう。

“彼の真意がわからない”

人は、理解出来ないモノに恐怖する。

この物語は、まるでそれを利用したかのような書き方だ。

彼の心理描写は無く、人々の心理描写はある。

彼には感情移入しにくいが、人々には感情移入しやすい。

彼がなんなのか全く書かれていないが、人々のことは事細かに書かれている。

彼の在り方を例えられるモノが無いが、人々の在り方を例えられるモノは有る。

人々については多くのことが書かれているのだが、彼については何も書かれていないようなものだ。

ただ一つ、彼が悪ということを除いて――

幼き少女は本を読む。

読むのはいつもこの本だ。

表紙は、黎明の空が照らす雪の丘。半ばで折れた様々な刀剣が大地に突き刺さり、丘の上には一振りの剣が孤独に突き刺さっている。

裏表紙には、激しい風が吹き荒ぶ黄昏の荒野。一振りの剣が、力強く突き立っている。

著者は不明。

そしてタイトルは――――

第一話

「おおおおおおおおおおおおお！！！！！」

ライアネルは、黒緋霊装（クロア）をはためかせて駆け抜ける。

十キロはあった距離は、氣を用いた飛行によって既に詰めてある。

今は魔力ブースターを用いて加速しながら大群の中を縦横無尽に駆け回っていた。

「ファッキンファッキンファッキンファッキンファッキンッ！！」

ストームが振るわれる度にグールの頭が割れ、首が舞い、腐った血が辺りを汚す。

正面から来るグールを左手に持ったストームで上段から切り伏せ、背後から迫るグールに対しては魔力ブースターを用いた蹴りを放ち、ブースターの威力だけで頭を吹き飛ばす。

右手から迫る数匹に対しては、ジャグリングをするかのようにストームを回転させ左手から右手に持ち換えて一閃する。

魔術や氣功を行使しない、純粋な体術と剣術。そして魔力ブースター。彼はこれら三つのみを用いて出来損ないの吸血鬼と言われているグールを次から次へと狩っているのだ。

しかも彼の、彼自身の身体能力は、人間の一般人を基準としてもそれ以下の数値を叩き出してしまう程に弱い。

縛られ少ない魂と、世界からの拒絶で弱りきった体では、それが限界。

幾ら体が回復しても、幾ら筋力をつけても、あまり拒絶を受けないこの世界に居ても、彼は人間。

全ての性能において、根本から吸血種には勝てない。

だが、どうだろうか。

彼は人間でありながらグールを倒している。

どんなに贔屓目に見ても殺している。

どれだけ霊装の力を借りているからといっても、根本は人間。

しかも、対吸血種用専門武器であるフィアマも無い。

それでも彼は容易にグールを倒しているように見える。

それは、とても異常な光景だった。

「チィッ！！　メンデェッ！！」

漸く三十匹ほど狩った頃だろうか、苛立たし気にそう言うとライアネルはバックステップを踏み、目の前のグールから少し距離を置いた。

「ガァッ！！」

咆哮と共に氣を纏い、天高く舞い上がる。

彼にとって、魔力を流す回路（ミチ）も氣を流す路（ミチ）も、血管であり神経だ。

どちらも同じものを使っているように見えるが、その実全く違う…
…とは言い切れない。何故なら、本当に同じものを使っているのだ
から。違いがあるとすれば、それはどちらがどちらを使っているか、
唯それだけだ。

魔の回路（ミチ）を血管とするのなら、氣の回路（ミチ）は神経。
魔の回路（ミチ）を神経とするのなら、氣の回路（ミチ）は血管。

二つは、決して交わること無く入れ替わり立ち替わる。

任意でどちらを使うか決められるが、決して混ぜぬよう気を配らね
ばならない。

もしその様なことをすれば、内側から己が力に喰い破られ死ぬこと
になる。

魔と氣を織り混ぜることに成功すれば莫大な力を手に入れられるが、
まず死ぬ。

それは避けられないことだ。

生ある限りは……。

『オイオイ、何処まで行く気だよッ』

どんどん高度を上げていくライアネルに、ストームは怒鳴り声を上げる。

「もうちょいだよッ」

高く高く舞い上がり、グールの群れを一望出来る高さまで上がるとライアネルはピタリとその場で止まった。

「チッ。やっぱ多いな」

苛立たし気に呟き、行使する力を切り替える。

「循環回路（シリンダー）―起動（セットアップ）」

使用する回路（ミチ）を、氣を流している血管から魔力を流している神経に切り替え、身体中を魔力で満たす。

瞬間、氣によって支えられていた体が落下を開始する。

内臓がせり上がってくるような圧迫感と悪寒が、容赦無くライアネルを攻め立てる。

だが、それすらも彼は楽しむ。

生を感じ入る為に。

「そろそろ行くぜ」

ライアネルは裡に意識を集中し、この一ヶ月の集大成を披露する。

「刀剣（ブレード）―精製（オン）」

掌に魔力が集中し、光と共にその形を形成していく。

創造理念、構築。
基本骨子、想定。
構成材質、精製。
製作技術、選定。

その過程に、今まで無かった工程を追加し変更する。

基本骨子、改変。
構成材質、追加。
製作技術、再選定。
……全行程終了、剣製完了。

全工程が終了すると同時に、一振りの剣（ツルギ）がその手に握られていた。

『おい、まさか“アレ”をやる気か？』

「たりめーだ。これを狩り尽くすにゃあこれくらいの火力が必要だ」

握られているモノはツヴァイハンダー。

だが、これは通常のツヴァイハンダーとは幾つか違う点がある。

まず重心が違う。この剣（ツルギ）は切っ先に重心があり、投擲用に加工されている。

次に、柄が僅かに長くなっておりそこにはびっしりと文字が刻まれている。

そして最後に、剣身に刻まれた文字。

これら全てによって、剣（ツルギ）は一つの殺戮兵器と化す。

ライアネルは殺戮兵器と化したツヴァイハンダーを握り締め、魔力ブースターを用いて再び宙を駆け上がる。

先程までと同じ高度まで駆け上がると、彼はツヴァイハンダーを持ち変え、投擲の体勢に入った。

「強化（バレット）―装填（セット）」

全身に強化を装填し、腕をしならせる。

「オゥルァァアアアア！！」

気合いと共にツヴァイハンダーを放つ。

黒緋霊装による身体能力の強化と、魔術による強化。そして魔力ブースターによる推進力。

これら全てが一振りの剣（ツルギ）に集約され、超常的な加速を見せる。

ツヴァイハンダーは空気を引き裂き一直線にグールの群れへと突き進む。

ライアネルとグールの丁度中間地点まで来ると、柄に刻まれた文字が光を放ち、次の瞬間柄が爆発を起こす。

爆発によって生じた力は、余すこと無く推進力へと変換され、更なる加速を見せた。

「爆ぜろォッ！！」

その言葉と同時に着弾し、次の瞬間には大爆発を巻き起こした。

遥か上空にいるライアネルにも届く爆音と爆風。

身を焦がすような熱風が、容赦無く体に叩き付けられる。

「ぐぉ！？」

あまりの勢いにライアネルの体は空中で錐揉みする。

「こなクソがァッ！！」

魔力ブースターを全方位に放ち、無理矢理錐揉みを止める。

そこから体勢を立て直し、眼下に目をやる。

そこには、阿鼻叫喚の地獄絵図があった。

◆
◆
◆

青年はひた走る。

街道を駆け抜け、人垣を掻き分け、ただひたすらに走った。

街を出ると、青年の目には王族直属の部隊とその数キロ先に見える二人の少女。そして、街を囲う高い土の壁が見えた。

足を止めること無く突き進み、大地を強く踏み締め飛び上がる。

青年は直属部隊を飛び越え、その勢いをそのままに少女達の下へと駆け寄った。

「彩歌姫、茜君。大丈夫かい？」

青年は白髪の少女、彩歌と、赤髪の少女、茜に問い掛ける。

「はい。私は無事ですが、彩歌様が……」

肩を抱いて震える彩歌の手を握り、茜は心配そうに問いに答える。

「わたくしは、大事無いです。それより、わたくし達を助けて下さった方が今あの壁の向こうに居ますっ。どうか、彼を助けてあげてはくれませんか？」

声を震わせながらも、彩歌は懸命に言葉を紡いだ。

「いや、それはダメだよ。まずは君の身の安全が最優先でね、先に君を街に連れ戻すよ」

「ですがっ」

「ダメだ。君はこの国の王女。国を担う者の一人であることを自覚しなさい」

「しかし！」

「でも、しかしもないよ。その人なら必ず僕が連れ戻すから、君は先に街に戻りなさい」

諭すように優しく、けれど叱りつけるように強くそう言うと、青年は聳え立つ壁を見上げた。

高い、壁。まるで断崖絶壁を真下から見上げているような感覚に陥りそうだ。

そんな事を思う余裕がある自分に苦笑し、もう一度壁を見上げると、そこから小さな緋色が見えた。

その色を見た瞬間、青年の目の色が明らかに変わった。

「君……なのかい？」

呆然とした様子で立ち竦む青年。

今までそんな姿の彼を見たことがなかった二人は、驚きを隠せないといった表情で青年の顔を見上げていた。

「ッ！！」

遥か上空に在る緋が、何やら動きを見せる。

それを見た瞬間、青年は慌てて二人の少女を抱え上げた。

「なっ、何をなさるのですか！？」

「いくら貴方と言えど、彩歌様にこのような無礼を働くことは許しませんぞッ！！」

脇に抱えられた二人の少女は、暴れこそしないものの抗議を繰り返す。

「ここに居たら巻き込まれるっ。もしあれが僕の知ってる“アレ”

ならまず間違いなく！！」

「はい！？　何を言っているのですか、貴方は！！」

青年の言葉に、茜は意味がわからないと抗議する。

彩歌も、彼の言っていることは理解できないが、兎に角危険だと言うことだけは理解出来た。

「走るよ！　しっかり捕まってて！！」

「えっ？　ちょっ――」

「きゃあああああ！！」

僅か数歩でトップスピードに乗った青年は、来た道を物凄いスピードで駆け抜ける。

「せっ、説明をわぷっ、要求します！」

物凄い風圧に舌を噛みそうになりながらも、茜は言葉を紡ぐ。

「ハハッ。今喋ると舌を噛むよ？」

「誤魔化さないでくガッ！！　～～～～～！？」

指摘をされたそばから舌を噛む茜を見て、青年は苦笑する。

「説明は後でするよ。それよりも早くこの場から離れないと――」

青年の言葉は最後まで紡がれること無く遮られた。

突如として起こった激しい爆発によって。

第二話

◆◆◆

ゆっくりと、大地に降り立つ。

荒れ地は焼け爛れ、グールの群れは八割方葬られた。

それでもまだ二百は居るであろう喰人鬼の群れ。

ライアネルは、ゆっくりとストームを上げていく。

「さて、こっからがホントのショータイムだ」

不敵な笑みを讃え、右手に持ったストームを地面と水平に大きく後ろへ振りかぶる。

『張り切んのはいいけどよ、持つのか？』

先程の飛行と大規模な破壊をもたらしたツヴァイハンダーの剣製でどのくらい力を持っていかれたのかと問うストーム。

その問いに対してライアネルは、

「魔力八割、氣七割」

『なんだ、意外と残って――』

「持ってかれちまった」

『無ぇのな、オイッ！！』

と答えた。

流石にその答えにはツッコミを入れるストーム。

「いや、なんつーか、こう……ねぇ？　はしゃぎ過ぎた。久々のシャバで」

『はしゃぎ過ぎた、じゃねぇよ！　もっと後先考えて使えよ、バカ！！』

「バカじゃねェよ、くそったれ！！　つか、グラスティアの感覚に慣れてねェンだから仕方ねェだろがッ」

『そんなことオレの知ったこっちゃねーよ！！』

「知っとけボケッ！！」

『じゃあ、知っといてやるから理由を述べろッ！！』

「メンデェッ！！」

『うおいっ！！』

擬人化していれば間違いなく芸人よろしく動作入りのツッコミ入れていたであろうと思えるほど鋭い声をあげる。

『流れ的に説明だろ、そこは！』

「どーしてもして欲しかったらしてやるよ」

『何故上から!?』

「グラスティアのマナと龍脈を感じとれんような駄剣には上からで十分だ」

『マナと……龍脈?』

徐々に徐々に近付いてくるグールを視界に納めつつ、ストームは世界の流れを感じ取らんと意識を集中する。

『……ああ、そう言うことか』

「わかったか?」

ものの数秒で流れを感じ取ったストームは、これなら仕方が無いと呟いた。

『ああ。まさか、ここまでの力がグラスティアにあるとは思わなかったぜ。しかもかなりのじゃじゃ馬だ。慣れるまでは苦労しそうだな』

「だろ?　俺がバカみたいに力を消費した理由、わかったよな?」

『ああ、わかった。これじゃあ仕方無ぇな』

すまねぇと謝り、ストームは再びグールに意識を向ける。

「行くぜ、ストーム。準備はいいか？」

眼前を蠢くグールを鋭く睨み付け、右腕に力を込める。

『ああ。いつでもオーケーだぜ、ライル』

答え、信頼に応えんと身を預ける。

「久遠剣一の型――」

右腕に氣を込め、しならせる。

「――緋翼！！」

言葉と共に漆黒を振るう。

右腕に込められた氣が刀身を走り、撃ち出される。

斬撃が、飛ぶ。

激しく空気とぶつかり合い、高温の刃と化す斬撃。

高温の斬撃。その名を、緋翼と言う。

緋翼は、ギャギャギャギャギャッ!!　と空気を削る音を立てながら次々と高温の刃でグールを焼き斬って行く。

斬られた断面からは火の手が上がり、首を斬らずともグールを確実に殺していく。

灰すらも残さず、焼き尽くして。

「こふっ……」

その光景を油断すること無く見つめていたライアネルの口から、少量の血が流れ落ちる。

ぷるぷると震える右腕を無意識の内におさえ、口内に溜まった血を吐き出す。

『……行くぜ？』

ライアネルの体を、性格を、誰よりも理解しているストームは、心配の言葉はかけない。

ただ、戦闘意思を提示するのみ。

「ああ。行くぞッ」

そんなストームの心遣いを理解しているライアネルは、ただそれに答えるのみ。

互いが互いを理解し信頼し合っているからこそ出来る、アイコンタクトすら必要としない意思の疎通。

断ち切れぬ強い絆の下、二人は共に駆け出す。

腕を振るい、漆黒が出来損ないの鬼を斬る。

足を突き出し、ブースターを用いて吹き飛ばす。

単調ながらも重く速い攻撃を屈んでかわし、サマーソルトを叩き込む。

常に囲まれぬように注意しながら、ライアネルは走り続ける。

一匹、また一匹と確実に命を刈り取り、少しずつ少しずつ相手の数を減らして行く。

その動きを続けて二十匹ほど狩った頃だろうか、何の前触れもなくライアネルの膝がガクッと崩れた。

突如として起こったそれに反応出来ず、そのまま地面に膝を着いてしまう。

そこに、まるでそれを待っていたかのようなグールの一撃が迫り来る。

『相棒！！』

無理矢理ライアネルの手から離れ、ストームは即座に擬人化をして迎え撃つ。

『ボサッとしてんなよ？　相棒！』

「すまねェな、相棒！」

ライアネルは黒緋霊装の内に隠すように仕舞っていた蒼天を抜き放ち、一振りを左手に持ち、もう一振りをストームに投げ渡す。

「あと六十三匹、狩り尽くすぜ？」

『いいぜ、相棒。けど、それまでもてよ？』

互いに不敵な笑みを浮かべ合い、グールを見据える。

「ファック。舐めンなよ？　――って言いてェけどよォ、既に口ン中が鉄くせェ」

『……お前、ホント大丈夫か？』

「ああ。今ン所はな」

駆け出し、二人は息の合った動きで互いをカバーし合いながら突き進む。

『そうか、よッ！！』

前方から迫るグールの頭を蒼天で割り、次いで左から迫るグールの首を刀身化した左腕で刎ね飛ばした。

「ファッキンッ！！」

少量の力で効率良く力を発揮出来るように魔力ブースターを使い、大上段から振り下ろす。

二人は、時に離れ、時に寄り添いながら戦い続ける。

互いに背を預け、斬り結ぶ。

「……チッ、囲まれたか」

『みてぇだな』

残り三十を切った頃だろうか、グールの動きが明らかに変わってきた。

二人を囲い、様子を見るように一定の距離を保っている。

『何で急に動きが良く……。補食対象も居ねーのに』

その言葉を耳にしたライアネルは、ある一つの可能性に至り、それを確認すべく注意深く辺りを見渡した。

「……オイ、ストーム。周り良く見てみろ。明らかに数が合わねェ」

『はあ？　数ぅ？』

ライアネルの言葉の意味がわからないストームは、眉を寄せて訝しげな表情をする。

「バカかテメェ。良く見てみろ。死体の数が明らかに足りねェ、つ

ってンだよ」

『死体？　……ッ！！　グール共の死体か！』

死体の数が、グールの死体の数が、確かに足りないのだ。

ツヴァイハンダーと緋翼によって跡形も無く消し飛ばされたものを除いても、明らかに足りなさ過ぎる。

ただ、辺りに飛び散った血液だけが、確かにそこに居たことを証明している。

『コイツら……共食いしやがったのか！？』

「そうみてェだ」

苛立たしげに舌を打ち、もう一度辺りを見渡す。

「グールの特性は――覚えてるよな？」

『ああ、覚えてるぜ。補食による成長……いや、進化、か？』

「まァ、そんなとこだ」

グールの特性。それは補食によるヴァンパイア化だ。

グールは、人を喰らうことにより腐り行く肉体を維持し、知性を付ける。

中には、人だった頃の記憶を取り戻す者もいるが、グールとなった以上はもう人へは戻れない。

人を喰らい、喰らえば喰らうほど力を付ける。

やがて腐敗は終わり、グールは人肉を求めなくなる。

そして、人の血を欲するようになる。

それがヴァンパイア化だ。

その頃には完全に人の姿となり、力はダンピールなど優に及ばず、クルースニクやクドラクをも凌ぐものとなっている。

そんなモノを相手にするのは、流石に今のライアネルにはキツすぎる。

だが、幸いなことに今この場に居るグール共からはそういった兆候は見られない。

まだ、グールの域にいるのだ。

それを感じ取ってからのライアネルの行動は早かった。

「ストーム。もっかい緋翼を撃つ。刀身化しろ」

『無茶言うな！　今のお前の体はガタガタじゃねぇかッ。そんな奴に緋翼なんぞ撃たせんぞッ！！』

先程から何度も口内の血を吐き捨て、脂汗をかきながら時折脇腹を押さえるライアネルを見ていたストームとしては、これ以上の無理はさせたくないのだろう。

『その肋。さっきの蹴りん時にもらったカウンターで折れてんだろ』

「知るか、ンなモン。もらった憶えすらねェ。いいから早くしろッ」

無意識の内に押さえていた肋から手を離すと、ライアネルは蒼天を黒緋霊装の内に仕舞い、右手をストームに向ける。

「早くしろ、ストームッ!!　早くしねェと後ろのグール共が死体を喰い終えちまう!!」

鋭く人垣の向こうを睨み、怒鳴り付ける。

『はあ？　何言ってんだよ。後ろのグール共って――』

何を言っているんだ、コイツは？　とでも言いた気な表情でライアネルの顔を見た後、その視線の先に目を向け――

『――なっ!?』

――その表情が一変した。

ストームは、見えてしまったのだ。死体や人垣を形成しているグールの陰に隠れるようにして死体を貪る、

……腐りかけのグールを。

『オイオイオイオイオイオイオイオイィィィ！！！　腐りかけって何だよ、腐りかけって！！』

「ファック。見てわかンねェのか？　駄剣！」

『いや、わかるがよォ……理解したくねぇんだよ！』

ガツガツと周辺の死体を喰らい尽くすと、腐りかけのグールはゆっくりと立ち上がる。

《あ〝あ〝あ〝》

そいつは、ゆっくりと、此方に向かってくる。

……俺等を喰らいにくるか、それとも――

二人はいつでも迎え撃てるように構えを執る。

《あぐぅ！？》

――共食いに走るか、か。

ライアネルは、目の前で行われる生々しい行為を鋭い目付きで睨み付け、体を満たす力が魔力であることを確認する。

魔力残量は残り僅か。回路に装填された術式は、強化二発、弱化一発、変化一発。空いた回路は二本……。

新たに術式を組むには魔力量が心許ない。

今ある術式を強化するにしても、状況打開は見込めない。

周りのグールだけなら今手元にある術式だけでもいける自信はある。だが、腐りかけを相手にするには若干心許ないことは否めない。

やはり、氣を使うか？　それとも――

いや、やめよう。考えてる暇はない。

思考を切り、ライアネルは徒手空拳で構えを執る。

一匹を喰い終えた腐りかけのグールが、苦しみ悶え出す。

内側から体が爆ぜ、血肉が飛び散る。

飛び散った箇所から新たな肉体が形成され、腐った血肉が腐りかけに昇華する。

『あれ、ヤバくねぇか？』

冷や汗を流しながら、蒼天を握り締める。

「今更だな。そう思うんならサッサと刀身化しろ」

『うわぁ～、グロいな～』

目の前で行われる生々しい行為を前に、ストームはどこか軽い口調でそんなことを言う。

「……」

それに対して、ライアネルは無言で睨み付ける。

『グっ、グロいな～』

「……」

睨み付けられてもその調子を続けようとするストームに対して、ライアネルの拳が握り締められる。

『グロボッ！？』

もう一度グロいと言おうとしたストームの鳩尾に、固く握り締められた拳が叩き込まれた。

悶絶するストームを冷たく見下ろし、今の一撃で落ちた蒼天を拾い上げる。

「役立たずはいらん」

そう言い放つと同時に強化を自身に装填し、駆け出した。

両の手に剣（ツルギ）を担い、グールの人垣に蒼き軌跡を描いて行く。

二つの軌跡は、時に離れ、時に交差し、時に重なる。

だが、その全てが防がれないし避けられている。

どの一撃もグールの体を切り落とすには至らず、深くもなく浅くもない微妙な傷を付ける程度だ。

「チッ。消化してやがる」

ライアネルは一度距離を取り、右の蒼天を逆手に持ち変える。

『オイ、大丈夫なのか、相棒？』

先程の攻防を見ていたストームが、警戒を強めながら近付いてきた。

「大丈夫かどうかは今の攻防見てりゃアわかンだろ？」

『なら大丈夫だ。と言いてぇ所だが、明らかに動きが変わってきたな。もしかしなくても消化か？』

「ああ。もしかしなくても消化だ」

ライアネルの言葉に、ストームは顔を歪める。

『ってぇことは、知恵をつけたか。それに身体能力に肉体強度もそれなりに上がってるみてぇだな』

「しかも厄介なことに、喰ったのは殆んど戦闘経験の強い奴等らしいな。上手く蒼天の刃をズラして防いでやがる」

『蒼天龍の刃をか？』

「ああ。ムカつくぜ」

苛立ちを隠さず、ライアネルは構えを取る。

順手で持った左の蒼天を前に出し、逆手に持った右の蒼天を体の近くに構える。

『その構え……得物は月詠刹那じゃなくていいのか？』

「ちっとばかし勝手は違うが、構わねェよ。……それに月詠うるせェし」

言うなり蒼天を握り締め、勢い良く踏み出した。

手頃な距離に居たグールに狙いを定め、大きく身を捻る。

独楽を彷彿させるその動きは、流れるような動作で左の蒼天をグールの首に滑らせ、次いで右の蒼天を左の蒼天の峰に叩き込む。

遠心力が上乗せされた一撃がグールの首を半ばまで斬り、次いで加えられた二撃目がまるで達磨落としでもするかのようにグールの首を切り離す。

回転の勢いは殺さずにそのまま後ろ回し蹴りを放つ。

蹴りは、切り離された頭に直撃し、大きく後方へと吹き飛ばす。

「残り二十七！！」

勢いは殺さず、そのまま次の動きへと繋げていく。

『いや、二十六だ！！』

右隣のグールに斬り掛かろうとした時、漆黒の刃が一撃の下にその命を絶つ。

それを見ていた他のグール共が、二人の動きを封じんと一斉に躍り掛かってきた。

全方位から迫る二十五匹のグール。

飛び上がり、頭上から攻めんとする腐りかけのグール。

まるでタイミングを計ったかのような動きで、二人の逃げ場を完全に奪う。

「『チッ』」

二人は同時に舌打ち、素早く行動に移った。

ライアネルは、牽制の意味を込めて蒼天を頭上に投擲し、右腕に力を込める。

指先から肩まで魔力を流し、腕が悲鳴を上げるまで込め続ける。

『いきなり“あれ”やる気かよ。人間の体じゃ持たねぇだろうに……。どうなっても知らねぇぞ！』

ライアネルに近付いてくるグールを、腕を、足を、刀身化し、蹴散らして行く。

「グッ、グググッ」

右腕に込められた魔力が、腕一本の許容量を越え、暴れ狂う。

内側からズタズタに引き裂かれるような痛みが、右腕から全身へと駆け巡る。

「オ、オオオ……」

ビキビキと音を立てて、肉が、皮が、骨が、砕け、壊れ、変容していく。

紫の光が、右腕を包んでいく。

『あと二十匹！！』

頭上のグールが蒼天を弾き、落下スピードに合わせて腕を振り上げる。

ファックッ！！　溜めが……足りねェ……！！

しかも……言うことも聞かねェ！！　このままだと、半端に化け物化しちまうっ。

……いや、そんなこと気にしてる隙はねぇ！！

半端でも構わねェっ。腐りかけは、今ここで狩るッ！

力を溜めていた右腕を解放する。

拳は握られていない。

力を込めている時から、拳は開かれ引き裂くための形をしている。

右腕が、跳ね上がる。

「■■■■■――――――！！！」

形容しがたい咆哮と共に解き放たれた右腕は、腐りかけの頭を鷲掴みに――

「――――■■■■■■！？」

――出来なかった。

腐りかけのグールが、空中で回避行動を取ったわけではない。

目測を誤ったわけでもない。

ただ、腕が爆ぜたのだ――

――内側から。

決して楽観視出来るモノではないのだが、腕が使い物にならないほど酷いものではない。

時間を置けば、十分再起は可能だ。

だがしかし、今すぐには不可能だ。

ライアネルは思案する。

腐りかけの影は、すでに自分を覆っている。

時間は無い。

ダラリと力無く下がった右腕を睨む。

切り落として投げるか？

そんな考えが、脳裏を過る。

いや、牽制にすらならねェか。

その考えを即座に切り捨て、再び思案する。

ストームを使うか？　……いや、無理だな。どういう訳か知らねェが、グール共は俺の体の状態を理解してやがる。

それに今ストームの擬人化を解いたら、まず間違いなく殺られる。

ムカつくが、今俺が腐りかけのみに集中出来ンのもコイツのお陰だ。

じゃあ、どうする？

蒼天は呼んでも来ねェ。

剣製も心許ない。

さっきので残りの殆どを持ってかれたから、術式の自己装填は三発。
解放射出は一発。ブースターは一発半が限界だ。

氣を使うか？　……いや、内氣功ならまだしも、外氣功は武具を介さなきゃまともに使えねェ。しかもストームくらいだ。百パーセントの力を伝えられンのは。

振り上げられた腕が、迫り来る。

もう考えてる隙はねェッ。

腐りかけの頭に狙いを定め、ライアネルは手を伸ばさんとする。

聖骸布の巻かれた、左腕を。

「オオオオオッ！！」

気合いと共に腕を伸ばすが、行動に移るのが僅かに遅かった。

腐りかけの手は、爪を立て、今まさにライアネルの頭蓋を砕かんとしていた。

もう間に合わない。

誰もがそう思えてしまえるような、絶望的な状況。

だが、彼は諦めなかった。

己が信念の下、最高速から――

「ガァッ！！」

――加速した。

放たれたのは、威力も何もかも完全に無視したデタラメなフック。

氣も魔力も込められていない、純粋な一撃。

しかし、それだけでも十分だった。

黒緋霊装により十二倍に跳ね上がった身体能力は、彼の想いに応えてくれたのだ。

腐りかけのグールは、顎を砕かれ、腐敗した血肉を飛び散らせながら錐揉みする。

出来たのは一瞬の隙。

その一瞬を、彼等は活かすことが出来ない。

「くっ、想いが――」

ただ一つ、

《ぐぎょっ!?》

「なっ!?」

舞う雪と共に現れた、鉄の雨を除いて。

円錐状の雨は、一瞬にしてグール共の脳天を寸分違わず穿ち、一息の下に殲滅する。

勝利の女神は、少年達に微笑んだのだ。

「やぁ、戦友。六千年ぶりだね」

「テ、テメェは!?」

一人の、青年を連れて。

◆◆◆

緋の少年が駆け、黒の男が刃を振るう。

次々とグールが屠られて行く光景を眺めながら、銀の男は口角を吊り上げる。

遠く、高い場所から、遥か遠くを眺め見つめる。

浮かべる笑みに残忍さは無く、まるで何かを楽しみにしているかのようだ。

視線は緋を追い、片時も離れること無く、笑みもそのままだ。

――と、急にその笑みが消えた。

鋭くなった視線の先には、超重量のランスを片手に持った青年が居る。

緋の少年は、青年と幾つか言葉を交わした後、顔に手を当て何やら考え込んでいる。

その姿を見て、銀の男は再び笑みを浮かべた。

暫くそうして少年を眺めていようとしたが、ふと、視線を感じてそちらの方を見た。

少年から僅かに視線を逸らした先。そこには、先程の青年が居た。

青年はジッと此方を見つめ、警戒を露にしている。

その視線を不快に感じた銀の男は、身を翻しその場を去って行く。

「近い内に逢おうか。緋色の少年よ」

その言葉を残して――

第三話

◆◆◆

雪が降る中、青年はランスを持って少年の前に立つ。

「やぁ、戦友。六千年ぶりだね」

「テ、テメェは!?」

驚きのあまり目を見開き、開いた口が塞がらない。

「ハハッ。なんて顔をしてるんだい、君は?」

青年は、何処か抜けたような笑みを浮かべてライアネルの肩を叩く。

「おまっ、ラキフェスか?　ラキフェスなのか!?　クルースニク・ラキフェスだよな!?」

がくがくと青年の肩を揺する。

「ハハッ。何を言っているんだい？　何処からどう見ても僕だろ？」

がくがくと揺れながら答える青年。いや、ラキフェス。

まさか再び彼に会えるとは思っていなかったライアネルは、肋骨と右腕から全身へと駆け巡る痛みに無視――

「ぐぉっ！！　いっっっつ～～～。あ～、くそっ！！　無駄に痛ェ。バカみてェに痛ェ。無意味に痛ェ」

出来ず、呻き叫ぶ。

「ハハッ。怪我をしているのに大声を出したり、僕を揺すったりするからそんなことになるんだろう？」

「ファック！　黙れマヌケ男ッ。つか、なんでテメェがこの世界に、グラスティアに居やがるッ！！」

そう言いきると口内の血を吐き捨て、自己治癒力を高める為に内氣功を行使する。

と言っても残りの氣の量が少ない為、気休め程度にしかならないが。

「ん？　何を言っているんだい？」

ライアネルの言葉に、ラキフェスは首を傾げる。

「君は一度死に、再びこの地に生まれ落ちたんだろう？　二代目や三代目のように」

「……はぁ？」

ちょい待て。ちょい待てよ。

二代目や三代目のように？　この地に生まれ落ちた？

確かラキフェスには俺が転生を繰り返してるってことを話してたよな。

だから二代目三代目の話が出ンのはわかる。

だがよォ、世界が同じってどう言うことだ？

しかも二代目三代目ってことは、俺はずっと同じ世界に来ていたのか？

いやでも、それならわかるはずだ。

世界そのものが激変でもしない限りは……。

上がらない腕を無理矢理上げ、激痛に耐えながらもライアネルは右顔面を覆うように手を当て、考える。

根のように、深く、広く、思考を張り巡らす。

だが、体は思いの外弱っていたらしく、脳が正常に作動せず考えが纏まらない。

すでに足下も覚束ず、上体がフラフラと揺れている。

もう何時膝が折れてもおかしくなさそうだ。

『おい、相棒。大丈夫か？　かなり顔色悪いぞ？』

蒼天を回収してきたストームが、ライアネルの顔を覗き込みながら問いかける。

「……」

しかし、ライアネルはその問い掛けに答えることは無く、ただただ思考を張り巡らす。

世界が激変？　三代目は半精霊。しかも世界最後の精霊。それが死を迎えたから世界のバランスが狂ったのか？　それとも、世界の構造が、根本が、変異を起こしたのか？

だがしかし、それは俺が精霊であることを前提とした仮説。二代目は人間だ。世界を変革させるような力はなかったはず……

いや、二代目が全力で戦う時は龍脈を乱してしまう。

それが原因で天変地異でも起きたのか？

いやでも、な……。

だが、否定出来る材料も無ければ、肯定出来る材料も無い。

言い切れるモンなんて何もねェ。

これ以上考えても仕方がないか、と思考を打ち切り、右手を下ろす。

ストームの手から無言で蒼天を受け取り、黒緋霊装の内に仕舞い込む。

それに合わせるかのようにストームは擬人化を解き、鞘に収まる。

それを確認したライアネルは、ずっと黙って周囲の警戒をしていたラキフェスに声をかけた。

「すまねェ、ラキフェス。さっきの話の意味がわかんねェ。とりあえず、どっか休めるとこでゆっくり話を聞かせてくれねェか？」

「ん？　ああ、いいよ。じゃあ、僕の家に来ないかい？　彼処なら休めるし、医者も呼べる。それに、鳴美（ナルミ）もいるよ？」

「鳴美？　鳴美。鳴美、鳴美鳴美鳴美……」

鳴美と言う名に今一ピンと来ないライアネルは、眉を寄せて必死に記録を漁り出す。

何故かはわからない。が、思い出さなければ酷い目に遭う、と魂が叫んでいる。

主に面倒臭い、と言う意味で。

「鳴美、鳴美……」

記録を読み漁っていると、脳裏に一人の少女の姿がチラついた。

初めて会った頃は、衰弱し弱りきった、まだ十二歳の小さな少女。

最後に見たのは、寂しげな、それでいてどこか力強い意思を感じる瞳を持つ、十五に成長した少女の姿。

「鳴美・アルフォード……。そうか。あのチビは今、お前ンとこに居んのか」

優しげな、まるで親が子に向けるような穏やかな笑みが、知らぬ間に浮かぶ。

「鳴美・クロムハーツ、だろう？」

「ファック。ふざけんな。俺に娘は居ねェ。それに俺の名は、敵しか生まねェンだ。アイツに名乗らせる訳ねェだろが」

そう言うと、ライアネルはラキフェスに背を向けて壁に向かって歩き出す。

「娘は……ねぇ」

ニヤニヤ笑いを浮かべ、ライアネルの背を見つめるラキフェス。

「姉でも妹でも友人でも知人でもなく、娘、ねぇ……」

似合わないニヤニヤ笑いをしながら、ラキフェスはライアネルの隣に並ぶ。

「テメェ……随分と見ねェ内に似合わねェセリフとツラが出来るようになったなじゃねェか」

「ハハッ、知らない内に君に似てしまったらしいね」

「言うようになったな、間抜け面」

「ハハッ」

懐かしき、友とのやり取り。

そう、懐かしいもののはずなのだ。懐かしいもののはずなのに、そうは感じられない。

その原因は、ライアネル自身が一番よく理解している。

記憶の記録化。

記憶と記録は全くの別物だ。

記憶は、その時その瞬間に感じたことを、感覚で、感情で感じ取ったものを覚えていられる。

“ココロ”が、あるのだ。

だが、記録にはそれが無い。

記録は全て、必要なことのみを箇条書きにした文字の集まり。そこに、感情は無い。

故に偽らねばならない。

本来感じるべき感傷を、実感を、何処か希薄な感情で――

「……ゴフッ」

そんなことを考えていると、何の前触れもなく体が悲鳴をあげた。

痛みにより麻痺していた痛覚が感覚を取り戻して行く。

内氣功で高めていた自己治癒力が追い付かず、意味を成していない。

何時気絶してもおかしくないような激痛が全身を駆け巡る中、ライ

アネルは表情一つ変えず口内の血を吐き捨て前のみを見据えている。

それを見てもラキフェスは何も言わず、ただ隣を歩いていく。

二人の間に、会話は無い。

会話など無くても、まるで通じ合っているかのようだ。

「なぁ、ラキフェス」

「なんだい？　ライル」

自身が作り出した高く聳え立つ壁に足を当て、先程からの疑問を口にした。

「この壁の向こうにうじゃうじゃ人がいんだけど、ありゃ何だ？」

「ああ、それは多分都市防衛部隊の人の気配じゃないかな？」

「都市防衛部隊ぃ？　なんだ、その弱っちそうなのは」

「ハハッ、弱っちそうかい？　なかなかの部隊なんだけどねぇ」

「ハッ！　テメェのなかなかは優し過ぎるし、広過ぎンだよ」

などとラキフェスの評価を鼻で笑いながらも、

――コイツ等……結構出来るな。今の俺じゃあ、コイツ等に太刀打ち出来ねェな。

腹の中では壁の向こうに居る部隊をかなり評価していた。

んまぁでも、脅威となる存在から街一つ守るんならそれなりの戦力は――

――……いや、待て。つか、防衛部隊って言うくらいだから怪しい奴は即拘束って有り得るよな？

俺は怪しい奴になるよな、どう見ても。

……どうする？　ラキフェスがなんか言ったとしても無理だろうし、そもそも俺はこの世界の生まれじゃねェから戸籍、だったか？　あ

れもねェ。

……捕まる要素しかねェな、俺。

ライアネルは小さくため息を吐き、ラキフェスの方を向く。

「なぁ、ラキフェス」

「ん？　なんだい？」

よれよれの白衣のポケットから煙草を取り出し、火を着ける。

「俺、その都市防衛部隊とやらに捕まるんじゃねェか？」

ゆっくりと、肺を紫煙で満たし、

「……ハハッ、捕まるだろうね」

吐き出しながら笑う。

「ファッキンッ！！」

「へぷっ！？」

間抜け面に、飛び蹴りが炸裂する。

「ファック！　その爽やか間抜け面を目も当てられねェ間抜け面にしてやっからそこに直りやがれッ！！」

「あたたたた……」

蹴られた額を擦りながら、何処か抜けた笑顔で立ち上がるラキフェス。

「今なんで僕は蹴られたんだい？」

特にダメージも無さそうな様子にこめかみをピクピクと痙攣させながらも、ライアネルは口を開く。

「人がどうすりゃ面倒事になんねェかって悩んでンのに、テメェって奴ァ」

怒りに体を震わせるライアネル。

「もう、いい。お前はそう言う奴だって、嫌ってェほど理解してるしな」

その言葉にラキフェスはハハッと笑い、ズレた眼鏡の位置を調節する。

「さて、話を戻すが、基本的に面倒事は面倒だから遠慮したい。が、俺一人。ないし、お前とならは別にいい」

「僕も面倒事は遠慮したいが……僕の意思はどうなるんだい？」

「ンなもん知るか。掃き溜めにでも捨てとけ」

「酷すぎないかい？」

「だが、鳴美が居るんなら話は別だ」

「聞いてるかい？」

「黙れ。俺は一端姿を消して街に入る。大体の家の場所さえ教えてくれりゃあ、あとは自分で行ける。お前は医者を用意しとけ」

「僕の意見は無視、か。ハハッ、まぁ別に構わないけどね」

そう言うと、簡単な家の位置と周りの風景。それから道筋をライアネルに教え始めた。

先程あの様なやり取りがあったと言うのに、まるで何事もなかったかのように、日常風景の一部のように感じてしまえる空気が、そこにはあった。

「大体の場所はわかった。あとは自力で行くから、お前は先行って医者な」

「ハハッ。わかってるよ」

その言葉を聞いたライアネルは、再び壁に足を押し当てる。

壁を壊す為に力を入れようとしたその時、背後からラキフェスが声をかけてきた。

「あっ、そうそう」

「ア？　なんだ？」

ライアネルは首だけを動かして問い掛ける。

「その上着の色。それは隠した方がいいよ」

黒緋霊装を指差し、緋色はダメだと指摘してくる。

「って、それくらいは知っ「なんでだよ」てないんだね」

「知らねェよ、この世界の常識なんざ」

「この世界って、また範囲が広いね」

「仕方ねェだろが。俺はこの世界とは違う世界から来たんだからよォ」

「……違う世界から？　よくわからないけど、それはまぁ……また

の機会にでも聞こうかな」

「そうしてくれ」

スッと、前を向く。

まるで、顔を見られたくなくて背けたかのようだ。

それを見たラキフェスは小さく笑い、手に持っていた超重量のランスを革製のベルトに引っ掻ける。

「それじゃあ、僕は先に行くよ。真っ直ぐ家に来るんだよ？」

「なんだそれ。俺はガキじゃねェンだぞ？」

「ハハッ。君はよくフラフラしてたからね。一応だよ」

「そーですかい、っと。ああ、そうそう。鳴美には俺が居ることまだ喋んなよ？　今会うとまた面倒だからな」

「ハハッ、わかってるよ」

背中越しにその言葉を聞いたライアネルは、錬金術を行使する。

土が崩れ、砂煙が舞う。

「先に行け。俺は姿を消してから行く」

「わかったよ。じゃあ、先に行って待ってるから」

まだ砂煙が舞う中、ラキフェスは壁に開いた穴から颯爽と出て行く。

途端、壁の向こうが騒がしくなった。

その騒がしさが遠ざかるのを、壁に持たれながら待つ。

まだ多くの人の気配があるが、段々と壁の向こうが静かになってきた。

「さて、俺等も行くか」

『歩けんのか？』

「一応な」

『……そーかよ』

フラりと立ち上がるライアネルを見て、ストームは小さく息を吐く。

『全く……』

その呟きは小さく、風に流されて行いった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5263o/

継ぎ接ぎの魔術師　～“悪”の味方の物語～

2011年11月27日02時54分発行